板倉遺跡の再評価

—出土遺物・遺跡立地を中心に—

川添和暁・鬼頭　剛

尾張低地帯では、縄文時代後期・晩期の遺跡の状況が、近年注目されつつある。本稿では、これまで考古学的に検討がなされてこなかった、板倉遺跡について若干の検討を試みた。当遺跡は、板倉貝塚として、縄文海進時の海岸線の範囲など自然地理学の立場からの発言が多いものである。本稿は、現在、遺物として確認できる土器片、および遺跡周辺の堆積状況などから、板倉遺跡の評価を行ったものである。地質学的検討から谷地形などの表層地形の解析を行なった上で、見つかったとされる貝層は、縄文海進による中部粘土層由来のものではないことを明らかにした。一方で、当地は縄文時代後期末から晩期以降にかけての活動の場として考えられることから、現状ではさまざまな問題点はあるものの、この貝層も当時の人為的作用による可能性を提示した。

はじめに

縄文時代後期・晩期は、東海地域において、遺跡の分布がある程度まとまって確認できる時期として、全国的にも注目される。しかし、東海地域内の各小地域において、遺跡の形成・分布は一律に同質的ではなく、それぞれ特性を有しつつ、各小地域間は有機的な関係を保持していたものと考えられる。従って、列島史的には渥美貝塚群に代表される貝塚のみがしばしば取り上げられるものの、近隣小地域の様相との比較・検討を、今後は大いに行なうべきである。

今回は、遺跡の分布状況が希少ではあるものの、着実に活動の痕跡が確認されつつある、尾張低地帯の遺跡について取り上げる。尾張低地帯は、現状では大小さまざまな流路を含む平坦な地形であるものの、発掘調査により、遺跡形成時の地形は、現状とは大きく異なり、かなりの起伏が存在していたことが明らかになりつつある。近年、弥生時代における濃尾平野の遺跡立地を考察した論考も発表されている（石黒2004・2006）。

しかし、濃尾平野に展開する遺跡をすべて一括して提示しても、各遺跡の諸様相を埋没化させてしまう恐れがある。ここでは、まず、旧尾西市域周辺を取り上げていく。この地域は、木曽川が西側で接する地域であり、濃尾平野の奥部にあって、現状でも標高の低い地域である。この区域で、どの段階から人が活動できるほどの安定した地盤が存在したかによって、縄文海進・海退の問題や、その後の河川堆積状況によって、現状からは確認しづらい、当時の活動の場が推定できるであろう。本稿では、不明な点が多い板倉遺跡を中心に取り上げることで、上記の問題を追究していく上での糸口としたい。

なお、「地質学的見地による板倉遺跡立地の検討」を鬼頭が、それ以外を川添が執筆した。

板倉遺跡について

現在、板倉遺跡に関しては、伊藤光夫のメモ（尾西資料館で保管）と、井関弘太郎の言及（井関 1981：33 頁）および『尾西市史』に記載があるのみである。井関および『尾西市史』の記載は、伊藤光夫のメモ（以下、伊藤メモとする）をもとにしているようで、伊藤メモとほぼ同じ内容である。これらの文章をもとに、遺跡の状況を概観する。

遺跡は、三条板倉地内（現在の一宮市三条字北平 47-1 ほか）に位置しており、付近の標高は約 6 m である。遺跡が発見されたのは、1968 年 3 月 11 日で、尾西市特水事業の下水管施設工事中に、地中から貝殻が出土したことが契機とされる。当時木曽川高校郷土クラブの伊藤光夫らによって発見されたもので、当時の一宮市史編纂委員会に連絡した後、3 月 20 日には名古屋大学考古学研究室の澄田正一による確

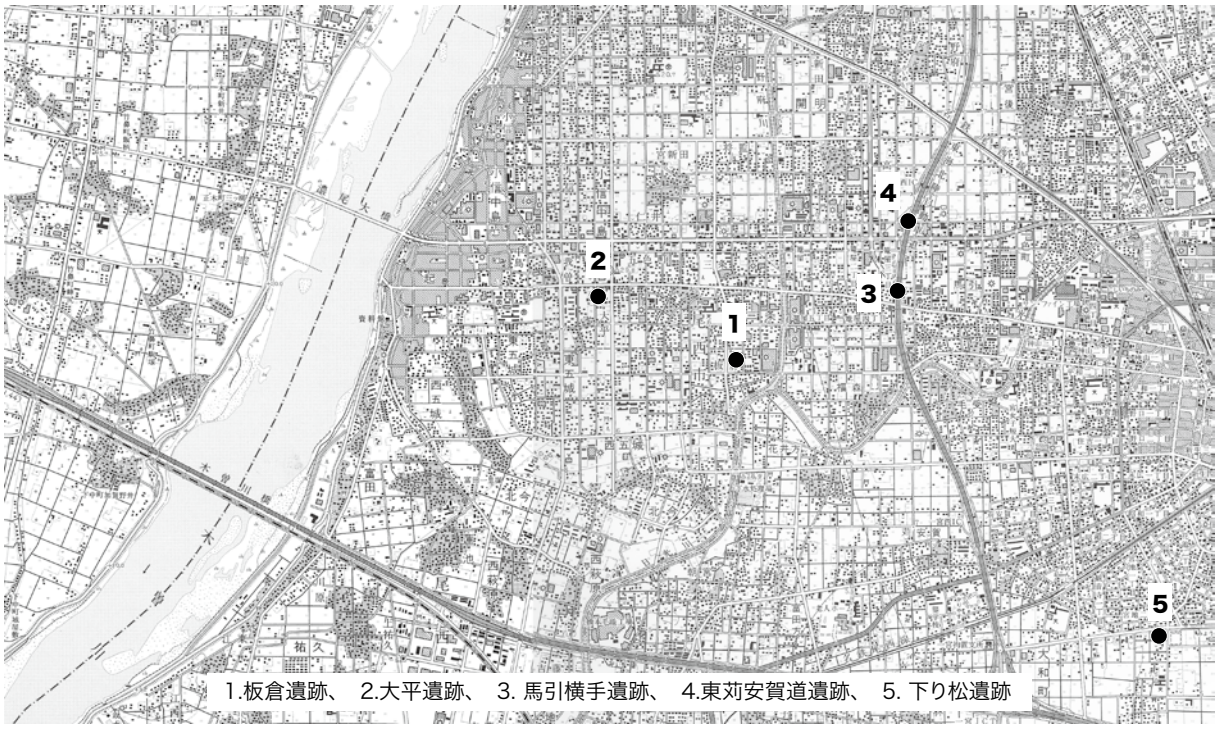


図1　遺跡位置図（国土地理院発行2万5千分の1地形図「一宮」「竹鼻」を1/2に縮小）

認のための現地調査が行われたようである。

伊藤メモには、当時の作業に当たった人夫の話を総合したとして、遺物出土状況の記載がある。それによると、不明確な点が多いとしながらも、表土層・粘土層の下に黒色有機土層が表れ、部分的にピット状の貝層が含まれ、以下は全部、砂層からなっていたとのことある。貝層及び黒色土層中より、土器・木の実・古木などを採集することができたようで、遺物包含層は地表下４～５ｍと推定されている。出土遺物は、土器・動物遺体・植物遺体があり、土器は縄文晩期、動物遺体では貝層の貝種としてカキ（マガキか？）・ハマグリが、植物遺体では木片・木の葉・種実（ドングリ・ヒシ・クルミなど）が出土し、クルミには人工の手が加えられたと思われるものも見つかっているとの記載もある。

貝層が発見されたということで、板倉貝塚という遺跡名で登録されたものの、この遺跡についての考古学側からの検討は、その後行なわれないままとなっている。一方で、それ以降、板倉遺跡については、自然地理学側からの言及が中心となった。井関弘太郎は、縄文後期・弥生後期の土器を含むとした板倉遺跡の存在に注目し、今日の海岸線から約 30km も離れた地点で海棲貝種が出土している事実についての解釈を容易に出せないとしながらも、当遺跡が埋積浅谷底に位置していたということを、原賢仁の修士論文の研究成果として提示している（井関 1981：33 頁）。海津正倫は、板倉遺跡の立地する埋積浅谷を朝日遺跡で見つかった埋積浅谷同様に、縄文中期の小海退により下刻されたことにより形成され、縄文時代後期頃には、内湾最拡大期あるいは海進高頂期の旧海岸線付近における上部砂層の堆積がほぼ終了したとした（海津 1988・1994：231 ～ 239 頁）。縄文海進・海退に際する東北端の定点として取り上げられている。

現在、尾西資料館には、板倉遺跡関連の資料として、コンテナ一箱分の遺物が収蔵されている。内容は、土器 40 片程度のみである。土器は、縄文土器と S 字口縁をもつ台付甕などの古式土師器が認められる。点数としては縄文土器の方が多いようだが、図化し得た分のみを掲載する（図２・写真１）。１は、深鉢口縁部で、波状を呈するものである。外面は LR を地文として、波頂部に向かってと口縁部・頸部境には、いわゆる半截竹管文＊が施されており、波頂部下には

＊　縄文時代後期末から晩期前半にみられる、いわゆる半截竹管文に関しては、原体の一部は巻貝工具による沈線文であることを提示した（川添 2007）。なお、その内容は、『南山大学博物館オープンリサーチセンター 2007 年度年次報告書』に掲載予定である。

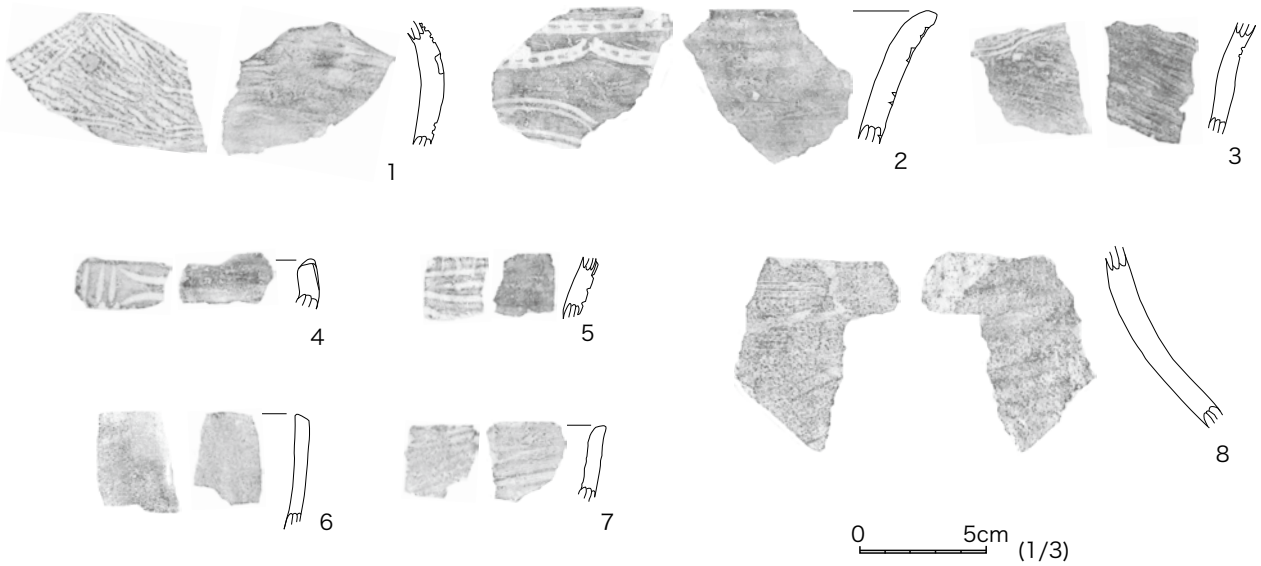


図２　板倉遺跡出土土器

巻貝殻頂側による刺突文が認められる。内面には横方向の巻貝条痕が確認できる。２は深鉢口縁部で、外面は最終調整ナデの上に、口縁端部側にはいわゆる半截竹管工具による押し引き沈線が直線と弧線の組み合わせで展開し、下方には同工具による沈線文が弧状に展開する。内面は巻貝条痕が認められる。３は深鉢の胴部片で、外面・内面ともに巻貝条痕が施されており、外面にはいわゆる半截竹管文が認められる。４はやや波状を呈する鉢類で、波頂下には三本の縦沈線、そして横方向に上下に弧状沈線が展開する。文様構成は八日市新保Ⅱ式に類似するが、横方向の沈線が２本と１本少なく、かつ三叉文につながる縦沈線との連結も認められない特徴があり、時期が若干下るかもしれない。５も鉢類の胴部片で、平行する沈線内を刻むような縦方向の単沈線が連続し、その下に弧状沈線が３条横に展開する。外面・内面ともにナデ調整で、橿原文様の一種と考えられる。６～８は無文の土器片で深鉢と考えられる。６は外面・内面ともに最終調整はナデで、７・８は外面・内面ともに巻貝条痕が認められる。遺物は後期末から晩期初頭に属するものと考えられるが、多くは現在言われるところの下別所式に併行する一群かもしれない（増子 2003）。

以上の遺物の状態は、器面および破断面の磨滅の度合いは低く、調整などの観察もほぼ良好に行なえ得る資料が多い。遺物から推測すると、堆積後に二次堆積などの著しい移動を示す状況にはない。

また、板倉遺跡の近隣における縄文時代晩期の遺跡として、大平遺跡・東苅安道遺跡・馬引横手遺跡がある。大平遺跡で、灰層の検出を見たのは、当地が活動の場であったことを示唆するもので（伊藤和 1990）、馬引横手遺跡（伊藤太 1999）との関係を考慮する必要があろう。東苅安道遺跡では、遺物が二次堆積などの流れ込みの状況であったとしながらも、遺物の時期などがまとまっており、ごく付近での活動＊が想定されよう。この遺跡では、土器以外に石鏃・打製石斧・磨製石斧の出土もあり、注目される（伊藤和 1990・伊藤太 1998）。板倉遺跡の場合も、出土状況に不明な点が多いものの、遺物に著しい磨滅は確認されず、活動の場が近くに存在していた可能性が考えられるのである。しかし、この遺跡に関しては、遺物の出土レベルが他の遺跡に比べると低い傾向にあり、このことは遺跡の性格を考える上で、重要な点となろう。いずれにしても旧尾西市三条から篭屋三丁目への東西に展開する区域は、縄文時代晩期には、人が活動しうる安定した地盤が広がっていたものと考えられ、それぞれ時期を異にした活動痕跡の結果を示している。

＊　特に尾西市調査において流れ込みの状況と見える出土状況自体が、当時の活動痕跡の結果である可能性も否定できない。もしかしたら、愛知埋文調査区側も同様の状況だったかもしれない。

地質学的見地による板倉遺跡立地の検討

板倉遺跡周辺における現在の地表面の起伏状況を把握するために表層地形解析を行なった。また地表下の状況を調べるため尾西市役所が実施したボーリングコア資料を入手してその層序を検討した。詳細を以下に記す。なお、本論で使用する地名については最近の市町村合併による地名の変更は考慮しておらず、旧地名で表記することをお断りしておく。

（1）板倉遺跡周辺の等高線図

板倉遺跡周辺における現在の表層地形解析のため等高線図を作成し、地形表面の起伏状況を解析した。作成には愛知県一宮市発行の1/2,500「尾張西部（一宮）都市計画図」を用い、等高線間隔 0.2m で等高線図を作成した。なお、等高線を描画するにあたり区画整理や道路建設に伴って盛り土あるいは掘削され、周りの標高値の分布傾向とくらべて明らかに調和しないとき、その標高値は採用しないものとした。

解析にあたってまず広範囲での地形の起伏状況を把握するために東西約 6.0km、南北約 4.0km の等高線図を作成した。つぎに広範囲での起伏傾向が判明したのち、板倉貝塚周辺の東西約 3.9km 、南北約 2.1km のさらに詳細な等高線図を作成した（図 3）。板倉遺跡は東海道本線尾張一宮駅から約 3.3km 西に位置し、遺跡からさらに西方約 2.5km には木曽川が南流する。伊勢湾にそそぐ木曽川の河口から約 31.5km 北に位置している。図 1 の等高線図全体では標高 8.2m から標高 4.0m までの等高線が描かれ、東側で標高が高く、図の中央から南にかけて低くなる傾向がある。解析範囲内には低平ながらも尾根部と、谷部や閉曲線で囲まれた凹地がそれぞれ認められる。尾根について、まず図の中央付近に県道西萩原北方線ののびる方向に平行して、標高 6.2 ～ 6.6m までの南北方向（小信中島から東五城にかけて）に細長くのびる尾根部が認められる。尾根の長軸方向に直交する最大幅は約 1.0km、最小幅は約 0.2km である。この尾根の東側縁辺部の、板倉貝塚から約 0.8km 北西の標高 5.4m 付近に縄文時代の大平遺跡が位置している（岩野，2002）。図の東側の大和町福森から萩原町花井方にかけては標高 6.0m 以上の閉曲線で囲まれて孤立丘状を呈する凸地形の点在が認められる。

つぎに谷部について述べる。本論で示した図の範囲には収まりきらず示されていないが、広範囲（東西約 6.0km、南北約 4.0km）の起伏を解析した図では東縁を深坪町から馬引まで、西縁を篭屋から板倉遺跡を通り東五城にいたる北東 - 南西方向に、谷の長軸方向の水平距離約 4.7km で長軸方向に直交する最大幅約 1.2km、最小幅約 0.4km の大きな谷状の凹地が認められている。この谷状地形の東側にあたる馬引から北側にかけては東海北陸自動車道を谷の底としている。また、本論で示した図の西側には標高 4.6 ～ 5.2m で東西約 1.4km、南北約 0.4km の東西方向にのびる等高線の閉じた閉曲線からなる凹地が認められ、板倉遺跡はその凹地の中でもっとも低い標高値がみられる北東縁に位置している。等高線図のさらに西側には西縁を小信中島から起を通り、西五城、北今にいたる標高 4.0 ～ 6.4m で北西から南東方向にのびる谷状の地形も認められる。

（2）板倉遺跡周辺のボーリング資料

つぎに地表下の状況を調べるため板倉貝塚周辺で尾西市役所により調査された 4 地点のボーリング資料を手に入れた。それらを便宜的に西側から地点 1、地点 2、地点 3、地点 4 とした（図 3・図 4）。地点ごとに層序の詳細を記す。

地点 1 は尾西市冨田字橋詰において 1987 年（昭和 62 年）に尾西市立冨田保育園の建設にともなう事前調査で実施されたものである。板倉遺跡からは約 1.98km 南西にある。ボーリング調査報告書には標高に関する記載がみられない。そこで愛知県一宮市発行の 1/2,500「尾張西部（一宮）都市計画図」の該当地域の標高値を参考にして、地表面を標高 4.6m とした（以下では標高に換算して標高値で記載し、他のボーリングコア資料でも同様に記載する）。下位層より標高 -25.47 ～ -23.07m は礫径 5 ～ 20mm の円礫を主体とする中礫層である。標高 -23.07 ～ -15.06m は下部ではシルト質細粒砂層、上部で細粒砂層からなる。標高 -15.06 ～ -9.00m は砂質シルト層からなり、下部 (標高 -15.06 ～ -13.60m) には少量の貝殻片および腐

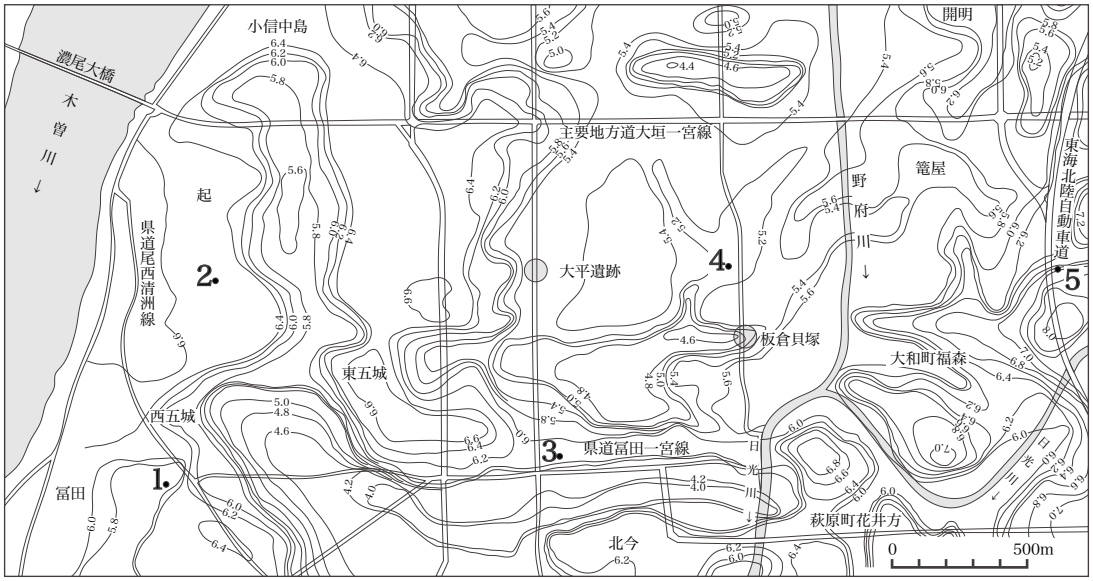


図３　板倉遺跡周辺の等高線図
数字１～４は尾西市による試錐地点，５は馬引横手遺跡を示す．
等高線（m）は愛知県一宮市発行の 1/2,500「尾張西部（一宮）都市計画図」の標高値を基に 0.2m 間隔で作成．

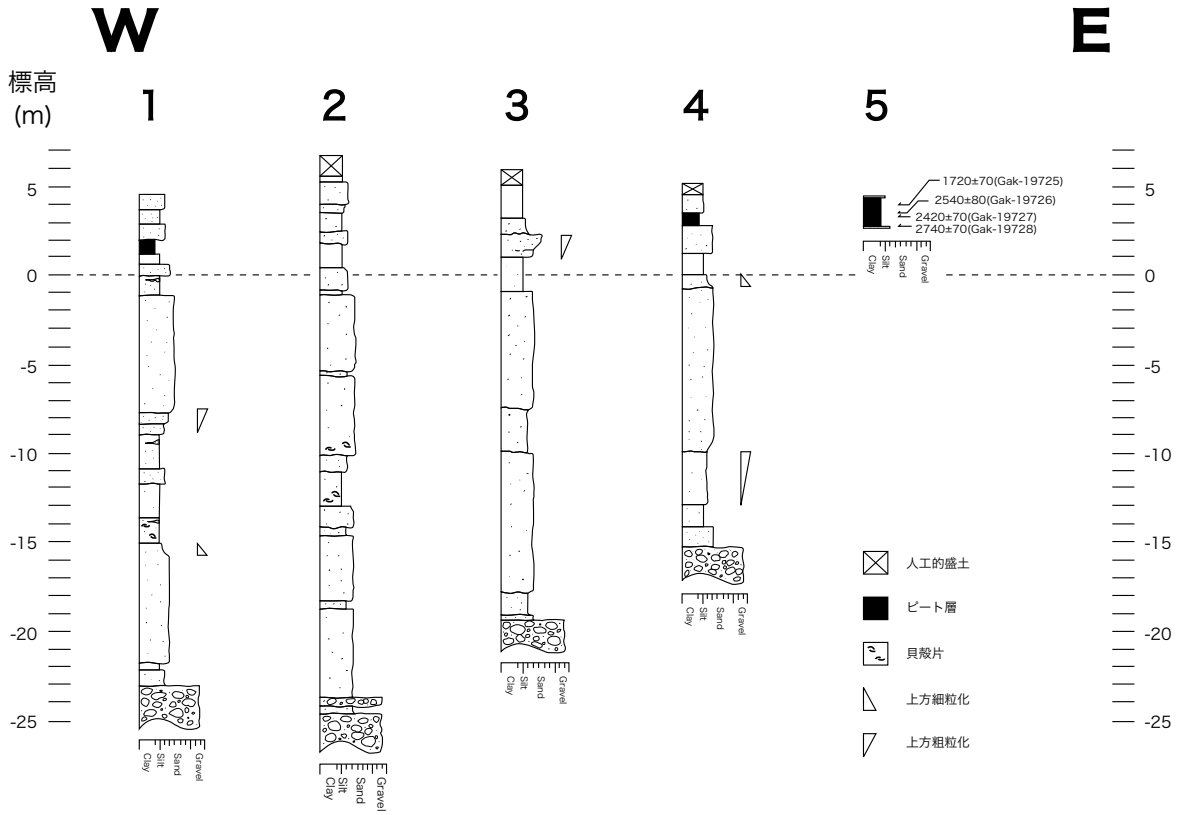


図４　板倉遺跡周辺の東西方向の層序断面図
数字１～４は尾西市（現一宮市）による試錐地点，５は馬引横手遺跡を示す．いずれも地点の位置は図１を参照のこと．地点５の馬引横手遺跡の数値は放射性炭素年代値を示す（鬼頭ほか，1999）．各地点間の距離は均等に配置しており、実際の距離ではないことに注意．

植物が挟まれる。また標高 -11.73 ～ -10.87m には腐植物の混じるシルト質細粒砂を挟む。標高 -9.00 ～ -1.06m には層厚約 8m の厚い砂層が堆積する。標高 -1.06 ～ 1.27m は砂質シルト～シルト層で、標高 0 ～ 0.67m に細粒砂層を挟み、地層全体に腐植物が含まれる。標高 1.27 ～ 2.00m は暗黒灰色のピート層からなり、植物の繊維質が残る。標高 2.00 ～ 4.60m はシルト質細粒砂層からなる。

地点 2 は尾西市起字西生出において 1984 年（昭和 59 年）に尾西市立起小学校の建設にともない実施されたものである。板倉貝塚から約 1.95km 西にある。下位層より標高 -26.93 ～ -23.73m は礫径 5 ～ 30mm の円礫ないし亜円礫を主体とする中礫層である。標高 -24.80 ～ -24.40m には細粒砂層が挟まれる。標高 -23.73 ～ -12.93m は細粒砂層からなり、淘汰は良好である。まれに粗粒砂層が挟まれる層準もみられる。また、標高 -18.78 ～ -18.27m と標高 -14.66 ～ -14.41m にはシルト混じりの細粒砂層が挟まれる。標高 -12.93 ～ -11.06m は砂質シルト層である。砂は細粒砂を主体とし、本層下部には貝殻片を含む。標高 -11.06 ～ -10.13m はシルト質細粒砂層である。標高 -10.13 ～ -1.07m は淘汰良好な細粒砂層で、標高 -5.60 ～ -5.33m にはシルト質細粒砂層を挟む。また、標高 -10m 付近に貝殻片が混じる。標高 -1.07 ～ 4.00m まではシルト層ないし砂質シルト層とシルト質細粒砂層との互層からなり、標高 -0.80 ～ -3.60m には腐植物の混入する層準もみられる。標高 4.00 ～ 5.33m は褐色～淡青灰色を呈するシルト混じりの細粒砂層で、シルト成分が多い。標高 5.33 ～ 5.53m は褐色の砂質シルト層からなる。標高 5.53 ～ 6.80m は人工的な盛り土である。

地点 3 は尾西市三条字宮西において 1987 年（昭和 62 年）に尾西市立第一中学校屋内運動場および柔剣道場の建設にともない実施されたものである。板倉遺跡から約 0.80km 南西にある。下位層より標高 -21.06 ～ -19.30m は礫径 2 ～ 30mm の亜角礫を主体とする中礫層である。標高 -19.30m ～ -0.93m は細粒砂層を主体として、シルト質砂層を挟む。標高 -0.93 ～ 1.00m は暗黒色～暗灰色のシルト層ないしシルト質砂層からなり、標高 0 ～ 1.0m には腐植物が混入する。標高 1.00 ～ 2.26m は細粒砂層からなり、上部に粗粒砂が混ざるようなる上方粗粒化傾向を示す。標高 2.26 ～ 3.20m はシルト質砂層であり、標高 3.20 ～ 5.06m は暗褐色～暗青色の腐植物の混じるシルト層である。標高 5.06 ～ 5.93m は人工的な盛り土である。

地点 4 は尾西市三条字苅において 1983 年（昭和 58 年）に尾西市立三条小学校の建設にともない実施されたものである。板倉貝塚から約 0.23km 北にある。下位層より標高 -17.13 ～ -15.13m は礫径 20 ～ 30mm の中礫層である。標高 -15.13 ～ -14.06m は細粒砂層であり、少量の腐植物を挟む。標高 -14.06 ～ -12.73m は砂質シルト層である。腐植物が混じる。標高 -12.73 ～ 0.13m は細粒砂層を主体とする。標高 0.13 ～ 1.33m はシルト層からなり、少量の腐植物を含む。標高 1.33 ～ 2.87m は淘汰良好な細粒砂層からなる。標高 2.87 ～ 3.60m は黒色のピート層である。標高 3.60 ～ 4.67m は褐色～暗灰色の砂質シルト層である。標高 4.67 ～ 5.33m は人工的な盛り土である。板倉遺跡の位置はこの地点 4 に近い。

板倉遺跡周辺の古地理環境の検討

（1）板倉遺跡周辺の堆積環境

表層地形解析の結果から板倉遺跡周辺の東西約 6.0km、南北約 4.0km の範囲には東縁を深坪町から馬引にかけて、西縁を篭屋から西五城にいたる最大幅約 1.2km の北東 - 南西方向にのびた長軸方向の水平距離約 4.6km の谷状地形が認められた。その谷状地形は板倉遺跡から西五城までを南西端としており、それはさらに小信中島から起、西五城、北今を結ぶ北西 - 南東方向の別の谷状地形に画される。この水平距離約 4.6km の谷状地形の位置は、現在の板倉遺跡周辺において北東から南西へ流れる日光川や北から南にむかう野府川の流下方向とは異なっている。とくに野府川は、表層地形解析により現れる起伏傾向とは斜交しており非調和的である。このような場合、のちの時代に古地形を横断する形で土地改変がなされたと考えられ、板倉遺跡形成の時代を考えるにあたり考慮する必

要はなくなる。日光川も、表層地形解析で現れた谷状地形からは南東方向にずれており、萩原町花井方で認められる標高 4.0 ～ 6.0m までの閉曲線で囲まれる凹地とは斜交し、非調和的である。日光川も解析範囲においてはのちの時代に改変された可能性がある。このように、板倉遺跡周辺における現在の表層地形解析結果をみると、現在その付近を流れる河川とは方向の異なる北東 - 南西方向の大きな谷状地形が認められ、板倉遺跡のある場所がその南東端にあたっている (図 3)。なおかつ板倉遺跡から東五城にいたる範囲には標高 4.6 ～ 5.2m で東西約 1.4km、南北約 0.4km の東西方向に細長くのびる凹地が認められ、板倉遺跡はその北東縁に位置する。以上のことから、かつて板倉遺跡の北東方向には北東 - 南西方向に活動的河川流路があり、それが放棄されてのちに閉じた池状の止水環境ができ、その縁辺部で板倉遺跡を形成したヒトが活動をしていた可能性が考えられる。

つぎにボーリングコア資料をもとに地下層序について検討をする（図 4)。ところで、自然地理学を専門とする井関 (1975)、海津 (1979) は沖積層中部泥層やその相当層の分布状況を濃尾平野の縄文海進時の古地理を考える上での根拠とした。沖積層中部泥層は地質学でいう完新統南陽層にあたる（古川 , 1972 ; 松澤・嘉藤 , 1954)。尾西市地域のボーリングコア資料では尾西市冨田の地点 1 において、標高 -15.06 ～ -9.00m に少量の貝殻片を含む砂質シルト層が認められ、尾西市起の地点 2 では標高 -12.93 ～ -11.06m に砂質シルト層がみられた。本層が南陽層の中部粘土層にあたる。いっぽう、尾西市三条の地点 3 と地点 4 の地下層序には、地点 1 および地点 2 で砂質シルト層がみられた標高には砂層が卓越し、地点 4 の標高 -14.06 ～ -12.73m の砂質シルト層が中部粘土層にあたると思われるものの、両地点とも貝殻片を含むような典型的な中部粘土層に相当する堆積物は認められなかった。典型的な中部粘土層が認められない原因について、地点 1・2 と地点 3・4 との水平距離の間で中部粘土層がレンズ状に堆積し、ちょうど地点 2 から地点 3 までの間で中部粘土層がせん滅しているか、あるいは地点 3 や地点 4 付近にも当初は中部粘土層が堆積していたにも関わらず、その後の砂層の堆積作用により削剥されて保存されなかったことが推定される。しかし、地点 1・2 と地点 3・4 との堆積物の層相をみても明らかなように、地点 3 と地点 4 で標高 0m よりも下位にみられる砂層の卓越は、砂層を運搬する当時、地点 1 や地点 2 に比べてかなり河川の影響がつよい環境におかれていたことを示すものである。

（2）伊藤メモとの比較

つぎに板倉貝塚について述べた伊藤メモの記載について検討をする。伊藤メモの堆積物に関する記載では「地層に関しては直接見る事が出来ず、当時工事に従事していた人夫の話を総合してみた」とあり、伊藤自身は地層を直接観察したわけではないことがわかる。伊藤はつづけて「それによると、表土層・粘土層の下に黒色有機土層が表れ、部分的にピット状の貝層が含まれ、以下は全部「砂層」から成っていたとの事。これらの話しはいずれも不明確な点が多いのだが、全体に遺物包含層は地表下 4 ～ 5m と思われる」と記載した。伊藤の記載の黒色有機土層に着目すれば、板倉貝塚に近いボーリングコア資料である地点 4 の地下層序をみると、標高 2.87 ～ 3.60m に黒色のピート層が認められる (図 1)。この黒色のピート層に関連して、板倉遺跡から約 1.2km 東の尾西市篭屋で発掘調査された馬引横手遺跡のデータがある（伊藤編 , 1999)。馬引横手遺跡では標高 2.78m ～ 4.39m に黒色から褐色を呈する粘土層が確認されており、標高 2.76 ～ 2.78m の砂層中から得られた木材から 2740 ± 70 yrs BP(Gak-19728)、標高 3.32m の黒色腐植質粘土層の土壌が 2420 ± 70 yrs BP(Gak-19727)、標高 3.56m の黒色粘土層の土壌が 2540 ± 80 yrs BP(Gak-19726)、標高 3.98m の黒色粘土層の土壌が 1720 ± yrs BP(Gak-19725) の放射性炭素年代を示した（鬼頭ほか , 1999)。板倉遺跡に近い地点 4 で認められる黒色のピート層は馬引横手遺跡で確認される黒色～褐色の粘土層と堆積物の層相が類似している。ここで注意が必要なのは、単純に堆積物の層相が似ているからといってまったく同一のものであると断言す

ることはできないが、少なくとも層相と分布標高の類似した地層が、馬引横手遺跡では現在から約 2700 年～ 1700 年前までの放射性炭素年代を示した事実を参考とすることができる。この数値年代は伊藤メモにある遺物の所見で、縄文時代晩期～古墳時代にかけての土器がみられるとの考古学的な事実とも調和的であるのは興味深い。加えて伊藤メモには記載がないものの、板倉遺跡から出土した土器片を観察した筆者のひとり川添によれば、土器片群の中には縄文時代後期の遺物も含まれており、それらの表面には摩耗した痕跡がみられなかったとのことであった。これは板倉遺跡の地点か、あるいは遺跡からそれほど遠くない場所での縄文時代後期のヒトの活動をうかがわせ、古環境を考える上でも重要である。

いっぽう、伊藤メモには遺物包含層が地表下 4 ～ 5m にあるとの記載がある。現在の板倉遺跡の場所は表層地形解析で標高 4.6 ～ 5.2m にあたっているため、伊藤メモに従えば、遺物包含層は標高 0m 付近の層準にあたることとなる。板倉遺跡に近い地点 4 の地下層序を参考にすれば標高 0.13 ～ 1.33m はシルト層から構成されている。伊藤メモにある黒色有機土層が伊藤のいう遺物包含層にあたるとすれば、地点 4 の地下層序を参考とした場合、標高 0m 付近には黒色を呈するような堆積物の記載はみられない。加えて、伊藤メモには「貝類・貝層の大部分を占める「カキ・ハマグリ」は海水で生息する貝であり、おそらく、当時の海岸線がこの近くまで入っていたものと思われる」とある。このカキ・ハマグリなどの貝類に関しても地点 4 の地下層序を参考とすると、標高 0m 付近には貝類を産する記載はみられなかった。

以上の事柄をまとめると、伊藤メモが遺物包含層ととらえる黒色有機土層について、その層相のみに着目すれば板倉遺跡周辺でも同様の粘土層が認められ、板倉遺跡から約 1.2km 東の馬引横手遺跡を参考にすると現在から約 2700 年～ 1700 年前の数値年代が得られている。その値は伊藤メモの記載する縄文時代晩期～古墳時代にかけての遺物の出土という記載と調和する。いっぽう、遺物包含層が地表下 4 ～ 5m にあるとする記載を基にすると、現在の板倉遺跡付近の標高を考慮すると該当する地層は標高 0m 付近の地層であり、板倉遺跡に近い地点 4 のボーリングコア資料の地下層序には黒色を呈する有機物に富む堆積物の記載はなく、シルト層と細粒砂層が認められるだけである。伊藤メモの記載に従った場合、堆積物の層相の記載に着目するか、あるいは遺物包含層の深度に着目するかで、地下層序では層相の異なった 2 種類の地層が該当してしまうという矛盾した結果を導くこととなる。このようなことが生じた背景には、堆積物の記載が観察に基づかず、掘削を担当した作業者からの聞き取りを基にしていることと、掘削され地表までまとまって掘りあげられる過程で、もっとも深い堆積物から地表にいたるまでのものが混在した堆積試料に対して検討を行っていることが原因であろう。

総括

以上のことから、今回の分析により、板倉遺跡に関して、次のことが明らかとなった

1 . 出土遺物より、遺跡の形成時期の始まりは縄文時代後期末から晩期初頭が中心であると考えられる。遺物の状態などは良好であり、著しい磨滅なども認められないことから、遺物自体の著しい移動はなかったものと考えられる。石器の出土は確認できないが、まずはここが当時の活動の場であったと想定することが可能であろう。

2 . 以前から、当地域には、旧地形として、南西から北東方向にかけて大きな谷地形が存在していることがいわれている。板倉遺跡は谷に北接する地形の変換点付近に立地していたようである。

3 . 板倉遺跡は厚い砂層を基盤層とし、この堆積物は、河川の影響によるものと考えられる。

4 . 縄文海進を示す貝殻を含む中部粘土層の堆積は、板倉遺跡付近では認められない。中部粘土層は当遺跡の 1.5km 西側で、しかも堆積レベルは、標高 -10m 以下である。

特に、注目されることは、3 および 4 である。板倉遺跡形成時には、当然ながら既に海岸線はやや離れた地点に位置していたものと考えられ

る。かつ、遺跡の立地する地点に中部粘土層は存在しない。このことから、板倉遺跡に貝層が存在していたとするならば、河川の影響による砂層を基盤とする上位に、カキ・ハマグリという鹹水性の貝層の堆積が認められたことになり、かつ鬼頭は遺物包含層の出土レベル自体に問題点を提示しているが、周囲で確認されている中部粘土層のレベルに比べていずれにしても著しく高いことは注目できよう。板倉遺跡における貝層の形成は、少なくとも縄文海進によるものではないようである。

現在、貝殻などの資料が存在せず、さまざまな問題点があるために、確実に人為的廃棄であると断言はできないものの、まずは人為的廃棄の可能性を想定する必要があろう。最近の調査によって近隣の稲沢市域では弥生時代前期の須ヶ谷遺跡（石黒編 2008）や、中期後葉の一色青海遺跡（蔭山編 1998）で、貝層を包含する土坑が報告されている。板倉遺跡の場合が、このような土坑内の貝層廃棄か、黒色土の一部は貝層の腐植で、実際は貝層形成が顕著であったかは検証不能であるが、板倉遺跡の性格を考える上で、大きな手がかりとなるであろう。

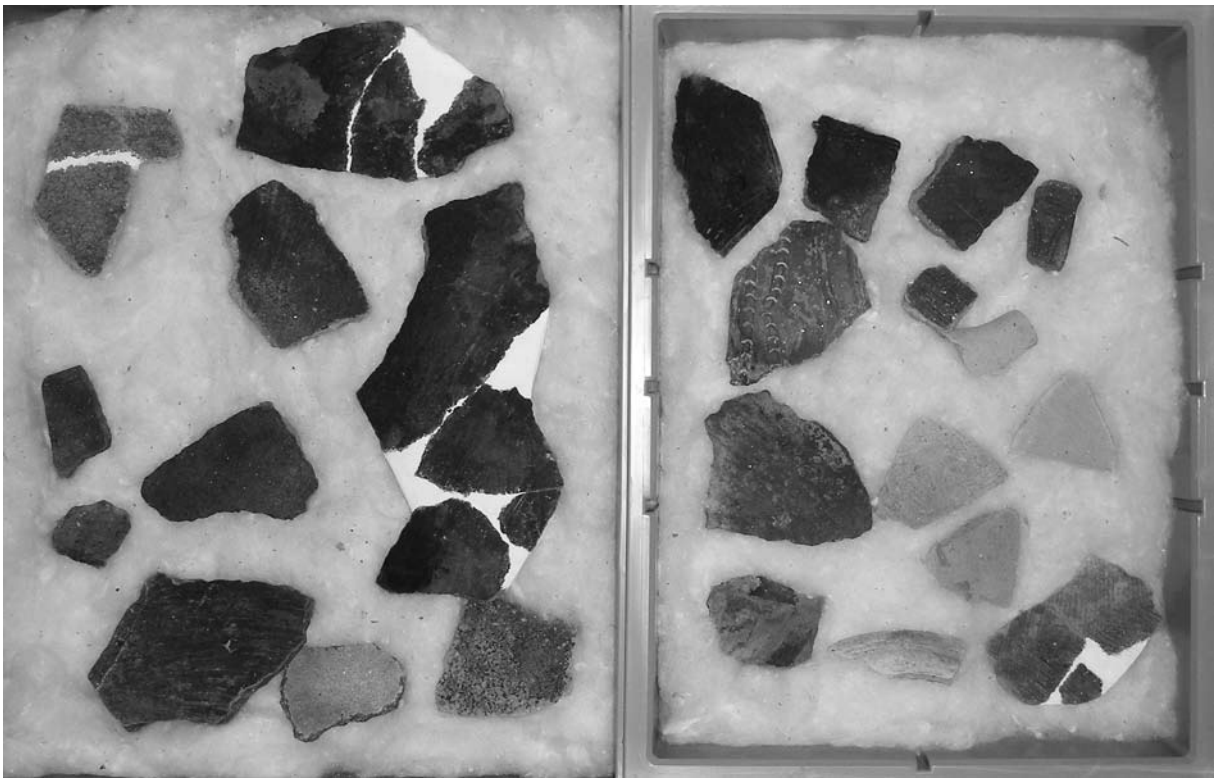
いずれにしても、板倉遺跡のみならず、谷地形を挟んだ微高地上に立地する遺跡の展開状況を、今後、詳細に検討する必要があろう。

謝辞

本稿を起こすにあたり、以下の機関および方々からご教示・便宜を賜った。ここに感謝の意を表する次第である。（五十音順・敬称略）

伊藤和彦・伊藤光夫・岩野見司・長田友也・神田年浩・久保禎子・鈴木　元・土本典生・愛知県埋蔵文化財センターの諸氏・一宮市教育委員会

なお、図面の作成において前田弘子氏・村上志穂子氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。



一宮市尾西歴史民俗資料館所蔵の板倉遺跡出土資料写真

川添関係文献

石黒立人 ,2004「弥生集落史の地平 その２―凹線紋系土器以前の弥生中期―」『研究紀要』 5 .15 ～ 28 頁。愛知県埋蔵文化財センター。
石黒立人 ,2006「伊勢湾周辺地域における弥生時代の平野地形について」『研究紀要』7.33 ～ 45 頁。愛知県埋蔵文化財センター。
井上吉貞 ,1968「大平遺跡発掘の思い出」『いちのみや考古』 2 .3 ～ 5 頁。一宮考古学会。
岩野見司 ,1970『新編 一宮市史 資料編一 縄文時代』一宮市。
井関弘太郎 ,1974「日本における 2,000 年前頃の海水準」『名古屋大学文学部論文集』LXII. 名古屋大学文学部。
井関弘太郎 ,1981「第 1 章 自然」『新修 稲沢市史 研究編三 地理』1 ～ 67 頁。新修稲沢市史編纂会事務局。
海津正倫 ,1988「濃尾平野における縄文海進以降の海水準変動と地形変化」『名古屋大学文学部論文集』CI. 名古屋大学文学部。
海津正倫 ,1994『沖積低地の古環境学』東京 古今書院。
江崎　武 ,1965「濃尾平野における先史地理学的研究 特に後・晩期縄文遺跡の立地条件について」『いちのみや考古』 7 .1 ～ 5 頁。一宮考古学会。
川添和暁 ,2007「施文と調整からみた土器の検討」『南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター縄文部会シンポジウム 第 1 回山内清男縄文晩期研究と東海地方 資料集』南山大学人類学博物館。
北野信彦 ,1984「濃尾平野および西三河平野周辺における貝塚遺跡の立地について」『古代文化』36-6.15 ～ 25 頁。財團法人 古代學協會。
増子康眞 ,2003「愛知県西部の縄文晩期前半土器型式の推移」『古代人』63,15-47 頁。名古屋考古学会。

鬼頭関係文献

古川博恭 , 1972, 濃尾平野の沖積層 - 濃尾平野の研究 , その 1-, 地質学論集 , 7, 39-59.
井関弘太郎 , 1975, 第 1 章自然 - 地形発達史を中心として -, 新修稲沢市史 研究編三（地理）, 稲沢市 , 1-67.
伊藤太佳彦 , 1999, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 84 集「馬引横手遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター , 99p.
鬼頭　剛・堀木真美子・尾崎和美 , 1999, 馬引横手遺跡の古環境復元 , 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 84 集「馬引横手遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター , 61-79.
岩野見司 , 2002, 大平遺跡 , 愛知県史　資料編 1 考古 1 旧石器・縄文 , 愛知県 , 74-75.
松澤　勲・嘉藤良次郎 , 1954, 名古屋付近の地質 , 同地質図 , 愛知県 , 35p.
海津正倫 , 1979, 更新世末期以降における濃尾平野の地形発達過程 , 地理評 , 52, 199-208.
海津正倫 ,1994, 沖積低地の古環境学 , 古今書院 , 270p.

報告書など

石黒立人 ,2008『須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡・山王遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
伊藤和彦編 ,1990『大平遺跡発掘調査報告書』尾西市教育委員会。
伊藤和彦編 ,1997『東苅安賀道遺跡発掘調査報告書（尾西市篭屋３丁目４番地内）』尾西市教育委員会。
伊藤和彦・岩野見司ほか ,1998『尾西市史 通史編 上巻』尾西市役所。
伊藤太佳彦 ,1998『東苅安賀道遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
伊藤太佳彦 ,1999『馬引横手遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
蔭山誠一編 ,1998『一色青海遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
日野幸治・北條献示 ,1986『下津城跡発掘調査報告書（II）』稲沢市教育委員会。
日野幸治・北條献示・愛甲昇寛 ,1988『下津城跡発掘調査報告書（IV）』稲沢市教育委員会。

補遺

当初、筆者は、板倉遺跡の貝層に関して、否定的な見解をもって、分析を開始した。その根拠は、尾西郷土資料館に保管されている、板倉貝塚と記された（コンテナ箱横にカードが添付）、貝殻の存在である。貝殻は、極めて大型のマガキ・ハマグリが、一部は貝殻を合わせた形で保存されており、明らかに自然貝層由来の貝化石であることが分かるものである。

ところが、調査を行なっていくうちに、箱内に入っているメモの記載が、板倉遺跡とは異なる地点の出土を示していることが明らかとなった（尾西市祐久字八間城）。このことから、この資料をもっては、板倉遺跡出土貝層を議論する材料にはできないと考えたのである。

しかし、なぜ、板倉遺跡出土の内容を示すカードがコンテナ横に添付されたのか、という疑問は残る。また、板倉遺跡出土の貝殻が別のものであるならば、それと種実などを、今回実見できなかったのは、極めて残念なことである。

本稿における板倉遺跡についての見解は、現在検証しうる限られた資料のみに基づくものである。いずれにしても、今後は、旧谷地形付近の遺跡の状況を把握するために、各種調査を含めた、継続的な注意が必要となろう（川添和暁）。

弭形製品・浮袋の口について

—東海地域の縄文時代後晩期を中心に—

川添和暁

骨角器でしばしば機能・用途など属性の想定が難しい資料に遭遇する。ここで取り上げる弭形製品・浮袋の口に関しても同様である。特に、弭形製品に関しては、近代考古学がはじまったころには、すでに東海地域においてその存在が知られており、東海地域の資料に関しては、装飾性が豊かであることが知られていた。今回、東海地域の地域社会性を考える上で、弭形製品と、これとしばしば関連づけられる浮袋の口の二器種を取り上げる。検討には、表層的な観察のみならず、製作・使用・流通・廃棄（埋納）の各過程を検討することによって、資料の評価に迫る試みを行なった。出土遺跡の傾向・点数・遺物の諸属性を検討した結果、縄文時代晩期・東海地域の例でいえば、弭形製品と浮袋の口は、弭とは限定できないものの、棒状なものを挿入した道具の一部の、特に弭形製品に関しては、ある象徴的な部分を担っていた可能性を指摘した。従って、これらの出土状況は、社会集団の様相の一端を表出していると仮定できよう。

はじめに

考古遺物から、その背景にある人間活動の様相を推測するためには、各資料について、現状で考えられ得る事項を整理し、総合的な検討を行う必要がある。それは、表層的な類似性のみで関連づけるのではなくて、遺物ならば、製作・使用・流通・廃棄（埋納）の、各状況を把握した上で、異同の検討を行なう必要がある。

今回、上記の具体例として、弭形製品および浮袋の口を取り上げる。この二つの器種は、縄文時代の研究史上、名称などはよく知られている器種である。特に、弭形製品は、東海地域の縄文晩期になって装飾性豊かなものが出現する。その歴史的位置づけなどの検討は、単に骨角器研究に寄与するのみならず、東海地域の縄文時代晩期の社会様相を考える上でも、極めて必要となる作業であろう。

また、筆者は、東海地域の鹿角器の様相に関して、目下検討作業を継続中である（川添 2004・2007 など）。鹿角を使用する他器種との関係を検討することによって、その器種の位置付けを、各地域的状況の中で、総合的に理解しようとする立場からの検討による。その意味においても、道具を製作・使用する、社会集団の様相に接近する糸口としたい。

研究小史

二つの器種は、これまでの研究では、別個のものとして扱われることもあれば、一括して論じられることもあった。ここでは、二つの器種の研究史を一括して取り上げる。

近代考古学が始まって間もなくの頃、東京人類学会雑誌 168 号・172 号・182 号に、平井稲荷山貝塚の出土資料が紹介された。この中で、坪井正五郎は、弭形製品と浮袋の口に関して、図を入れて提示した（坪井 1900：423 ～ 426 頁）。提示した資料は、本稿図 3 の 10 と図 6 の 35 である。前者を上端の二叉部の存在から銛に、後者を緒締めあるいは装身具といいつつ、比較資料が少ないということで詳しく述べることができない、とした *。一方、大野延太郎は弭形製

* 中谷治宇二郎によると、浮袋の口についての名称・用途の推定は、坪井正五郎にはじまるようである（中谷 1929[校訂 1943]：403 頁）。同様のことを甲野　勇も言及しており、栓状を呈しその中軸に縦に漏斗状の穿孔を有するものに対して、浮袋の口という名称が用いられるようになったのは、エスキモーが海獣を猟する際に、銛の索縄につけて使用する浮袋の口と同様の用途を持つものと、坪井正五郎が推定したことに発する、と述べている（甲野 1939a：1 頁）。しかし、今回、調査が不十分であったためか、坪井本人の発言・記述などを確認することができず、坪井がこの名称を用い始めた時期は、いまのところ不明である。

品と根挟みを掲載し、弭形製品に関しては、弓の先に装着して使用するものと考え、その装着想定図を提示した(大野 1901:323 頁)。同時に、根挟みを矢筈と想定しているが、両者を合わせて、酋長のような人が持つ、飾り弓・矢を提示する意図があったようである。

中谷治宇二郎は、各遺物を体系的にまとめる中で、浮袋の口・弭形製品についても言及した(中谷 1929[校訂 1943]:403 ～ 405 頁)。上で触れたように、浮袋の口という名称は、坪井正五郎の民族例からの推定であるが、言葉(器種名)が先に生じて類例が集められたものであり、数種の用途も型も異なるものが集められていると指摘した。正しい観察と全幅的な分類が必要として、提示した例では、土製の滑車型耳飾りに類する形のもの、一端の孔は貫通していない弭もしくは棒の先端に付けられたようなもの、別に紐を通すような突起がありさまざまな意匠を凝らした装身具のようなもの、または浮袋の口と思われるもの、などであった。

甲野　勇は、浮袋の口や弭形製品に関して分類など基礎的な考察を行なった(甲野 1939a･b･c)。まず､浮袋の口の研究に関して概観する(甲野 1939a)。東北・関東地域の資料を用いて、形態分類・分布および変遷・用途という基本的な検討を加えた。分類では、孔径の小さい方を上、大きい方を下として統一した基準を示し、A ～ F の 6 類と、C・D 類の変種として C1・C2・D1・D2 の分類案を提示した。帰属時期についても、当時、急速に進展した土器編年研究に対応した記載を行なっており、分類別に時間的・空間的分布に言及した。A・C・D 類は加曽利 B 式以降と他の分類に対して出現時期が早いとしながら、形式(ママ)的な見地から、可変性および浮動性を含む A 類を原形として、固定形をなす C・D 類などの変遷系統を図示した。用途に関しては、関東地域では余山貝塚を除き燕形銛頭との出土状況と不一致であること、東北地域では孔内面にアスファルト状膠着物が認められる場合が多いことから、民族事例で認められる浮袋の口としての使用を否定し、かつ耳飾り説も否定した。孔内面のアスファルト状膠着物の存在から、弭形製品との密接な関連を指摘した。

次に、弭形製品の研究を概観する。甲野が集成した当時は、この器種の出土例が 22 例と少なく、形態分類などの手続きは行なわず、資料ごとに詳細な紹介を行なった(甲野 1939b･c)。この中で、縄文時代のものと考えられるものは、沼津貝塚・余山貝塚・新井宿貝塚・平井稲荷山貝塚の各事例である。用途を検討する際に、体長の差が体径の差より多少大きいという点を指摘し、体長よりも太さおよび盲孔の口径には一程度の大きさが要求されていたという指摘は、注目できるようである。また、器種の中央下付近に水平方向に凹みが存在することを弦受としての機能を否定するものではないとして、やはり、弭飾りとしての用途を推定する。先に論じたように、弭形製品と浮袋の口とは同一系統に属するとすることから、前者を角形弭飾、後者を滑車形弭飾とも呼称することを提唱した。また、この道具の意義としては、狩猟民である石器時代人として何かマヂカル(ママ)の意味を持たしたものではないであろうか、と述べている。

吉田　格は、日本考古学協会の調査による、福島県三貫地貝塚で、浮袋の口に骨鏃状の湾曲したものが栓をしたまま出土したとして注目した(吉田 1955:162 頁)。一つでは不明であるが、組み合わせによって用途が判明する場合があるので、発掘調査は慎重に行なわなくてはならない、という提言であった。なお、この『日本考古学講座 1』に掲載された吉田の記述自体は、発掘調査から整理の方法、ヤス・銛・貝輪の製作方法に対する視点の提示、多く製作されたと考えられる漁具としての研究姿勢など、骨角器研究の方向性を提示したものとしても、大変重要である。また、一方で甲野 勇は『日本考古学講座 3』において、同じ三貫地貝塚の事例を、偶然的な結合として、提示する(甲野 1956:242 ～ 245 頁)。その根拠として、浮袋の口と栓との結合状態を検討し、二つの遺物の一般的性質を明らかにした上で、結果を総合して判断する場合、孔内の角製品の太さと浮袋の口の口径との差が著しい点として、上述した甲野自身の浮袋の口についての研究成果を再び提示した。

楠本政助は出土した土器・石器・骨角器につ

いて、自ら製作かつ使用の実験を行っている（楠本 1976）。古式離頭銛では、上述した三貫地貝塚での出土状態を重視して、浮袋の口・弭形製品の一部には固定銛などのソケットとして機能していたものがあったことを想定しており（楠本 1976：140 頁）、製作・使用実験によりこれを追認しようとした。

金子浩昌・忍沢成視は、日本列島の縄文時代の骨角器を集成した上で、浮袋の口・弭形製品に関しても、時期・分布などについて言及した（金子・忍沢 1986）。両者を弭形角製品として一括し、I 型（短型）、III 型（長型）を設定した上で、I 型と III 型の折衷型として　II 型を設定している。I 型は浮袋の口、III 型は弭形製品を示すものであり、特に II 類に関しては、II-a 型は I 型の形状で盲孔を有するタイプ、II-b 型は I 型の形状で装飾加工を有するタイプとする。時期的および地域的分布に関しては、I 型・II 型・III 型への大まかな発展過程には矛盾はなく、特に I 型から III 型への転換期が後期末葉から晩期の時期にあると、述べた。東海地域の資料に関しても言及があり、I 型の明確な資料がほとんどないとした上で、形態的にその完成形と考えられる III-c 型（鹿角枝先端の自然形を変更し、さらに装飾加工・穿孔を施すタイプ）が晩期に入って急に普及することに、注目した。また、西広貝塚の実例を提示して、安行 IIIa 式に伴う III-c 型で注目されるものに、二叉に分かれた根挟み状の加工の両側に、明らかに紐で強く縛ったためについたと思われる痕跡（使用痕）を指摘し、弓の弦によるものである可能性を提示した。なお、関東・東北地域の資料を中心に、これらの未成品と考えられるものをも提示している。

大竹憲治は、東北地域の資料を用いて分類案を提示した（大竹 1989:36 ～ 38 頁）。A 類（坪井正五郎らによって浮袋の口としたもの）・B 類（基本的形態は A 類と同様で体部側面部に突起状の削出部がつき有孔であるもの）・C 類（角状を呈するものが多く体部下端中央にかなり深い盲孔が入るもの）の 3 類に分類する。C 類は飾り弓を想定するものの、A 類については骨製ヤスや刺突具との共伴関係がある以上、弓具資料とは断言できないとし、この問題が解決しない限り B 類の意義づけは不可能とした。また、大竹は別稿で、弥生時代における弭形製品を検討する上で、A 類（穿孔や彫刻による装飾のあるもの）・B 類（彫刻による有段状の装飾はあるものの穿孔が認められないもの）の 2 類に分類し、いずれもが、系譜的には縄文時代後晩期からの影響を受けたものであるという見解を示した（大竹 1992：9 頁）。縄文時代後晩期および B 類は関東・東北地域の資料を、A 類は唐古遺跡・西川津遺跡といわば西日本域の資料で提示する。A 類自体は弥生時代になってから出現したとし、B 類は縄文時代の色彩が強く、東日本の薄磯貝塚・東宮貝塚など中期前葉まで残ると指摘し、A 類は古墳時代の青銅製などの儀弓につながると指摘した。

岡村道雄は、田柄貝塚・里浜貝塚の資料を中心に、使用法について若干触れた（岡村 1995：60・61 頁）。弭形製品を角形弭、浮袋の口を臼形弭と呼称し、属性分析・時期および地域的な分布・民族例をまとめた。主に臼形弭についてであろうか、底面内側の長径によって、10 ± 2 ～ 3mm の大きな一群と、直径 6mm 前後の小さな一群に分かれることを指摘した。民族例などからも弭として用いられたことを指摘し、弓にも大小があるように骨角製弭にも大小があるとした。なお、弥生時代には角形と栓状の飾りが数本はめられた新しい型（有栓弭）があるとしながら、三者に関する関係の言及には至らなかったようである。

以上、研究史を概観した。これまでの研究では、機能・用途への言及を主目的として、遺物の属性分析・民族例の参照などが行なわれている。広域的に見れば、浮袋の口・弭形製品と、単純に二分できない、いわば中間的な様相を呈するものの存在が指摘でき、金子・忍沢の II 類や大竹 1989 の B 類がそれに当たる。列島史的には、これらの意義付けが課題である一方で、後述するように中間的な様相を呈するものが希少な、東海地域からの分析・提言が重要となろう。また、金子・忍沢は、東海地域の資料についての特徴に言及しているものの、それ以来の発展的な議論は行なわれていない。両器種の意義付けは、これからの課題である。さらに、最近では、弥生時代以降の資料と縄文時代との関

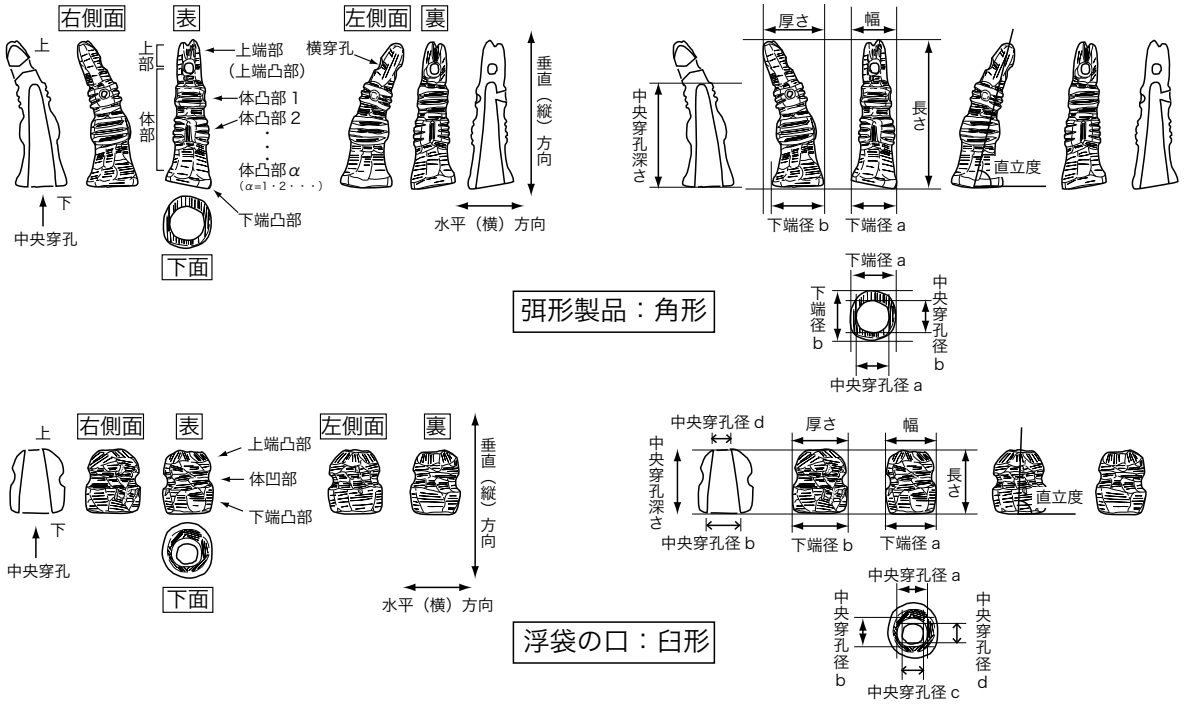


図1　弭形製品･浮袋の口 部位名称および計測位置　縮尺 1/3

係について言及する論考も見られるようになった（大竹 1989 など）。東海地域では、弥生時代の資料の出土も一定量知られており、同地域内での比較・検討が可能な地域であり、この問題についても検討が必要となろう。

資料の検討

a. 分類・部位の名称　対象資料について、大きな特徴である器種中央の穿孔が両端ともに貫通しているか、片側のみの開口かによって大きく二分できる。今回の分析対象資料の総称としては、弭形製品・浮袋の口という名称を用いるものの、分類名称としては、岡本道雄が言及した、弭形製品を角形、浮袋の口を臼形、という名称が、弭形製品・浮袋の口という先学の研究成果を尊重しつつ、かつ簡便な名称であると考えられるため、本稿ではこの名称を使用する。以下のように、両者を次のように分類し、それぞれの部位名称について記しておく（図１）。なお、器種に対して大きく穿たれている穿孔を、ここでは中央穿孔と称する。

角形　中央穿孔が袋状になっているもの。中央穿孔が開口している側を下とし、閉口側を上とする。下面で見た場合の短軸側で、屈曲した器形の外側を表とする。上から下の方向を垂直(縦)方向、その直角方向を水平(横)方向とする。下端にある凸部分を下端凸部、反対に上端付近に存在する凸部を上端凸部、上端に凸部がない場合は、上端にある装飾部分のまとまりまでを上部とする。上端凸部（上部）と下端凸部との間を体部とするが、凸部を形成することがあり、上から体凸部１、体凸部２・・・と呼称する。

臼形　中央穿孔が貫通しているもので、中央に凹みなどのあるもの*。中央穿孔の径が大きい方を下、小さい方を上とする。下面で見た場合の短軸側を表・裏とするが、器形の屈曲が著しくなく、表・裏の設定は任意である。上から下の方向を垂直（縦）方向、その直角方向を水平（横）方向とする。中央の横方向に見られる凹部を挟んで、上端側を上端凸部、下端側を下端凸部とする。

b. 出土傾向　東海地域においては、角形と臼形の両者は、出土傾向が異なるようである。臼形は縄文後期中葉以降から晩期にかけて存在し、角形は縄文晩期初頭から後葉にかけて存在す

* 凹みのない、管状の製品に関しては、別に扱った（川添 2007 鹿角製装身具 J 類）。

表1　弭形製品・浮袋の口出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時期	角形							臼形				参考資料	文献
				Ⅰ-a	Ⅰ-b	Ⅱ-a	Ⅱ-b	Ⅲ	Ⅳ	不明	Ⅰ-a	Ⅰ-b	Ⅱ-a	Ⅱ-b		
1	宮崎遺跡	長野県長野市	縄文晩期中葉～						1							矢口ほか1988
2	井戸川遺跡	静岡県伊東市	縄文中期?												1?	
3	石原貝塚	静岡県磐田市	縄文後期前葉～中葉									2				市原1967
4	蜆塚貝塚	静岡県浜松市	縄文後期中葉								1					後藤ほか1958
5	雷貝塚	名古屋市緑区	縄文晩期前半			1										伊藤・川合1993
6	西の宮貝塚	愛知県知多市	縄文晩期前半										1			杉崎ほか1968
7	本刈谷貝塚	愛知県刈谷市	縄文晩期前半	1					1							加藤・齋藤ほか1972
8	堀内貝塚	愛知県安城市	縄文晩期中葉	2									1			斎藤2004
9	枯木宮貝塚	愛知県西尾市	縄文晩期前半										1			牧ほか1973
10	平井稲荷山貝塚	愛知県宝飯郡小坂井町	縄文晩期		1								1			坪井1900
			縄文晩期	3												大野1901
			縄文晩期中葉～	3						1						清野1969
			縄文晩期中葉～	1												杉原・外山1964
11	水神第一貝塚	愛知県豊橋市	縄文晩期中葉～後葉		1											芳賀編1997
12	吉胡貝塚	愛知県田原市	縄文後期末～晩期末												1	齋藤ほか1952
			縄文後期末～晩期末	2		1		1	1				1			清野1969
13	伊川津貝塚	愛知県田原市	縄文後期末～晩期後葉												1	久永ほか1972
			縄文晩期前半	4		1				2			2			小野田・春成ほか1989
			縄文晩期後半							1						小野田ほか1995
			縄文後期末～晩期後葉?							1						
14	保美貝塚	愛知県田原市	縄文晩期			1										小林ほか1966
			縄文晩期				1									築瀬2006
15	滋賀里遺跡	滋賀県大津市	縄文晩期	1												田辺ほか1973
16	森の宮遺跡	大阪市中央区	縄文晩期											1		八木編1978
17	橿原遺跡	奈良県橿原市	縄文晩期												1	末永1961

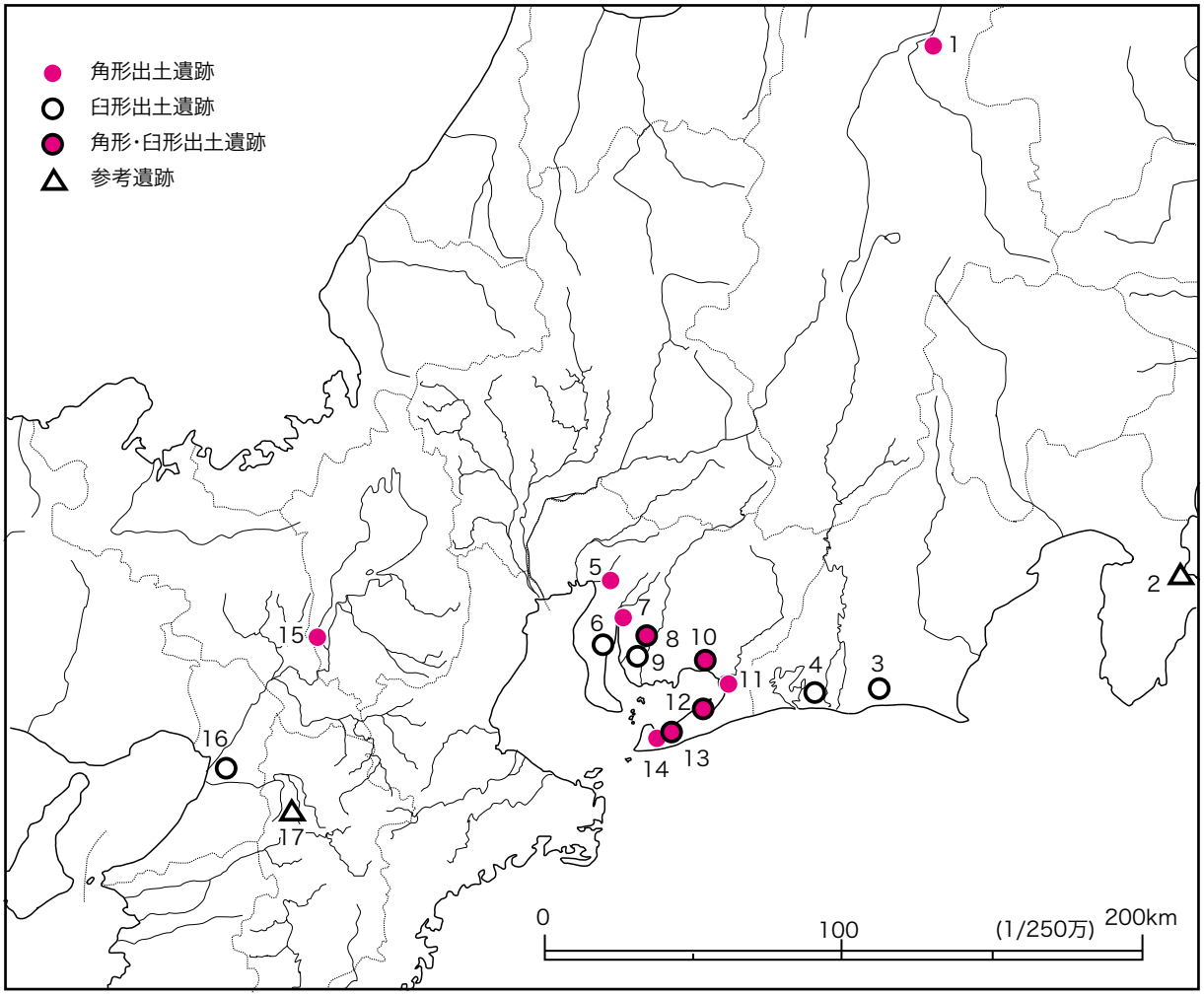
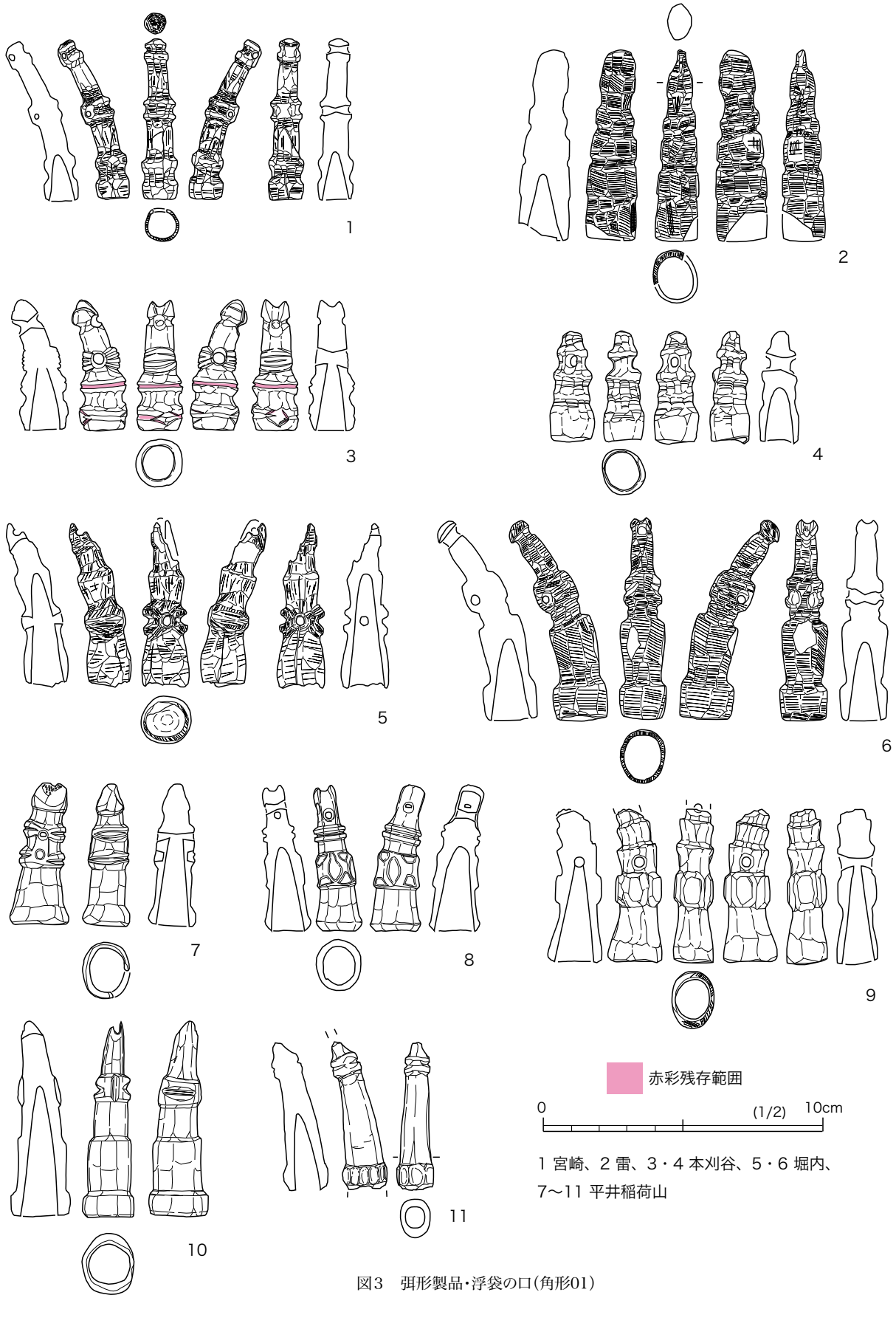
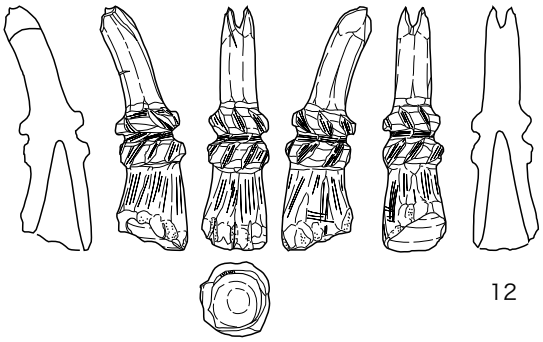


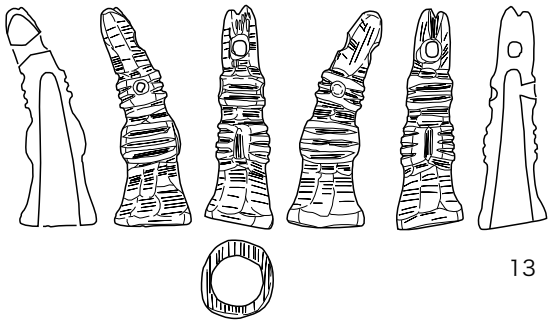
図2　弭形製品・浮袋の口出土遺跡位置図（番号は表1と一致）

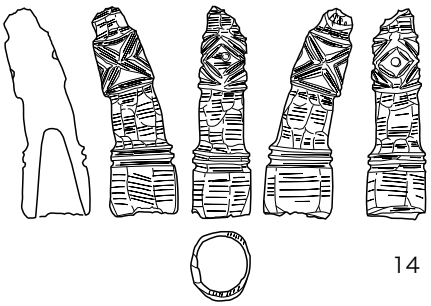


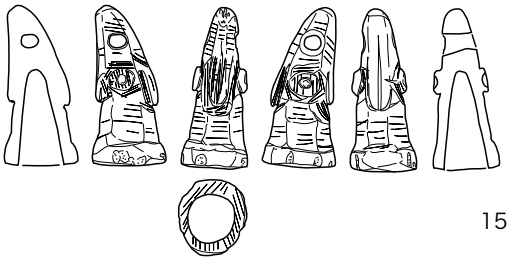
1 宮崎、2 雷、3・4 本刈谷、5・6 堀内、
7〜11 平井稲荷山

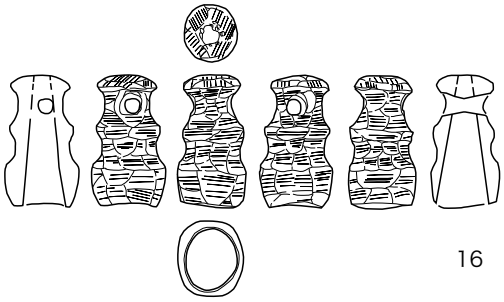
図3　弭形製品・浮袋の口(角形01)

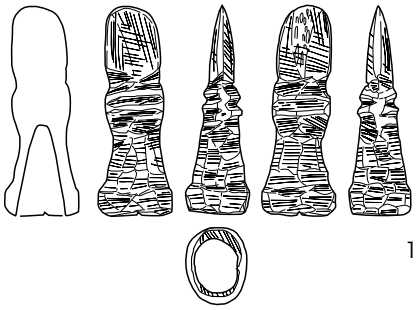


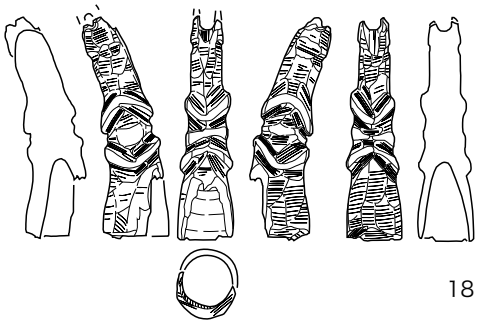


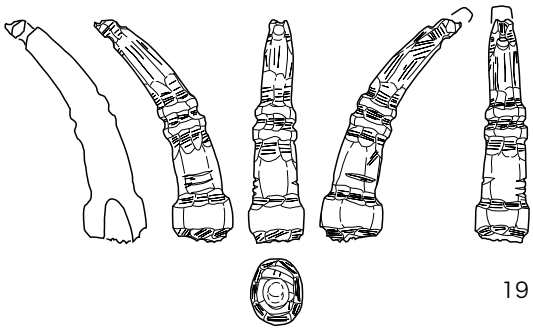


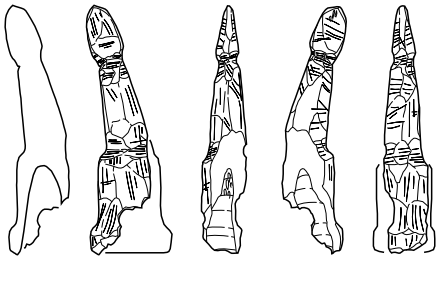












12 水神第1、13～17 吉胡、18～20 伊川津

図4　弭形製品・浮袋の口(角形02)

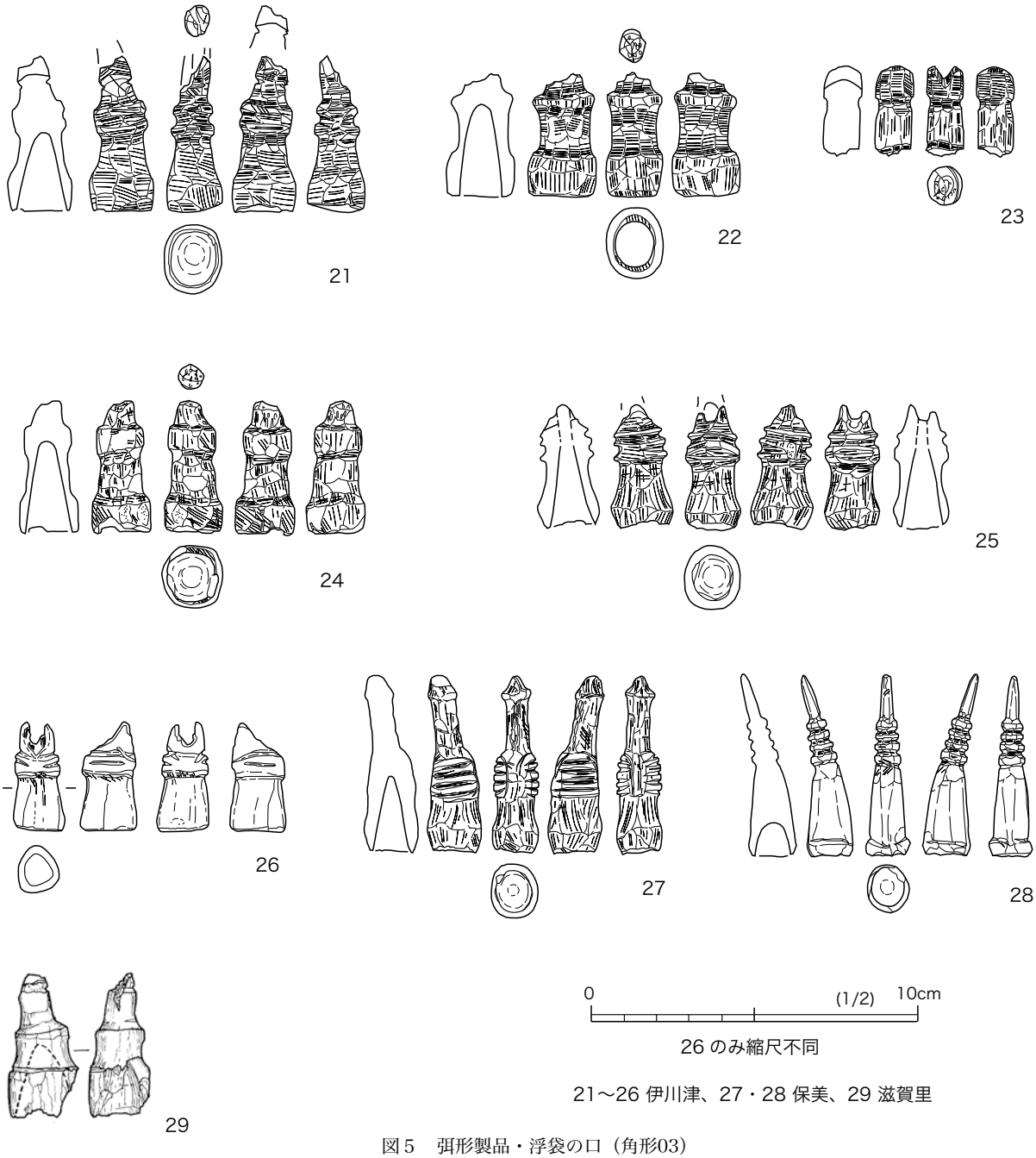


図５　弭形製品・浮袋の口（角形03）

る。出土遺跡の分布では、縄文後期が中心となる遺跡では、臼形のみの出土である一方、縄文晩期では、両者が出土している遺跡と、いずれか一方のみが出土している遺跡に分かれるようである。現在までのところ、両者が出土している遺跡は堀内貝塚・平井稲荷山貝塚・吉胡貝塚・伊川津貝塚で、角形のみが出土している遺跡は宮崎遺跡・雷貝塚・本刈谷貝塚・水神第一号貝塚・保美貝塚・滋賀里遺跡、臼形のみが出土している遺跡は石原貝塚・西貝塚・蜆塚貝塚・西の宮貝塚・枯木宮貝塚・森の宮貝塚である。

次に、各遺跡からの出土点数に関して概観する。臼形の出土点数は、１ないし２点で、対象地域内の総計でも計 10 点程度である。一方、角形は、一遺跡から１点出土遺跡が５遺跡、２点出土遺跡が３遺跡である一方、５点以上出土している遺跡が平井稲荷山貝塚・吉胡貝塚・伊川津貝塚で、平井稲荷山貝塚が晩期中葉に９点、

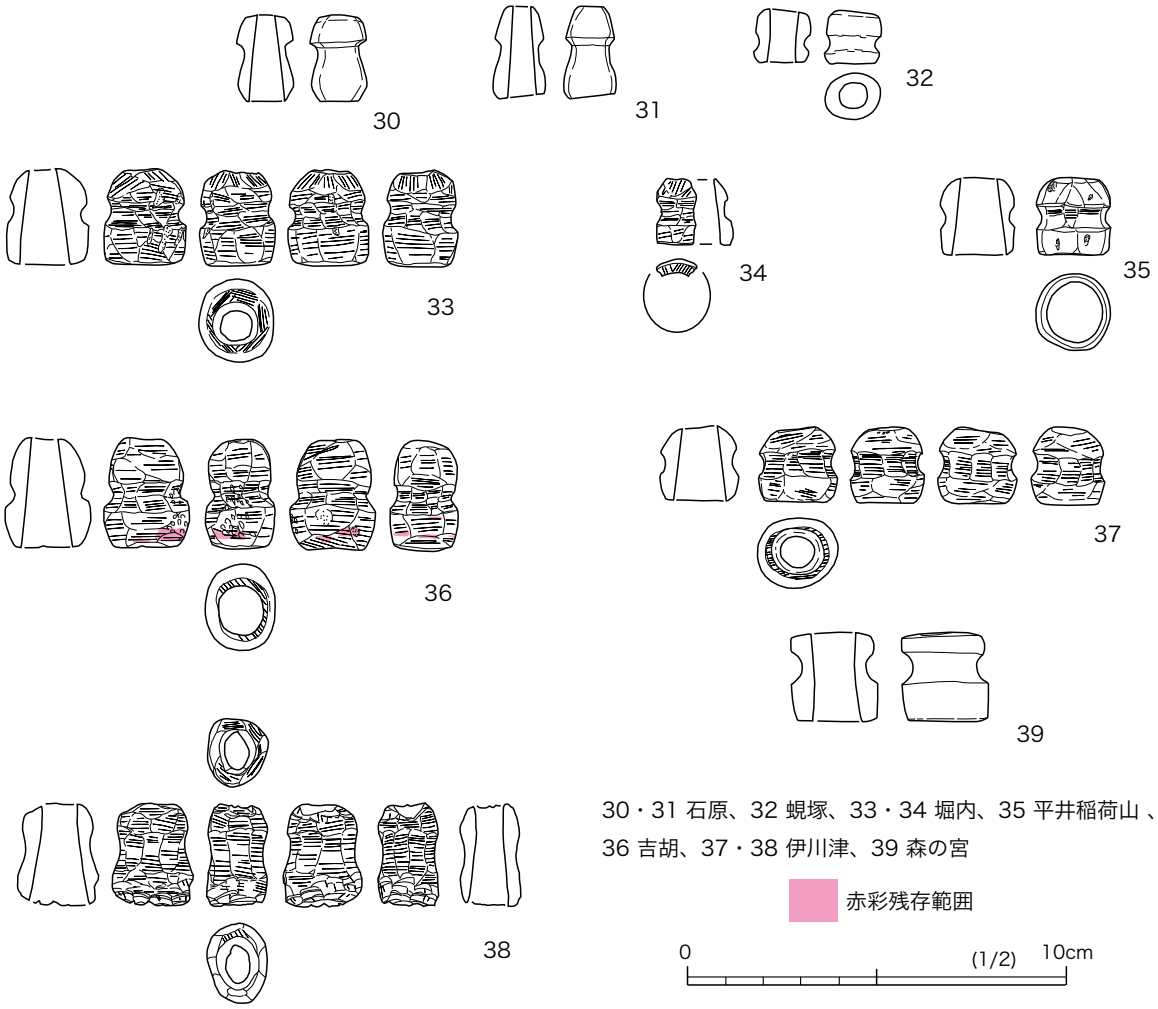


図6　弭形製品・浮袋の口(臼形)

伊川津貝塚は晩期前半に８点と、特に集中する。

c. 法量　次の三項目について、法量の検討を行った（図７）。

ア）全体的な法量　長さと幅の計測結果から検討する。角形では、長さ 3.5 ～ 7.1cm・幅 1.2 ～ 2.0cm、臼形では、長さ 2.0 ～ 3.0cm・幅 1.5cm ～ 2.0cm である。両者を比較すれば、角形は細くて長い傾向があり、臼形は太くて短い傾向がある。特に長さ関して、両器種は重複することがないのが注目される。

イ）器形全体の屈曲の度合い　厚さ・下端径ｂとの比率と直立度とを勘案して検討する。臼形は、直立度が高く、屈曲の度合いが低いものである一方、角形は、３例を除いてほとんどが屈曲している。弭形製品の屈曲の程度は、厚さ / 下端径ｂの数値を α とすると、（１）α ＝ 1.0、（２）1.0< $\alpha \leqq$ 1.5、（３）α >1.5 に分けられる。（１）でかつ直立度が 90 度の場合、屈曲がない様子を示す。（１）でかつ直立度が 90 度未満の場合、上端部が屈曲しているものの、その度合いが下端径ｂの範囲を超えないものを示す。（２）・（３）はいずれも屈曲の度合いが下端径ｂの範囲を超えるものであるが、（２）におさまる例が多いといえよう。

ウ）中央穿孔の法量　中央穿孔の平均径と深さを検討する。実資料において、中央穿孔の下端部側の形状は楕円形を呈しているものが多いものの、径の平均値からみると、1.2 ～ 1.6cm の範囲に、かつ深さは 1.9 ～ 3.3cm の範囲に集中している様子か窺えられる。この法量が、角形としての必要な中央穿孔の法量であったと推定できるが、特に、径の大きさがほぼ

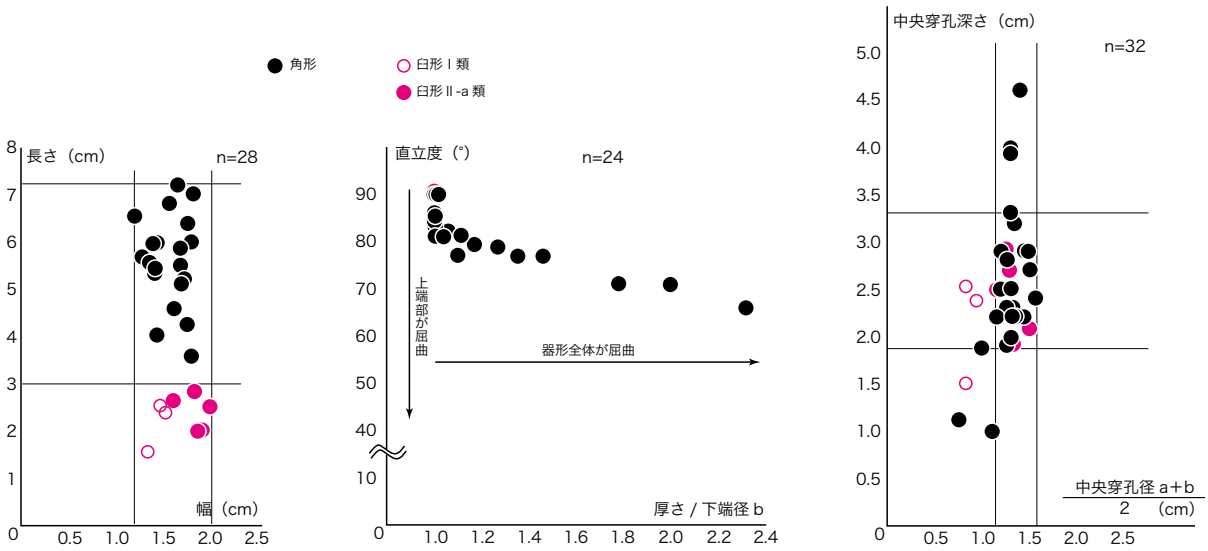


図7　弭形製品・浮袋の口 各計測値散布図

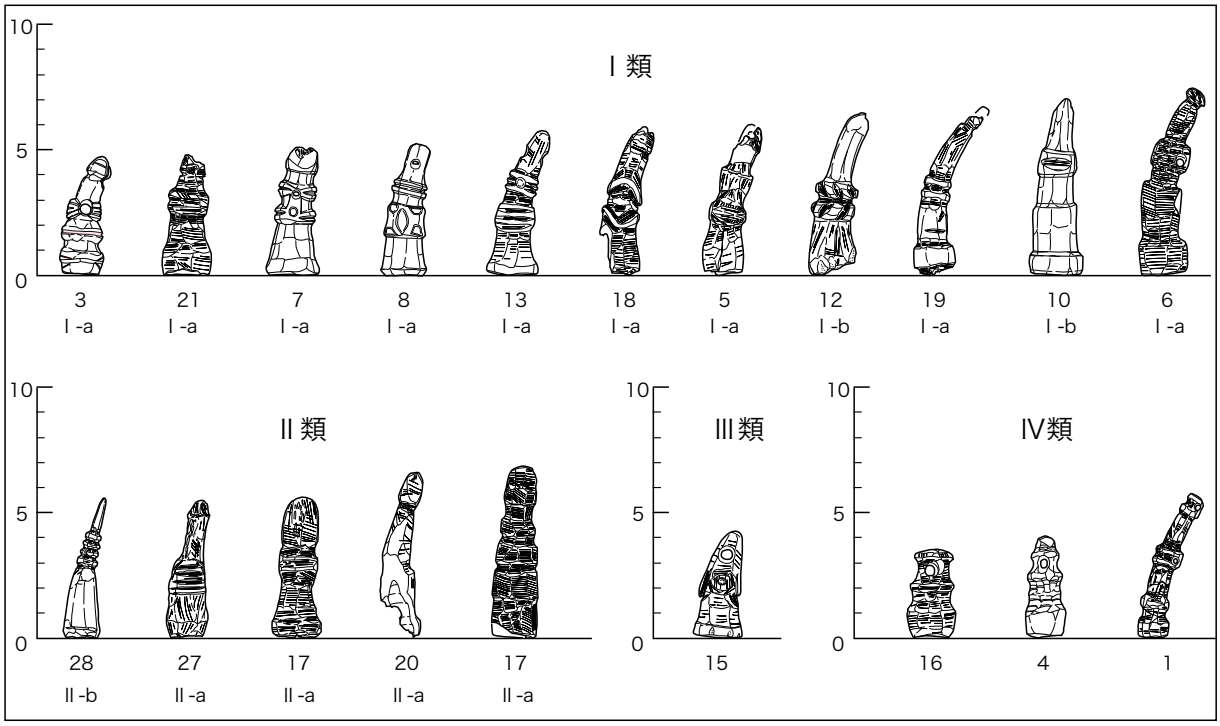


図8　角形 形態分類図

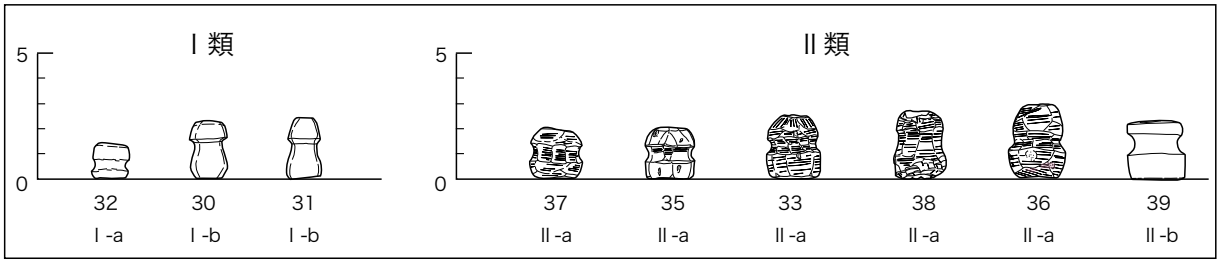


図9　臼形 形態分類図

一定であることは大いに注目できよう。なおこの範囲には、臼形もすべて入るようである。

d. 角形の形態（図８）

ア）全体的な構成　上述した部位名称が、すべての例に対して明快な説明を与えるものではない。ここでは、全体的な構成に基づいての、分類を行なう。

角形Ⅰ類　上部・体部・下端凸部の部位構成が明瞭であり、上端部には二叉状の切れ込み（以下、二叉部と称する）が存在するもの。上端部が段および横方向の凹み、および横穿孔によって上端凸部を形成するⅠ -a 類と、形成しないⅠ -b 類に細分できる。

角形Ⅱ類　上部・体部・下端凸部の部位構成が明瞭であるものの、上端部には二叉部の形成が見られないもの。Ⅱ類も上端部が凹みおよび作り出しによって、上端凸部を形成するⅡ -a 類と、形成しないⅡ -b 類に細分できる。Ⅱ -a 類では、扁平な楕円形円盤状を呈するようである。

角形Ⅲ類　上部と体部との部位構成が不明瞭であり、かつ上端部が凸状を呈するもの。

角形Ⅳ類　上部と体部との部位構成が不明瞭であり、かつ上端部が明瞭な凸状を呈さないもの。特に、1・16 のように明瞭な平坦面を有する点は、特徴的である。

Ⅲ類・Ⅳ類の位置づけは、さらに検討を必要とするが、弭形製品の多くは、ある共通の構成要素を有する意図で製作・使用された可能性がある。特に、本稿の対象資料では、Ⅰ類が全体の半数程度を占めることから、上端部にある二叉部は、大きな構成要素であったと考えられよう。

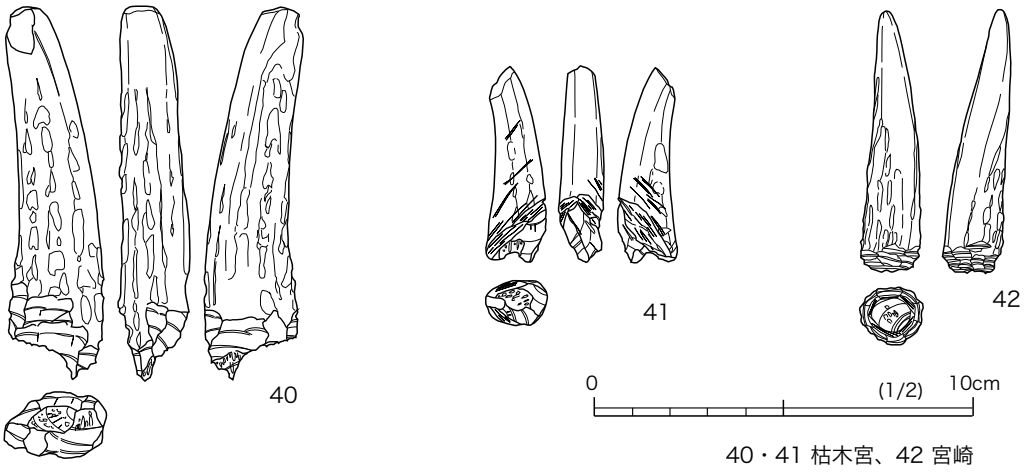
イ）装飾の構成　線刻・彫去・穿孔によって形成されている装飾について概観する。例えば 3・12・13・14・27 など、幅の狭い溝状の加工は線刻による装飾効果があると考えられる。また、装飾効果の多くは彫去によるものである。一方、溝状の加工でも幅の広いものは、主に彫去の装飾効果があると考えられ、主に横走する装飾に認められるが、15 ではボタン状の突起にも加工されている。これらの装飾の多くは体部に認められ、1・11 のように上部や、3 のように下端凸部に施される場合もある。14・28 は体部と下端凸部との境に線刻が施されている例である。装飾の構成には、(a) 横もしくは弧状の隆起線群（3 ～ 5・7・8・10・12 ～ 19・21・22・25 ～ 28)、(b) 円形・楕円形もしくは隅丸方形状などの突起･連続突起帯 (8･9・11・15)、(c) 三叉ないしは格子状の線刻 (3･14)、(d) 沈線＋側面の片側寄りに穿孔（1･6)、の以上４パターンが認められる。装飾パターン (a) には、隆起線が並走する場合と、結節点を起点・終点とする場合とがあり、後者においては結節部に穿孔あるいは縦方向の線刻が施されている例が多い。また、並走する隆起線の上に斜方向に連続して刻みが施される場合もある（12)。

ウ）横穿孔　横穿孔は、(a) 上部中央に存在するもの（5・8)、(b) 上部と体部の境に存在するもの（3・6・8・9・13・19)、(c) 横もしくは弧状の隆起線群の結節点にあるもの（3･5･7)、(d) 線刻の端部にあるもの（1 ･6)、(e) その他体部など（4・9・15・16・25）が確認できる。(c) は上述した装飾パターン (a) に関連するもので、(d) は装飾パターン (d) に関連するものである。(a) の上部中央および (b) の上部と体部の境の穿孔、(e) のその他体部では、後で述べるように、周囲に使用によると考えられる磨滅部分が確認されるものもある。(c) に関しては、穿孔が完全に貫通せずに、盲孔となっているものもある（7・13)。しかし、横穿孔 (a) (b) (c) (d) (e) のいずれの場合でも、径 3mm ～ 5mm と一定している点は注目されよう。

e. 臼形の形態（図９）　ここでは全体的な構成を中心に言及する。

臼形Ⅰ類　全体の法量で、特に幅に関して、1.5cm 以下のもの。体凹部を挟んで、上端凸部と下端凸部との境が明瞭なⅠ -a 類と、体凹部と下端凸部が連続するⅠ -b 類に細分できる。Ⅰ -b 類にあたる 32 は、体凹部が中央ではなく一端に偏った部分に存在している。

臼形Ⅱ類　全体の法量で、特に幅に関して、1.5cm より大きいもの。体凹部が上端凸部と下端凸部を挟んで､ほぼ中央に存在するⅡ -a 類と、いずれかに偏って存在しているⅡ -b 類とに分類できる。



40・41 枯木宮、42 宮崎

図10　鹿角器丸太材(角枝部分)

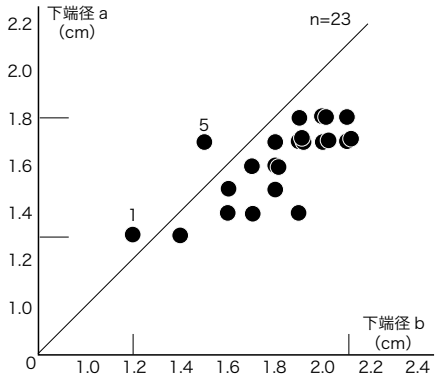


図11　角形 下端径法量散布図

Ⅰ類とⅡ類とは全体の法量差に基づいているが、それに伴って中央穿孔の法量にも違いが見られる（図７の右）。特に径の大きさには相違が認められることから、これは別の意味では、各分類での法量は、ある程度定まっていた可能性が指摘できる。

f. 製作　角形・臼形はともに鹿角製である。ここでは特に角形に関して検討する。各例において鹿角の髄部分が確認できるのは、中央穿孔内および上端部中央に限られ、体部などには表出していないことから、鹿角素材の形状を大きく改変した製作を行なってはいないようである。従って、体凸部および下端凸部を作り出す際に、削り出しなどは行なっているものの、鹿角材としては上述したような法量に近いものであったことが想定される。このような形状の加工を可能とするのは、鹿角の中でも枝などの先端部付近で、半截を行なっていない丸太材であろう。法量のうち、長さでは3.5cm以上を要件としており（図７）、一方で鹿角材の径を反映している下端径では、1.3×1.2cm以上1.8×2.1cm以下の範囲で、特に1.4×1.6cm～1.8×2.1cmの範囲に集中が見られる。また、動物遺体が残存する条件の遺跡からは、角形の出土の有無に関わらず、しばしば鹿角先端丸太材の出土が認められる（40～42）。40・41は断面形状が極めて扁平な楕円形を呈するものであり、42は若干の楕円形を呈するものである。法量のみで言及すれば、40のような部分からの製作も可能であるか、この場合、鹿角髄部分にまで一部を削り込むほどの加工が必要となる。実資料においてはそのような事例は存在せず、材となった鹿角は42のような若干の楕円形を呈する、鹿角丸太材といえよう*。このような鹿角材を利用するには、成獣であれば、各枝の、より先端部側の部分を使用した可能性が考えられる。

角形の器面の加工に関しては、敲打・擦切り・研磨・穿孔・削り・線刻および彫去に分けられよう。敲打あるいは擦切りにより、ある一定の大きさに作出された丸太材を、研磨によって鹿角凹凸を平滑にし、凸部の作り出しなどは切り込みおよび研磨によって行なわれているようである。中央穿孔の内面は、同心円状の工具痕がしばしば観察されることから、横方向に削り取

*　この宮崎遺跡の事例に関しては、小型剥片石器製作の観点から、石器製作道具（剥離具）としての可能性も指摘されているものである（長井2005:24･25頁）が、それには、なお使用痕などの分析でさらに検討する必要がある。

る形で孔の調整を行なったものと考えられる。また、線刻・彫去・横穿孔は、刃器・錐などの剥片石器による作業が想定される。

対象地域においては、現在までのところ弭形製品・浮袋の口に関して、明確な未成品の存在は確認されておらず、詳細な工程順序は不明である。しかし、本稿では、19 について、角形の加工途中品の例である可能性を指摘しておく。その理由は、下面側の調整と、中央穿孔の様相にある。まず、下面側の調整では、最終的に研磨により器面調整がはかられている中で、19 のみは周囲を連続した擦り切り調整が施されたままの状態である。また、中央穿孔径 a・b および深さのいずれにおいても計測値が著しく小さいことが大きな特徴である(図 7 右)。もし、これを加工途中の例として提示し得るならば、他の調整がすべて終了した後、下面の擦切り切断→中央穿孔→下面の研磨調整、という工程順序が想定できる。この場合、はじめに法量分(特に長さ分)で切断した素材から加工を開始するのではなく、完成品よりも長い状態の鹿角の先端部分を加工して、最終段階になってはじめて法量分で切断を行なったことが想定できよう。

g. 赤彩　角形の本刈谷例(3)と臼形の吉胡例(32)では、赤色顔料の痕跡が確認できる。本刈谷例は体凸部 2 と下端凸部の線刻中に、吉胡例は下端凸部の表面に確認できる。いずれも器面表面のみであり、中央穿孔内面などでは確認できなかった。

h. 使用・欠損状況　まず、欠損傾向について検討する(図 12)。角形の欠損状況は、(a)上端部横方向、(b)上端部縦方向、(c)横穿孔、(d)上部と体部の境、(e)下端凸部、にまとめられる。(a)(b)は、特に上端部が二叉状を呈するもので顕著である(5・18・19・21・29)。(c)に関して、上で見たように、横穿孔が複数存在している場合、最上側にある穿孔が欠失している傾向がある(5・9・18)。(d)の事例は、細く棒状になっている部分が折れて欠失したような状況である(22・23・24)。(e)は、最も多く認められる欠損状況で、下端凸部全体に及んでいるもの(2・18・20・29)と、ごく一部のみが欠失している場合とがある(5・12・14・24・27・28)。一方、臼形は(f)器形全体が

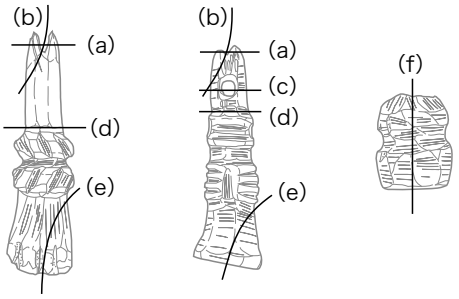


図12　弭形製品・浮袋の口 欠損傾向模式図

縦方向に裂かれるように欠損する場合がほとんどであり(31)、横方向に破損する状況は皆無である。

欠損の再加工に関しては、今回の対象資料では、明瞭な事例は確認できなかった。また、横穿孔の場合、製作時とは時間を置いて再度穿孔が施された事例も同様に確認できなかった。

また、使用痕について検討する。角形では、中央穿孔の内面は、磨れなどの著しい痕跡は確認できず、同心円状に展開する製作痕のみである。また、ピッチなどの膠着材およびその痕跡も現状では確認できない。端的に使用時の痕跡で確認できるのは、横穿孔周囲に残されている磨痕である。横穿孔でも、最上側の穿孔に認められるようであり、磨痕は穿孔の横から下の位置に認められるようである(6・13・16・19)。また、上端部の二叉部に関しては、切り込みの浅くて上端に開放気味のもの(3・6・8・13)と、細くて深いもの(10・12・18)がある。前者は、使用により二叉部の上端が磨滅した結果であるとも想定できる可能性もあるが、磨痕などは不明瞭である。また、浮袋の口では、器面の一部のみに明瞭な磨痕などが確認できる事例は少ないようで、横方向に展開する凹部内も同様である。

i. 出土状況　吉胡貝塚では、清野第 63 号人骨(土器棺墓内の小人骨)が入れられていた正位の土器棺墓内、および清野第 169 号人骨(壮年・女性)の付近から、浮袋の口が出土したと記されている(清野 1969：205・208 頁)。注目すべき事例ではあるが、現状ではどの資料を指しているのか判断できないばかりが、凹みのない管状のものを指している可能性もある(川添 2007 鹿角製装身具類 J 類)。それ以外には、現在まで

のところ、今回の対象資料に関しては、弭形製品・浮袋の口ともに他の資料との共伴関係や、遺構内からの出土などは確認されていない。貝層を含む遺物包含層内からの出土であり、これらの器種の廃棄（埋納・埋設）の様相を示しているといえよう。

j. 角形と臼形との比較　以上の検討に基づいて、若干の比較・検討を試みたい。まず、出土の状況では、臼形が後期前葉・中葉以降で、角形が晩期初頭以降からの出現で、晩期において両者は共存している。しかし、出土点数は、縄文時代後晩期を通じて、臼形が少なく、晩期になり角形が顕在化する。

全体の法量では、角形Ⅰ～Ⅳ類および臼形Ⅱ類では、長さでは両者は明確に異なるものの、下端部径ではほぼ同様の法量を呈しており、鹿角の使用材の部位がほぼ近いところを使用していることが推定できる。両分類を峻別する最も重要な要素とした中央穿孔ではあるが、法量に関しては、両者は近い値を示している。一方、臼形Ⅰ類は全体の法量および中央穿孔の法量が著しく小さく、これが臼形Ⅱ類との大きな差となっている。

製作において、大きく異なるのは、装飾性の差である。臼形が全体の形状において、中央部に凹部を形成する以上は、顕著な装飾は加えられておらず、器面調整は、全面研磨によって仕上げられている。一方、弭形製品は、彫去・線刻・穿孔などによって装飾性が著しく、利器などによる削り・穿孔などと研磨が施されている。しかし、両者とも、器面表面に赤色顔料が残存している事例がある。

両者とも、中央穿孔内は同心円状の工具痕が確認でき、著しい磨滅などの痕跡はないものの、欠損状況（e）と（f）の状況は、中央穿孔部に対して同様な作用が加わった結果とも考えられる。但し欠損状況（f）を示す臼形は、中央穿孔部への力の掛かりかたが、角形に比べて直接的なのかもしれない。

k. 鹿角器他器種との比較　ここでは、主な対象としている東海地域の縄文時代晩期の鹿角器全体の中での様相を検討したい。この時期においては、製作の視点から、鹿角を半截して作出した材（半截材）を基にしているものと、半截することない丸太状の状態（非半截材）を基にしているかによって大きく二分される。前者は、根挟み・鏃・釣針などの利器に多く使用される傾向があり、装身具類への利用もあるものの、ごく若干数にとどまる（川添2007：16～18頁）。一方後者は、鹿角斧などと呼ばれる利器に一部認められる程度で、多くは装身具類などの非利器に使用されているといえる。今回対象としている、弭形製品・浮袋の口は、鹿角を横方向に切断した状態を基とする、非半截材の範疇に入るといえる。

使用する素材の部位に関しては、上述したように、鹿角枝でもより先端部を使用している可能性を指摘した。これと重複した部分を使用しているものは、鹿角製装身具類Ｆ類･Ｇ類で（川添 2007：10 頁など）、特にＧ類においては、枝の分岐のない、幼獣の角の利用が考えられるものもあり、最大径の法量および断面形状が弭形製品のそれと近似しているものもある。

鹿角製装身具類の中で、筒状の形状を呈しているものは、装身具類Ｊ類である。現在までのところ、平井稲荷山貝塚・吉胡貝塚・保美貝塚でしか確認できていない。管状を呈しているものが多く、一部吉胡貝塚の例では、やや玉状に加工されているものもある。確認した限りでは、中央に貫く穿孔周囲に著しい磨滅痕が存在したり、縦方向に欠失したような状態のものはなく、ほぼ完形品ばかりである。使用部位は、断面形状が楕円形を呈する部分で、ある程度の長さでも一定の法量を有している部分である。従って、中央穿孔が両端で開口する、臼形とは別の性格を有するものと考えられよう。

他地域との比較

弭形製品・浮袋の口を多く出土している地域は関東・東北地域であり、縄文時代後期・晩期にわたって確認できる。これらの資料の特徴を、次の点に留意して概観する。

（1）臼形の出土点数が顕著に多い。

（2）法量では小型のものと大型のものが存在し、それによって中央穿孔の法量も異なっている。

（3）臼形では、法量において、幅より長さが著しく大きいものが一定量存在している。
（4）上下両側に開口する臼形状の形態を有しながら、横線・横穿孔などの装飾が施される事例が多く認められる。
（5）横穿孔は、中央ではなく一方に偏った側に施されている。
（6）上端に二叉部がある事例が散発的である。
（7）東北地域の資料では、アスファルト痕や赤彩痕が明瞭に残されている。

（1）に関しては、出土遺跡が多いばかりではなく、一遺跡からの出土点数も東海地域の状況と比較すると、端的に多いといえる。（2）は、法量としては臼形Ⅰ類とⅡ類との関係に対比することができ、大型のものは臼形Ⅱ類のものとほぼ同様の法量を呈するようである。また、関東・東北地域における（3）の存在と、東北地域における（4）の存在が、研究小史で概観したように、甲野以来、角形と臼形を一括して議論の対象とした理由と考えられる。いわば、角形と臼形との中間形態に位置するもので、（3）（4）の位置づけを考慮した場合、角形と臼形という分類のみでは説明できず、両者をつなぐ形態（分類）を設定することで、すべてを同種の道具としての想定が可能となる。なお、田柄貝塚では、後期末葉から晩期初頭に装飾的なものが増加する傾向があるようである（新庄屋・阿部ほか 1986：117 頁）。（5）は東海地域の事例との対比で特徴的であり、かつ（6）の様相と対照的である。東海地域の例で（5）を示すものは宮崎遺跡と堀内貝塚で出土しているのみである（1・6）。一方、（6）を示す事例としては、茨城県小堤貝塚・埼玉県石神貝塚・千葉県西広貝塚などとごく若干例のみであり、岩手県貝鳥貝塚の事例もあるが形状がやや異なるようである。（7）に関しては、使用状態を考察する上で、重要視できる事象である。ここでも田柄貝塚の資料を参考にすると、アスファルトの付着痕に関しては、ほぼすべての資料において中央穿孔内面に認められるようである。中央穿孔に何か棒状のものを挿入して使用したと考えられる。また、器面に赤彩が施されている事例も多く報告されているが、中央穿孔内にも赤彩が施されているものも一部報告されている。これは東海地域の事例とは明らかに異なる点であり、東北地域の様相を考える上で、重要であろう。

弥生時代以降の弭形製品・浮袋の口について

弥生時代以降にも、弭形製品および浮袋の口と呼ばれる骨角器の存在が知られている。それとの関係について、少し言及するが、歴史的継続性の有無を検討するために、まずはあえて東海地域の資料を中心に提示する。

角形については、横穿孔のあるものとないも

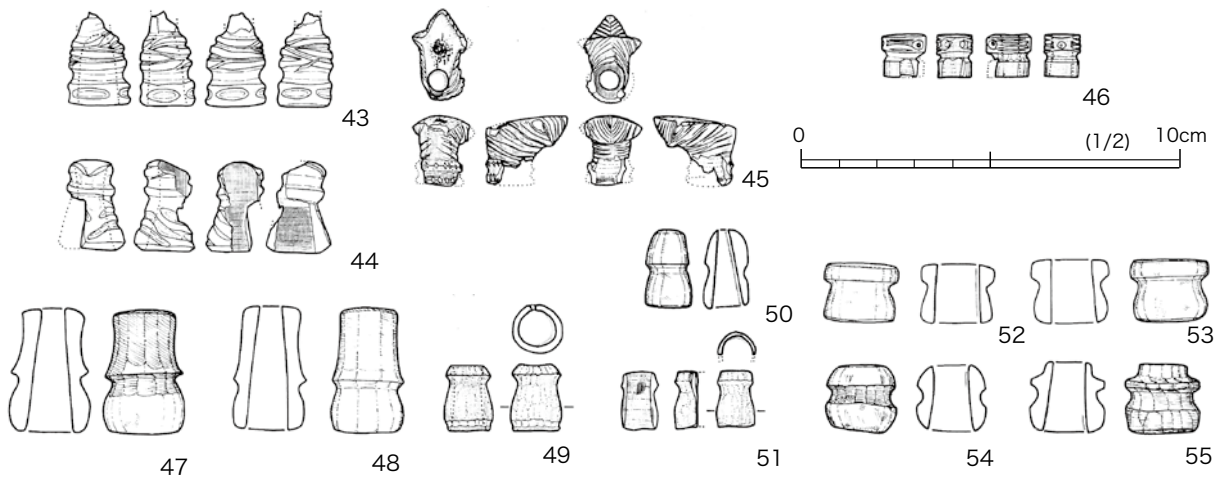


図13　宮城県田柄貝塚出土 弭形製品・浮袋の口（新庄屋・阿部ほか1986より引用）（角形 43、臼形 44～55）

のが存在する。横方向に穿孔のない 56 は、弥生前期に属すると考えられるもので、上端部は凸状に、体部には横走する隆帯上に連続した斜方向の刻目が施されている。この事例は、上で述べた分類では、角形Ⅱ類に相当するものと考えられ、特に、Ⅱ -a 類との関連性が考えられるものである。横穿孔の見られるもの（角形Ⅴ類とする）に関しては、穿孔の大きさが 4mm 以上（Ⅴ -a 類）と、4mm 未満（Ⅴ -b 類）の、二者に分類できる。角形Ⅴ -a 類は、上部・体部の区別が明瞭ではなく、この点では角形Ⅲ・Ⅳ類に近い。58・60 では下端凸部付近に横方向の小さな穿孔が確認できる。中央穿孔に棒状のものを挿入した際に、固定のために使用したかもしれない。一方、角形Ⅴ -b 類は、多数の横穿孔が縦方向に連続して存在する傾向があり、そこに両頭状の突起物が挿入されたまま出土する場合がある。弥生時代の例でも注目される点は、鹿角髄部分が露出している箇所が少ないことであり、器種の法量ともとの鹿角素材の法量は、著しく異なることはないようである。但し、61 は体部上半から、62 は体部下半から下端凸部にかけて髄部分の露出が確認でき、鹿角素材に対してこの部分は削られた程度が大きいことが想定される。

臼形に関しては、中央の凹部分が体部の下方に存在するようになるのが特徴である。これまでの形状とは異なることから、これを臼形Ⅲ類とすれば、64・65・67 のように長さが幅よりも大きいもの（臼形Ⅲ -a 類）と、66 のように長さよりも幅よりも大きいもの（臼形Ⅲ -b 類）に分けられる。先に、検討作業上、森の宮の事例（39）を臼形Ⅱ -b 類としたが、この臼形Ⅲ類と類似点が多く、両頭状の突起物（64）とともに、弥生時代に属するものの可能性が高い。また、68 は器壁の厚さが極めて薄く作られているのが大きな特徴である。

以上、東海地域の事例を概観したが、当地域においては、弥生前期の事例が希薄であるため、両者を比較・検討した場合、差異が明瞭となる傾向がある。特に角形Ⅴ類の出現は特徴的であり、日本列島の中で弥生時代に関して概観すると、弥生前期以降に出現し、まずは九州地域から東海地域に出土が偏る傾向がある。角形Ⅴ類は、形状および横穿孔の多用から角形Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ類との関連性は大いに想定できるものである。しかし、系譜を追うことができる以上に、各社会集団の中でも意義付けが変容する可能性も考えられることから、その観点からの検討を今後行なわなくてはならない。また、臼形に関しても、この道具に関連する活動の様相はそれぞれ異なることが考えられよう。

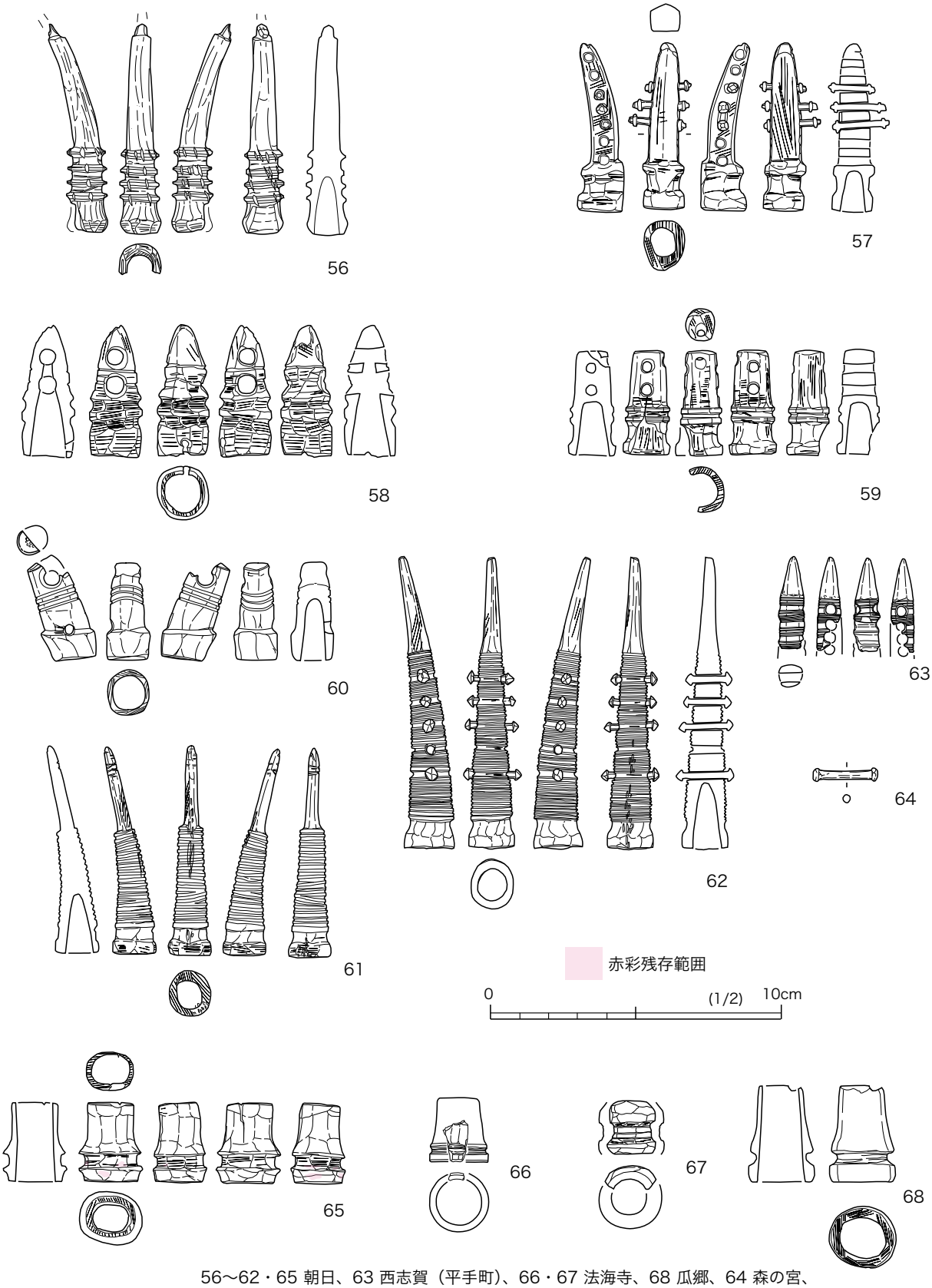
機能・用途的検討

東海地域の縄文晩期の資料を中心に、弭形製品・浮袋の口の機能・用途についての検討を行う。

研究小史で概観したように、（1）角形を弭、（2）臼形を浮袋の口、（3）臼形を装身具類、（4）角形と臼形を合わせて弭、（5）臼形の一部を刺突具のソケット、という想定が提示されている。以上の検討を踏まえて、私見を提示したい。

東海地域で多く認められる角形に関して注目したいのは、中央穿孔の径の規格性と、使用・欠損状況、器面の状態、および装飾の様相である。東北地域の諸事例では、上述したように、中央穿孔内面に、アスファルトなどのピッチ痕が確認される事例が多く、中央穿孔部は、棒状の物体に対して装着するための部分の可能性が高い。東海地域の事例では、ピッチ痕は不明瞭であるが、欠損状況（e）（f）の存在は、使用時に中央穿孔部を中心した部分に、力の作用が加わったことを示す。このことから、中央穿孔はこれら器種が道具として機能するための最大の特徴であるといえ、径がほぼ一致するということは、同様の法量、さらに言及すれば、同質の対象物を挿入していた可能性が考えられる。また、角形で、横穿孔の存在するものの中に、紐ズレと考えられる磨滅痕が確認できるものがあり、その範囲などは、横穿孔の横から下端部側の方向である。

以上、特に角形に関しては、中央穿孔内に何か棒など凸状を呈するものを挿入して使用した、ということは了解でき、ある道具の一部分を構成する要素である可能性が考えられる。それならば、先学の中でも最も想定が多い、飾り弓などの弭が、最も蓋然性が高いようになるか



56～62・65 朝日、63 西志賀（平手町）、66・67 法海寺、68 瓜郷、64 森の宮、
角形 56～63、臼形 65～68、

図14　弥生時代の弭形製品・浮袋の口

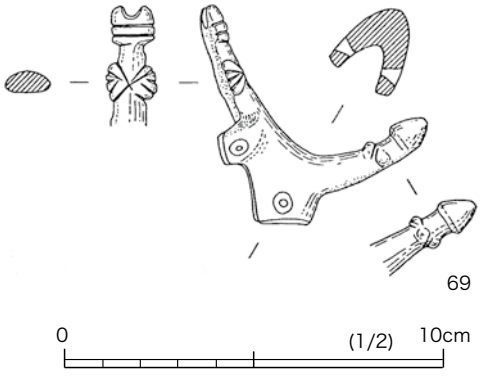


図15　福島県寺脇貝塚出土腰飾り
（江坂・渡辺1968より引用）

もしれない。その場合、角形は末弭側に装着されていたものと想定されよう。しかし、唯一、紐ズレ痕の認められる横穿孔は、すべての角形に認められるものではなく、機能・用途に必ずしも必要なものではないようである。また、横穿孔付近以外の特に凹部分などには紐ズレ痕が形成されておらず、弭を形成していたとしても、角形には直接に弦の結縛などは行なわれていなかったものといえよう。つまりは、飾り弓などを構成する一部分であったとするならば、末弭を構成する実部分が弓の上端よりやや下方に存在して、上端に角形が装着されたという可能性ならば考えられるのである。

別の見方をするならば、棒状の上端（先端）部に挿入されたのであれば、装着先は弓以外のものの可能性も考えられるのである。飾り弓の装飾を否定する訳ではないが、それ以外にも、例えば、装身具類の一部や、あるいは儀器など、道具の一部を構成する、ある意味極めて象徴的な部分を担っていた可能性を提示したい。

一方、臼形に関しても、ここで取り上げるII-a類は、角形と中央穿孔の径の法量がほぼ同じであることから、同様のものを挿入して使用した可能性が高い。これも角形同様に組み合わせの道具の一部として、飾り弓・装身具類・儀状などの一構成部をなしていた可能性を示しておく。

まとめと今後の課題

以上のように、弭形製品・浮袋の口に関して、考察を行なった。本稿は、東海地域の資料を中心に検討を行ったため、関東・東北地域の資料に関しては、十分な精査を行なっているとはいえない。今後は、製作の視点からでは、各地域の鹿角器製作の状況を勘案して、比較・検討を行なう必要があるが、使用においても然りである。表面上では類似して、たとえ系統的に整理できるものだとしても、使用状況においても同一であるという保証はないからである。このことは弥生時代の弭形製品・浮袋の口についても同様のことがいえる。これらに関しては、やはり別途検討が必要である。

弭形製品・浮袋の口は、出土遺跡の分布と出土点数から窺えられるように、骨角器が出土する遺跡であれば、普遍的に出土するという訳でもない。かつ、各遺跡において素材となる鹿角先端丸太材は出土するとしても、それが直接的にこれら器種の製作の様相を示すものではない。現状での出土点数の集中は、平井稲荷山貝塚・吉胡貝塚・伊川津貝塚であり、かつ伊川津貝塚では、角形I-a類の加工途中品と考えられるものも出土している。角形の全体の形態という視点から言及すれば、I類に対して、II・III・IV類の在り方が注目され、特に、同じ渥美貝塚群の中でも、保美貝塚では、I類の出土が現在までのところ確認されていない点は、各遺跡の性格の差の一例として注目できる点であろう。

また、今回取り上げた、特に角形に関して、各種認められる装飾についての更なる検討も必要である。筆者は上述したように、組み合わせの道具の極めて象徴的な部分を担っていると想定している。この装飾の解明により、当時の社会集団の様相を窺う糸口になるかもしれない。そのためには、骨角器のみならず、他素材にも同様の装飾効果を認められる資料の有無を検討する必要がある。

また一方で、本来であれば、遺跡出土の木製弓を検討する必要がある。東海地域においては、縄文晩期に属する木器の出土が顕著ではなく、直接的な検討ができない状況である。近隣では

縄文時代後期・晩期の弓の出土例としては、東京都下宅部遺跡・石川県新保チカモリ遺跡・滋賀県滋賀里遺跡・奈良県橿原遺跡などがある。滋賀里遺跡は、今回分析した弭形製品と木製弓が同一遺跡内で出土している唯一の事例である。下宅部遺跡の事例では、後期後葉のとされる、全面赤彩のある飾り弓において、末弭部分にのみ赤彩などが認められない事例があり、ここに、弭形製品・浮袋の口などの装着が想定されている。これらの分析は別の機会に行ないたい。

謝辞

本稿を草するにあたり、以下の方々・機関からはご教示・便宜を図っていただきました。ここに感謝の意を表します。

鵜飼堅証・大塚達朗・川合　剛・増山禎之・愛知県埋蔵文化財センター諸氏。

愛知県教育委員会・刈谷市教育委員会・田原市教育委員会・知多市教育委員会・天理大学天理参考館・東京大学総合博物館・豊橋市教育委員会・長野市教育委員会・名古屋市博物館・名古屋大学文学部考古学研究室・南山大学人類学博物館・西尾市教育委員会・西尾市立東部中学校・明治大学博物館

遺物所蔵・出典

1･42 長野市教育委員会、2･6 名古屋市博物館、3・4 刈谷市教育委員会、5・33・34 西尾市立東部中学校、7 明治大学博物館、8 東京大学総合博物館、9 ～ 11・13 ～ 17・35・36 天理大学天理参考館、12・68 豊橋市教育委員会、18 ～ 25・28・37・38 田原市教育委員会、26 小野田・芳賀・安井 1995 より引用、27 南山大学人類学博物館、29 田辺ほか 1973 より引用、30・31 市原 1967 より、32 後藤ほか 1958、39・64 八木編 1978 より引用、40・41 西尾市教育委員会、43 ～ 55 新庄屋・阿部ほか 1986 より引用、56 名古屋大学文学部考古学研究室、57 ～ 63・65 愛知県教育委員会、66・67 知多市教育委員会、69 江坂・渡辺 1968 より引用

参考文献

大竹憲治 ,1989『骨角器』東京 ニューサイエンス社。

大竹憲治 ,1992「弥生時代における鹿角製弓弭の二形態」『史碧』２．７～ 10 頁。史碧同人会。

大野延太郎 ,1901「三河國発見の鹿角器を見て」『東京人類学会雑誌』16-182.321 ～ 325 頁。東京人類学会。

岡村道雄 ,1995『日本の美術Ⅰ　No.356 貝塚と骨角器』文化庁ほか。

金子浩昌・忍沢成視 ,1986『骨角器の研究　縄文篇Ⅰ・Ⅱ』東京 慶友社。

川添和暁 ,2004「「道具」からみる縄文晩期の生業について―根挟みを中心に―」『研究紀要』５.1 ～ 14 頁。愛知県埋蔵文化財センター。

川添和暁 ,2007「鹿角製装身具類について―東海地域の縄文時代晩期を中心に―」『研究紀要』８.1 ～ 22 頁。愛知県埋蔵文化財センター。

久貝　健 ,1969「弓筈状有栓骨角製品について」『河内考古学』３.

楠本政助 ,1976「縄文時代における骨角製刺突具の機能と構造」『東北考古学の諸問題』127 ～ 149 頁。東北考古学会。

甲野　勇 ,1939a「所謂「浮袋の口」に就て」『人類学雑誌』54-2.42 ～ 53 頁。東京人類学会。

甲野　勇 ,1939b「弭形鹿角製品に就て（上）」『考古学雑誌』29-9.14 ～ 18 頁。考古学会。

甲野　勇 ,1939c「弭形鹿角製品に就て（下）」『考古学雑誌』29-10.39 ～ 47 頁。考古学会。

甲野　勇 , 1956「生活用具」『日本考古学講座』３.226 ～ 246 頁。東京 河出書房。

小林行雄 ,1959「浮袋の口」『図解 考古学辞典』81 ～ 82 頁。東京 東京創元社。

佐原　眞 ,1959「弭形角製品」『図解 考古学辞典』1002 ～ 1003 頁。東京 東京創元社。

坪井正五郎 ,1900「三河国石器時代遺跡発見の珍物」『東京人類学会雑誌』15-172.421 ～ 426 頁。東京人類学会。

武井則道 ,1972「いわゆる「弓筈状有栓骨角製品」について」『貝塚』９．１～５頁。物質文化研究会。

長井謙治 ,2005「長野市宮崎遺跡石器集中部の概要」『立命館大学考古学論集』Ⅳ.15 ～ 27 頁。立命館大学考古学論集刊行会。

中谷治宇二郎 ,1929『日本石器時代提要』東京 岡書店　[1943『校訂 日本石器時代提要』東京 甲鳥書院]。

築瀬孝延 ,2006「保美貝塚出土骨角器・貝製品の報告」『研究紀要』10. ３～ 21 頁。田原市渥美郷土資料館。

吉田　格 ,1955「骨器・角器」『日本考古学講座』１.152 ～ 163 頁。東京 河出書房。

報告書など

伊藤正人・川合　剛 ,1993『名古屋の縄文時代 資料集』名古屋市見晴台考古資料館。

市原寿文 ,1967「遠江石原貝塚の研究―縄文後期における地域性の問題をめぐって―」『人文論集』18.25 ～ 50 頁。静岡。

江坂輝弥・渡辺　誠 ,1968「寺脇貝塚発掘調査報告」『小名浜―小名浜湾周辺の遺跡調査報告集―』157 ～ 218 頁。いわき市教育委員会磐城出張所。

小野田勝一・春成秀爾・西本豊弘 ,1988『伊川津遺跡』渥美町教育委員会。

小野田勝一・芳賀　陽・安井俊則 ,1995『伊川津遺跡』渥美町教育委員会。

加藤岩蔵・齋藤嘉彦ほか ,1972『本刈谷貝塚』刈谷市教育委員会。

清野謙次 ,1969『日本貝塚の研究』東京 岩波書店。

後藤守一ほか ,1958『蜆塚遺跡 その第二次発掘調査』浜松市教育委員会。

小林知生・高平修一・長谷部学・早川正一 ,1966『保美貝塚』渥美町教育委員会。

斎藤　忠ほか ,1952『吉胡貝塚』文化財保護委員会。

斎藤弘之 ,2004「３ 堀内貝塚」『新編 安城市史』10 資料編 考古 .12 ～ 25 頁。安城市。

新庄屋元晴・阿部　恵ほか 1986『田柄貝塚 III』宮城県教育委員会。

末永雅雄 ,1961『橿原』奈良県教育委員会。

杉崎　章ほか ,1968「半田西の宮貝塚」『半田市誌 』資料編Ⅰ 35 ～ 122 頁。半田市誌編纂委員会。

杉原荘介・外山和夫 ,1964「豊川下流域における縄文時代晩期の遺跡―稲荷山遺跡・五貫森遺跡・大蚊里遺跡・水神平遺跡の調査―」『考古学集刊』2-3.37 ～ 101 頁。東京考古学会。

田辺昭一ほか ,1973『湖西線関係遺跡調査報告書』湖西線関係遺跡発掘調査団。

芳賀　陽編 ,1997『水神貝塚』豊橋市教育委員会。

久永春男ほか ,1972『伊川津貝塚』渥美町教育委員会。

牧　富也ほか ,1983「枯木宮貝塚」『西尾市史 自然環境 原始古代』802 ～ 901 頁。西尾市史編纂委員会。

八木久栄編 ,1978『森の宮遺跡 第３・４次発掘調査報告書』難波宮址顕彰会。

矢口忠良・青木和明・鶴田典昭ほか ,1988『宮崎遺跡―長原地区団体営土地改良総合整備事業に伴う発掘調査報告書―』長野市教育委員会。

古墳時代の鉄鐸について

早野浩二

本文では、最初に、春日井市高蔵寺５号墳の鉄鐸と砥石（提砥）、同廻間７号墳の鞴羽口、田原市藤原１号墳の鉄鐸と同２号墳の鉄塊を提示した。次に、鉄鐸にについての基礎的把握として、日本列島の鉄鐸の出土事例を検索し、研究の流れを参照した。それを踏まえて、高蔵寺５号墳、藤原古墳群周辺の情況を、美作地域において鉄鐸、鍛冶具、鉄滓、鉄塊が副葬、供献される現象と対比した。結果、祭祀具として鉄鐸が副葬、所持される背景に、鉄器製作との一定の相関を認めた一方、その関係性には地域性が反映されている可能性が高いことを述べた。

はじめに

本文は、古墳時代の祭祀にかかる研究の一環として、同時代の鉄鐸を対象とした基礎的な整理を試みるものである。最初に、春日井市高蔵寺５号墳の鉄鐸、同廻間７号墳の鍛冶具としての鞴羽口、田原市藤原古墳群の鉄鐸、鉄塊について資料を提示する。それを受けて、祭祀具としての鉄鐸の出土傾向と研究の流れを通覧し、鉄鐸に関連する諸事象を大局的に把握する。

さて、鉄鐸については、石突（状の鉄製品）として扱われることも多い。ここでは、扇形、あるいは台形に裁断した鉄板を丸めるように両端を閉じ合わせて鐸身とし、身の頂部に舌を吊るすための懸通孔が貫通する構造の製品を鉄鐸として認識する。なお、鉄鐸の部位名称は図１に示す通りである。舌については、幾つかの例から、頂部の懸通孔を通じて、先端を丸めた棒状体を針金状のもので吊るしていたことが指摘されているが、ごく単純な装置であることから、舌そのものは遺存しないことも多い。従って、鉄鐸を認識する際、舌の有無は第一義的な判断材料とはならない。

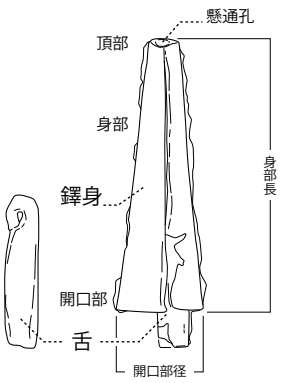


図１　鉄鐸の部位名称

資料

高蔵寺５号墳の鉄鐸

高蔵寺５号墳は、春日井市玉野町塚本に所在する（図２）。５基を数える高蔵寺古墳群は、庄内川に面した河岸段丘上に立地し、５号墳の西北西約 4.5km には、古式の双龍環頭大刀（双龍Ⅲ式）を副葬する同市の猪ノ洞古墳がある。また、対岸の河岸段丘上の名古屋市守山区上志段味地区・東谷山周辺には、白鳥塚古墳、志段味大塚古墳、東谷山古墳群などの古墳、古墳群が数多く分布する。５号墳の墳丘は、大部分が開墾によって失われ、すでに横穴式石室も露出していた。横穴式石室は西南方向に開口する全長 8.05 mの擬似両袖型石室である（図３）。玄

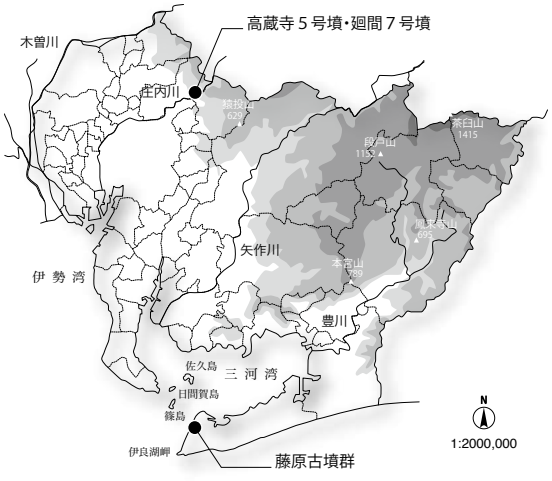


図２　古墳の位置

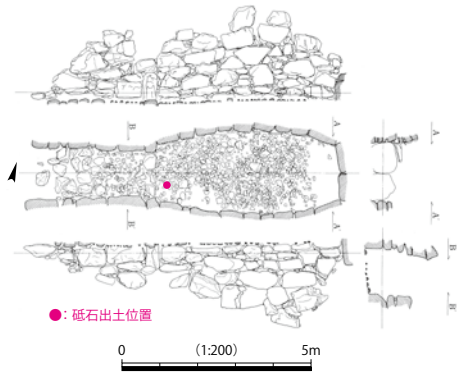


図３　高蔵寺５号墳横穴式石室

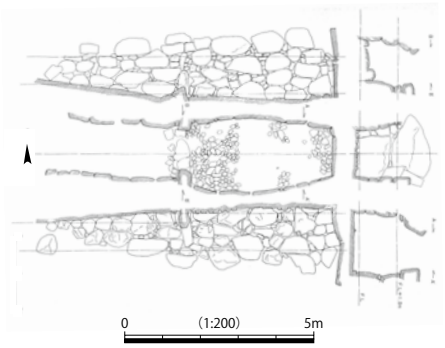


図５　廻間７号墳横穴式石室

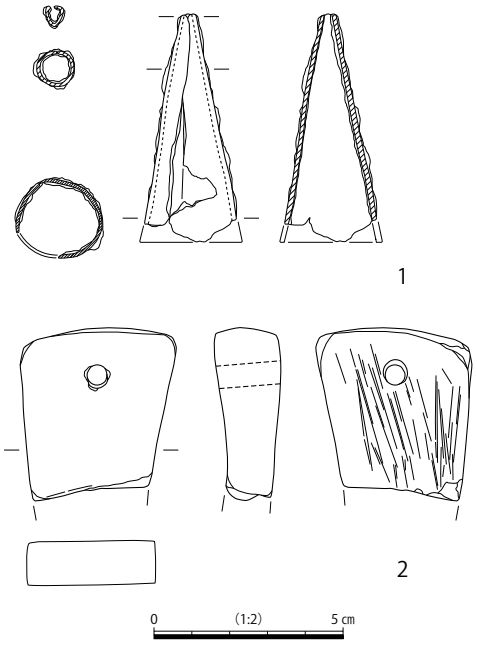


図４　高蔵寺５号墳出土鉄鐸・砥石

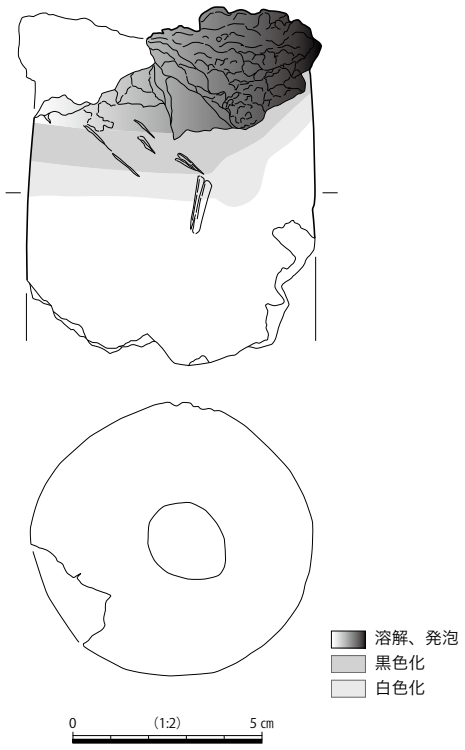


図６　廻間７号墳出土轡羽口

室は胴張りを呈し、長さ 4.72 m、最大幅 2.2 mを計測する。玄門には立柱石と梱石が配される。羨道は長さ 3.3 m、最大幅 1.4 mを計測し、開口部に向かってやや開く。

横穴式石室の玄室と玄門付近の床面からは、須恵器、耳環、大刀、刀子、鉄鏃、馬具、鉄鐸、砥石が出土した。「円錐形鉄製品」として報告された鉄鐸は、床面から出土した遺物としては報告されていない。砥石は、玄室内、（奥壁から向かって）左壁側の玄門近くの床面より出土した。なお、石室から出土した須恵器は、およそ東山 44 号窯期（TK209 型式期に併行）に相当する。

鉄鐸（図４－１）は、笠形にも近い円錐形で、身部長 6.0cm、開口部径 2.4cm を計測する。厚さ約 1.0mm の扇形の鉄板を閉じ合わせて製作され、合わせ目も明瞭に観察される。身の合わせ目下半には隙間があり、合わせ目は完全には閉じられていない。身の断面形は、開口部付近は正円に近いが、頂部付近は三角形に近い。頂部は懸通孔が貫通するが、舌は遺存しない。

砥石（図４－２）は、残存長 4.6cm、最大幅 4.1cm、最大厚さ 1.8cm の偏平な方柱状で、４面の側面を使用面とする。頂部に径 0.5cm の紐孔を穿孔した、いわゆる「提砥」で、石材は砂質凝灰岩である。

廻間７号墳の鞴羽口

廻間７号墳は、春日井市廻間町高森に所在し、内津川の支流、大谷川によって開析された小谷の丘陵斜面に立地する（図２）。なお、先の高蔵寺５号墳からは、独立丘陵である高座山を隔てた北北東 4.5km の位置にある。墳丘は、土砂の流出、林道開設によって大きく損壊するが、径約 11 m以上の円墳であったと推測されている。埋葬施設である横穴式石室は、西方向に開口する全長 7.8 mの擬似両袖型石室である（図５）。玄室は胴張りを呈し、長さ 3.8 m、最大幅 2.0 mを計測する。玄門には立柱石と梱石が配される。羨道は、長さ 3.5 m、幅 1.3 mを計測し、両側壁は直線的である。

玄室内の流入土中、玄室の床面付近からは、須恵器、土師器、耳環、刀子、鞴羽口が出土した。「円筒状土製品」として報告された鞴羽口は、玄室内の流入土から出土した。なお、石室から出土した須恵器はおよそ東山 44 号窯期（TK209 型式期に併行）に相当する。

鞴羽口（図６）は、肉厚、円筒状の形態で、残存長 9.6cm、外径 7.6cm、内径 2.4cm を計測する。先端部分は黒色ガラス質化し、先端部側から黒色（幅約 1 cm）、白色（幅 1 約 cm）に熱変化する。熱変化していない部分（被熱前）の色調は橙色～黄橙色である。精良な胎土で、胎土中には多くのスサが混和されていた痕跡も観察される。なお、鞴羽口については、古代以降に帰属する混入遺物であることも懸念されたが、出土遺物中に古代以降の出土遺物は確認されなかったので、ひとまずは古墳に伴う遺物として理解しておく。

藤原古墳群の鉄鐸と鉄塊

藤原古墳群は田原市中山町藤原に所在し、渥美半島先端、三河湾に面した砂丘上に立地する（図２）。なお、付近には八幡上遺跡などの製塩遺跡が分布し、藤原１・２号墳においても製塩土器（渥美式Ｃ類）が出土している。なお、藤原古墳群は、１号墳の墳丘と石室の規模、１・２号墳に副葬された装飾付大刀等から、渥美半島でも優位な位置にあることが推断される。鉄鐸は１号墳、鉄塊は２号墳より出土した。

１号墳は、径 27 m、高さ 1.2 mの群中最大の円墳である。埋葬施設である横穴式石室（図７―左）は、南方向に開口する全長 10.24 mの擬似両袖型石室であるが、玄室幅に比して羨道幅がやや狭い点は、両袖型石室の要素でもある。玄室はわずかに胴張りを呈し、長さ 4.80 m、最大幅 2.03 mを計測する。床面には棺台とみられる敷石がある。羨道は床面が開口部に向かって約１m上り傾斜となる構造で、長さ 4.92 m、最大幅 1.36 mを計測し、両側壁は直線的である。なお、石室の石材は、三河湾の島嶼部あるいは、最奥部に産出する石材であることが指摘されている。

石室の床面からは、須恵器、耳環、鉄鏃、刀子、金銅製鴟目金具等が出土した。「石突」として報告された鉄鐸は、棺台と奥壁との空間に他の遺物とまとまった状態で出土した。これらの出土遺物はおよそ TK43 型式期に相当する。

鉄鐸は、身部長約 3.6cm、開口部径約 1.6cm の円錐形で、高蔵寺５号墳の鉄鐸と同様に、鉄板の両端を閉じ合わせて製作されているようである。報告書に詳細が記載されていないので、

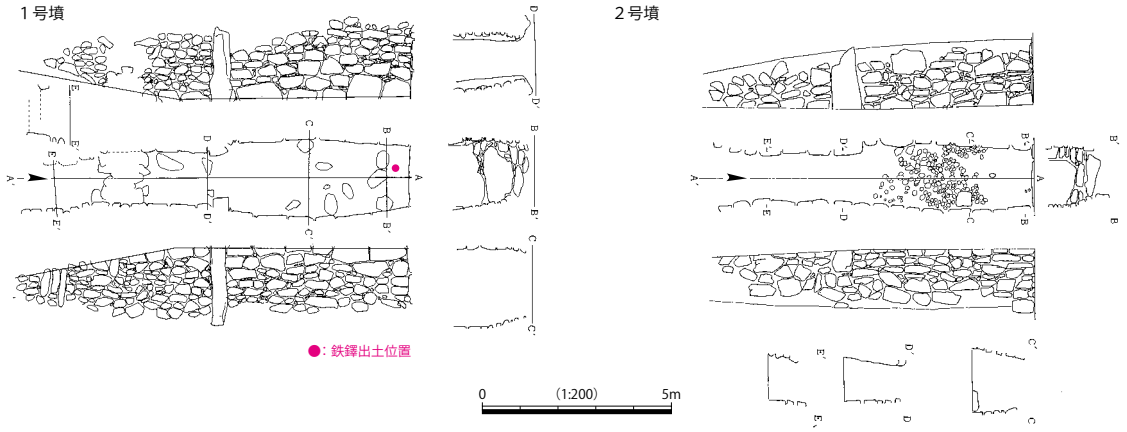


図７　藤原１・２号墳横穴式石室

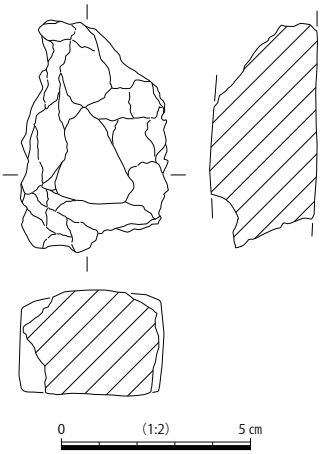


図８　藤原２号墳出土鉄塊

頂部の構造などについては明らかでないが、舌は遺存していないようである。

２号墳は、長軸 12 m、短軸 10 mの楕円形を呈する円墳である。埋葬施設である横穴式石室（図７―右）は、南方向に開口する全長 6.3 mの右片袖となる石室であるが、左右の玄門に立柱石を配する構造は、擬似両袖型石室に通じる要素である。玄室はほぼ長方形で、長さ 3.6 m、幅 1.3 mを計測する。羨道は長さ 2.7 m、最大幅 1.2 mを計測し、開口部に向かってやや開く。石室からは、須恵器、耳環、金銅装圭頭大刀、大刀、鉄鏃、弓飾り金具等が出土した。床面は撹乱されていたので、遺物の正確な出土位置は明らかでない。出土遺物はおよそ TK209 型式期に相当する。

鉄塊（図８）は、平滑な面が２面残存し、方柱状を呈していたと推測される。残存長 6.2cm、残存幅 3.9cm、厚さ 2.8cm を計測する。個体の残存状況からは、素材か製品かの識別は困難であるが、１号墳の鉄鐸との相関性をも考慮すれば（後述）、前者として理解してもそれほど不自然ではないように思われる。

鉄鐸について

基礎的把握

鉄鐸については、行田裕美が朝鮮半島を含めた古墳時代以降の資料を集成し、形態と機能、出土傾向、消長と分布について基礎的な考察を行っている（行田 1997）。小文においても行田の集成を基礎として、改めて古墳時代の鉄鐸を検索したが、従来、鉄鐸に対する認識が乏しかったこともあって、資料を完全に網羅することは難しく、詳細が公表されていない事例も少なくない。今後も資料の確認に努め、基礎資料を充実化することが望まれる。

現在までに管見に及んだ鉄鐸の出土例を図９・10、表１に示した。それによると、古墳から出土した例が圧倒的に多く、その他、集落・祭祀遺跡からの出土例も若干が知られている。出土する古墳は中小の古墳、地下式横穴墓がほとんどで、埋葬施設から出土する以外に、古墳の周溝から出土する事例も少なくない。

出現する時期は TK216 型式期前後で、以後、古墳時代を通じて消長する。確実な最古の例が岡山県西吉田北１号墳例である点は、現状においても大きな変更を要さない。分布については、九州地方に多く、瀬戸内地方、東海・近畿地方にかけて点在し、中部高地・北関東地方にまで及ぶ。

鐸身の形状は基本的に円錐形で、笠形に近いものと細身のものの両者がある。断面形については、正円に近いものと、不整な三角形状となるものがある。大きさは身部長６cm 前後、開口部径２～３cm のものが多く、身部長が10cm 以上となるものはほとんどない。ただ、鐸身の形状や大きさについては、行田も指摘するように、素材として裁断した鉄板の形状や大きさによって決定されるので、形状や大きさから型式学的に有意な属性を抽出することは難しい。閉じ合わせの方法についても、捻るように丸めて閉じ合わせるもの（合わせ目が斜方向）、鉄板の両端を合わせるように閉じ合わせるもの（合わせ目が縦方向）の両者があるが、これについても鉄板の形状に影響される性質の差異である。ただ、複数個体が同時に出土する場合、個体間で形状や大きさ、製作方法が相互に近似することが多い。このことは、埋葬や儀礼に際して、複数が一連の製品として製作されたことを示唆する。

鐸身内部の舌については、X線を通じた観察に頼る部分が大きい。幾つかの舌の遺存例からすると、棒状体の先端を叩き伸ばし、それを折り曲げて、懸通孔から通した針金状のものを懸ける装置とするものが多いようである。

研究の現状

従来から、古墳から出土する鉄鐸については、福岡県カクチガ浦３号墳の周溝において鉄鉗、同６号墳の周溝において陶質土器が共伴すること、西吉田北１号墳の箱式石棺において鉄鉗が伴出し、周溝からは鍛が出土することから、鉄鐸の所持、副葬の背景については、渡来系鍛冶工人との関係が類推されることも多い（亀田2000、村上2004 a・2007 など）。特に、村上恭通は、鉄鐸を渡来系の遺物として評価し、「鍛冶具に共伴する渡来系遺物は近畿地域では雛型鉄器、中国・九州地域では鉄鐸、馬形帯鉤、鋳造梯形斧であり、明らかに種類が異なっている」として、（鍛冶具副葬古墳における）鍛冶具と雛型鉄器（小型鉄製農工具）、鉄鐸の相関性に地域性があることを示唆している（村上2007）。

一方、朝鮮半島出土の鉄鐸については、朴淳發が、鉄鐸所持者の多様な性格について触れ、鍛冶具を共伴する陜川苧浦Ｅ地区５- １号墳の被葬者を鍛冶工人集団と推定しつつ、銀製鋲帯金具などが共伴する新院里２号墳の被葬者については、副葬品の質の高さや古墳の規模から、村落社会の豪民層または土豪層と推定した（朴淳發 1991）。村上恭通も、鍛冶具と鉄鐸が共伴する事例から、「陜川、昌原という加耶地域に限られた現象」としつつ、鉄鐸を鍛冶の技術者の出自や系譜を考えるうえで重要な遺物と認識している（村上 2004 b）。洪潽植は、鉄鐸を宗教的な道具として、小型墳における鉄鐸の副葬を、儀礼遂行者の社会的地位の低下と関連させて理解した（洪潽植 1995）。金東淑は、嶺南地方の古墳出土の６～７世紀代の鉄鐸を集成し、型式、年代、分布、出土状況等を詳細に考察した（金東淑 2000）。それによると、鋳造製を含む各型式が６世紀前葉までには出現し、以後、盛んに副葬されるようになるという。また、その型式の多様さからは、各地における自主生産が想定され、鉄鐸所持者の性格については、専業的な巫俗としての性格が重視されている *。

以上、研究の流れを通覧すると、鉄鐸が祭祀具であるとする認識はほぼ共通しているとみてよい。また、朝鮮半島との関係、鉄器製作者集団との関係が想定される事例も多いが、必ずしも全ての事例が適合するのではなく、その関係性については、朝鮮半島を含めて地域的な傾向を考慮する必要があることが理解される。

* なお、洪潽植や金東淑が整理したように、朝鮮半島の鉄鐸は６世紀以降に増加し、多様な型式が分布する。それに対して、古墳時代の鉄鐸は、基本的に鍛造製の円錐形（洪潽植Ⅱ式・金東淑Ａａ型）で、５世紀後半の事例が少なからず散見される。つまり、５世紀後半における鉄鐸の系譜や性格については、議論が十分でなく、現段階において確証的な帰結を導くことは困難である。

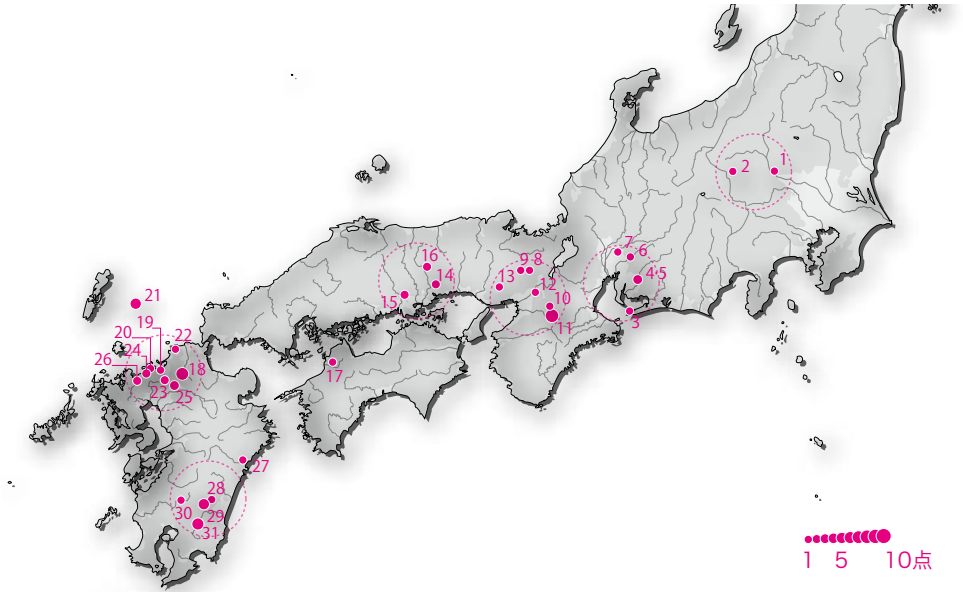


図９　古墳時代の鉄鐸の分布

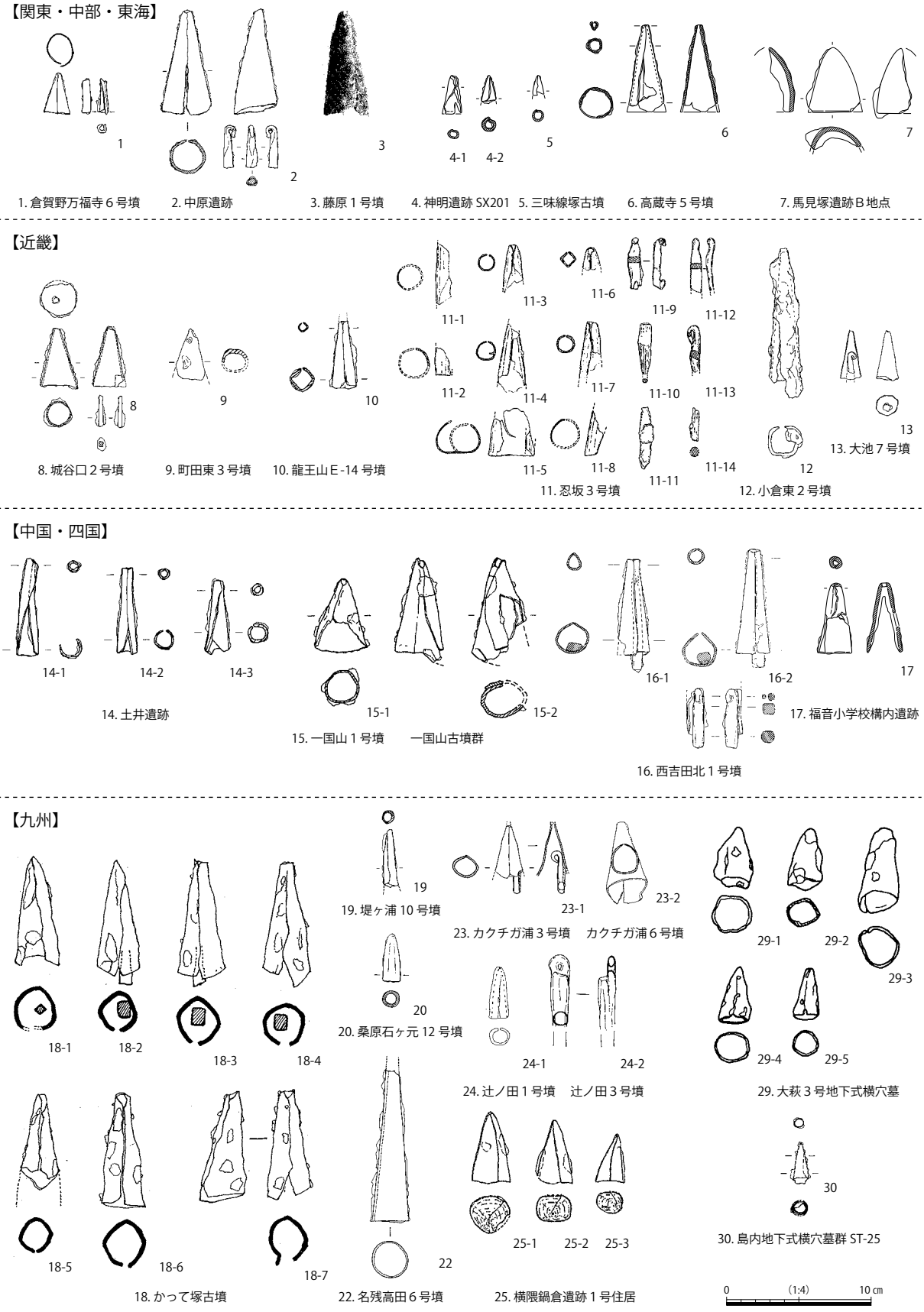


図 10　古墳時代の鉄鐸の諸例

表１　鉄鐸出土地名表（古墳時代）

		所在地	出土遺構	点数	舌	時期	共伴遺物
1	倉賀野万福寺６号墳	群馬県高崎市	竪穴式小石棺	1	○	５世紀後半～６世紀前半	小型刀子 臼玉
2	中原遺跡	長野県小諸市	竪穴住居	1	○	７世紀後半	土師器
3	藤原１号墳	愛知県田原市	横穴式石室	1		６世紀後葉	金銅製鴉目金具、鉄鏃、刀子 耳環、須恵器
4	神明遺跡	愛知県豊田市	祭祀遺構	2	×	５世紀後葉	鉄鏃、鉄鋌、鉄滓 石製模造品有孔円板、臼玉、ガラス玉、土師器・須恵器、炭化桃核
5	三味線塚古墳	愛知県豊田市	周溝	1	×	５世紀中葉	鉄鏃、U字形鍬鋤先（周溝）鉄鏃（粘土槨） 石製模造品有孔円板・勾玉、臼玉、土師器・須恵器（周溝）炭化桃核（粘土槨）
6	高蔵寺５号墳	愛知県春日井市	横穴式石室	1	×	６世紀末	大刀、鉄鏃、刀子 鞍金具、耳環、砥石、須恵器
7	馬見塚遺跡	愛知県一宮市	祭祀遺構	1	×	５世紀中葉	鉄剣、大刀、鉄鏃、刀子、鎌、鉄鋌、鉄滓 石製模造品有孔円板 ・勾玉・ 剣、管玉、臼玉、土鈴？、鏡形土製品？、土師器・須恵器、炭化米
8	城谷口２号墳	京都府南丹市	横穴式石室	1	○	６世紀中葉	大刀、蛇行剣、鉄鏃、鏃状鉄製品、刀子 ガラス玉、須恵器
9	町田東３号墳	京都府南丹市	木棺	1	×	５世紀後半	鉄剣、鉄槍、鉄鉾、鉄鏃、小型鉄斧、小型鉄鎌、小型鉄鑿
10	龍王山E-14号墳	奈良県天理市	横穴式石室	1	×	６世紀末	鉄鏃、刀子、鉄釘、不明鉄製品 土師器・須恵器
11	忍坂３号墳	奈良県桜井市	横穴式石室	8	○	６世紀末	鉄鏃、刀子、鉄釘 耳環、土師器・須恵器
12	小倉東２号墳	大阪府枚方市	木棺	1	×	６世紀後半	耳環
13	大池７号墳	兵庫県三木市	第４主体部	1	○	６世紀中葉	刀子 須恵器
14	土井遺跡	岡山県赤磐市	土坑墓	3	×	６世紀後半	耳環
15	一国山１号墳	岡山県岡山市	周溝	1	×	５世紀中葉	大刀（箱式石棺１）鉄鏃、U字形鍬鋤先、胡籙金具（箱式石棺２） 勾玉、管玉、ガラス玉（箱式石棺１） 紡錘車、土師器・須恵器（周溝）
	一国山古墳群	岡山県岡山市	流土中	1	×	５世紀後半？	
16	西吉田北１号墳	岡山県津山市	箱式石棺	2	○	５世紀中葉	鉄鉗（箱式石棺）、刀子、鑿（周溝） 土師器・須恵器（周溝）
17	福音小学校構内遺跡	愛媛県松山市	遺構外	1	×	５世紀後半？	鉄鏃、方形鍬鋤先、鎌、手鎌、鑿、鋳造鉄斧、鉄鋌（遺跡内） 石製模造品有孔円板・勾玉・子持勾玉、臼玉、管玉、土師器・須恵器（遺跡内）
18	かって塚古墳	福岡県嘉麻市	横穴式石室	7	○	５世紀後半	大刀、鉄剣、鉄鉾、鉄鏃、横矧板鋲留短甲、鉄斧、刀子 方格Ｔ字鏡、ガラス玉
19	堤ケ浦10号墳	福岡県福岡市博多区	横穴式石室	1	×	６世紀末	大刀、鉄鏃、鉄斧、刀子、楔、鉄釘、不明鉄器、鉄滓 耳環、紡錘車、土師器・須恵器
20	桑原石ヶ元12号墳	福岡県福岡市西区	横穴式石室	1	×	６世紀後葉	大刀、鉄鏃、弓金具、鉄斧、刀子、鉄床、鉄鉗、鉄鎚、鋸、鑿、鉇 素環鏡板付轡、鋲具、有脚半球形雲珠・辻金具、馬鈴、耳環、ガラス玉、土師器・須恵器
21	沖ノ島１号祭祀遺跡	福岡県宗像市	祭祀遺構			古墳時代～	
22	名残高田６号墳	福岡県宗像市	横穴式石室	1	×	６世紀後葉	鉄鏃、留金具 金銅製空玉、土製玉
23	カクチガ浦３号墳	福岡県筑紫郡那珂川町	周溝	1	○	５世紀後葉	小刀、刀子、鉄鉗（周溝内） 鉄鏃（石室内） 轡、鋲具、帯金具、須恵器（周溝内）帯金具、土師器・須恵器（石室内）
	カクチガ浦６号墳	福岡県筑紫郡那珂川町	周溝	1	×	５世紀後葉	鉄鏃、鑿、不明鉄製品（周溝内）鉄鏃、弓金具、小刀、刀子（石室内） 土師器・須恵器（周溝内） 臼玉、ガラス玉、須恵器、陶質土器（石室内）
24	辻ノ田１号墳	福岡県前原市	横穴式石室	1	×	６世紀前半	
	辻ノ田３号墳	福岡県前原市	横穴式石室	1	×	７世紀	
25	横隈鍋倉遺跡	福岡県小郡市	竪穴住居	3	×		鉄鏃、刀子
26	中原５号墳	佐賀県唐津市	周溝	2	×	５世紀	刀子、鎌、手鎌、鉇 石製模造品有孔円板、臼玉、琥珀玉、ガラス玉
27	南方32号墳	宮崎県延岡市		1			
28	六野原10号地下式横穴墓	宮崎県東諸県郡国富町	地下式横穴	1	×	５世紀後半	大刀、鉄剣、鉄鏃、U字形鍬鋤先、小札横矧板眉庇付冑、横矧板鋲留短甲 X字環状鏡板付轡、獣形鏡、管玉、土師器
29	大萩３号地下式横穴墓	宮崎県西諸県郡野尻町	地下式横穴	5	×	５世紀後半～６世紀前半	鹿角装鉄剣、鉄鏃、鉄斧、刀子、U字形鍬鋤先 骨鏃
30	島内地下式横穴墓群ST-25	宮崎県えびの市	地下式横穴	1	×	５世紀後半	鉄鏃
31	菓子野３号地下式横穴墓	宮崎県都城市	地下式横穴	6	×	５世紀～６世紀	蛇行剣

高蔵寺５号墳、藤原１号墳の鉄鐸の位置

さて、高蔵寺５号墳の鉄鐸については、砥石（提砥）*が同時に副葬されることに加えて、近隣の廻間７号墳には鞴羽口が副葬されていることから、その副葬の背景には、鉄器製作と一定の関係があったことも推測される。藤原１号墳の鉄鐸についても、藤原２号墳の鉄塊から、鉄器製作との関係が推測される。これに関連して、渥美半島先端からも近い日間賀島の南知多町北地 14 号墳に、鉄滓（図 11）と製塩土器が副葬されていることも想起される。なお、藤原古墳群と北地古墳群は、三重県岸岡窯産の脚付短頸壷の副葬（中野 1993、藤原 1995）、あるいは石室石材の供給関係などから、相互に緊密な関係にあったことは疑いない。また、鉄製の祭祀具という点においては、田原市栄厳古墳群から出土した鉄製馬形（図 12）も注目される。

その他、東海地域の事例についても触れておく。豊田市神明遺跡 SX201、同三味線塚古墳周溝においては、小型の鉄鐸と考えられる円錐形の鉄製品が計３点出土している。いずれも小型で、頂部が貫通しないことから、非実用品と考えられる。これらは、鉄鋌、小型鉄製農工具、鍛冶滓と相関する可能性がある。また、一宮市馬見塚遺跡Ｂ地点の祭祀遺構においても、鉄鐸と鉄鋌に擬される鉄製品の出土がある（これらの詳細については、別稿を用意している）。

以上、高蔵寺５号墳、藤原１号墳に鉄鐸が副葬された背景として、砥石（提砥）、鞴羽口、鉄塊、鉄滓、鉄製馬形といった特徴的な遺物を例示しながら、鉄器製作と一定の関係が看取されることを述べた。この関係性を理解する際に参考となるのが、美作地域の西吉田北１号墳の周辺地域である。

TK216 型式期の西吉田北１号墳は、鉄鐸に加えて、鉄鉗、鑿等（図 13―１～５）を副葬、供献することは先に述べた。その至近には、鍛冶具、鉄塊、鉄滓など（同６～ 10）を副葬する長畝山・長畝山北古墳群が TK23 ～ MT15 型式期を通じて築造されている。さらに、西吉田北１号墳、長畝山・長畝山北古墳群と同一の山塊にある河辺上原古墳群は、TK47 ～ MT85 型式期を通じて築造された古墳群で、群中の古墳は、鋳造鉄斧、鉄塊、鉄滓など（同 11 ～ 15）を副葬する。なお、長畝山・長畝山北古墳群、河辺上原古墳群では、埋葬施設内への土器の供献が普遍化していること、長畝山北８号墳第１主体、長畝山北９号墳第３主体には算盤玉形紡錘車が副葬されていることなど、渡来系の色彩が顕著に反映されていることも特徴的である。つまり、この地域では、５～６世紀を通じて、鉄器製作を職掌とする集団が定着し、その集団内において鍛冶具や鉄素材、鉄滓を副葬、供献する儀礼が継続して実施されていたことが理解される。

このとき、これらの事例が、高蔵寺５号墳、藤原１号墳とその周辺地域における情況に対して一定の示唆を与えるものと評価することも可

* 提砥（佩砥）については、日本と朝鮮半島の出土例を比較検討した入江文敏による考察が参考となる（入江 1998）。

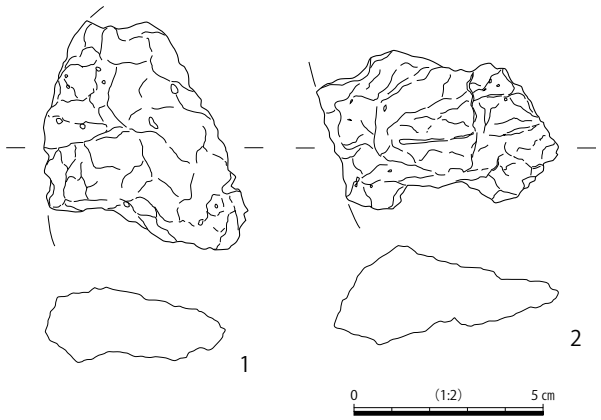


図 11　北地 14 号墳出土鉄滓

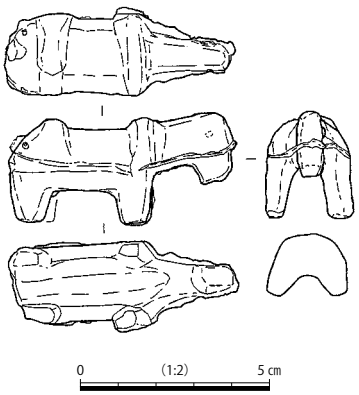
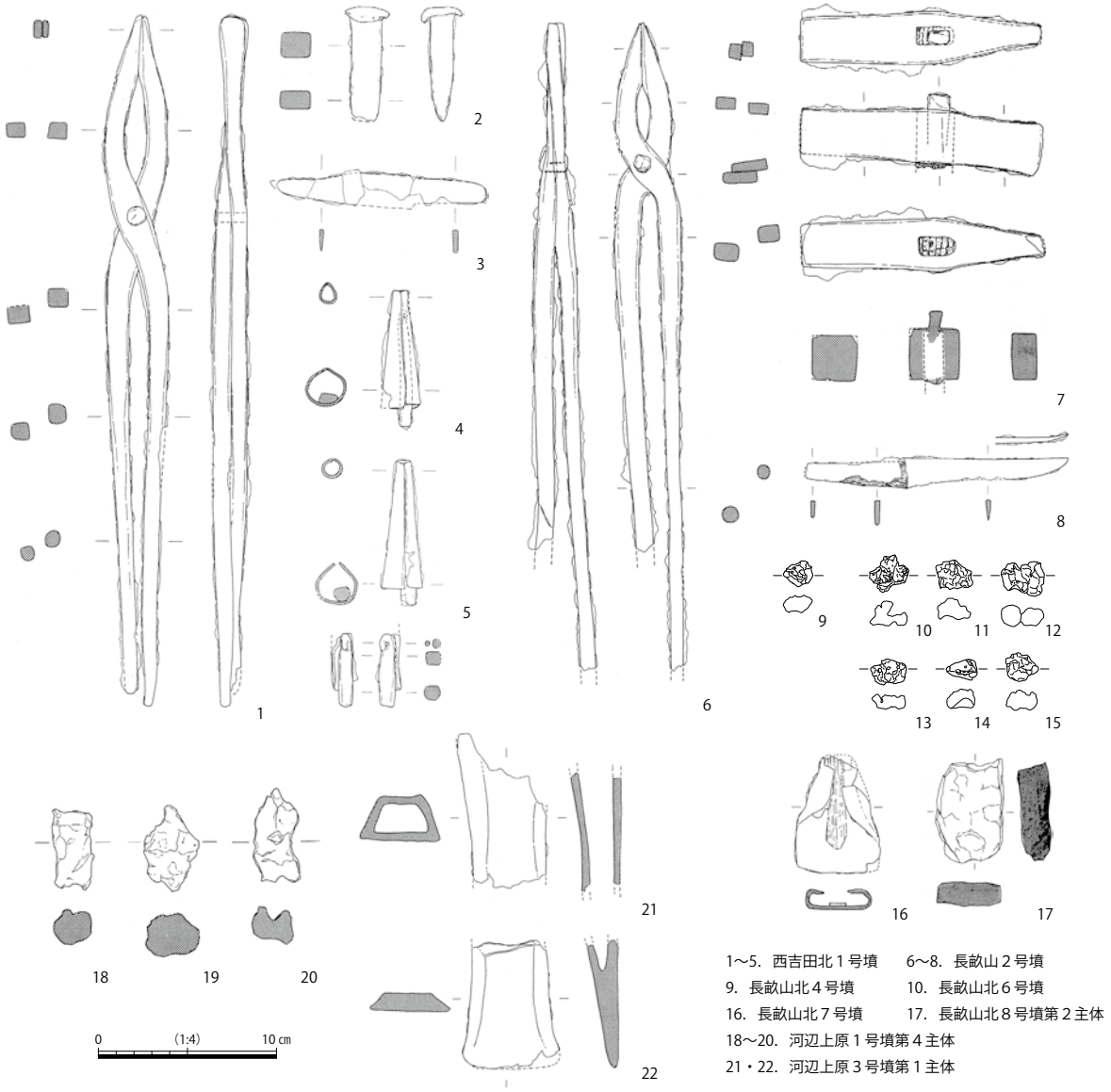


図 12　栄厳古墳群出土鉄製馬形

		墳形・規模	埋葬施設	鍛冶具、鉄塊、鉄滓等	他の副葬品など	時期
西吉田北１号墳		方・11×9.5m	箱式石棺	鉄鐸、鉄鉗、鑿	（鑿、刀子は周溝から出土）	TK216
長畝山２号墳		円・17m	礫床	鉄鉗、鉄鎚、鑿、鍛冶滓	鉄鏃、鉄斧、刀子、鎌、馬具、玉類、紡錘車、土師器・須恵器	TK23～TK47
長畝山北４号墳		円・12.3×11m	木棺	鍛冶滓	刀子、耳環、玉類、須恵器	TK47
長畝山北５号墳	第１主体	円・14.5m	竪穴式石室	鍛冶滓	鉄剣、鉄鏃、胡簶、刀子、鎌、鑿、鉇、馬具、耳環、玉類、土師器・須恵器	TK23
長畝山北６号墳		円・11m	木棺	鍛冶滓	鎌、鉄斧、鑿、須恵器	TK23
長畝山北７号墳		円・9.5m	木棺	小型鉄斧	大刀、鉄鏃、鉄斧、刀子、鎌、土師器・須恵器	TK23
長畝山北８号墳	第２主体	円・17m	竪穴式石室	鉄塊	鍬鋤先、耳環	TK47
長畝山北９号墳	第１主体	円・14.5×14m	木棺	鍛冶滓	大刀、鉄鏃、刀子、鑿、須恵器	TK23
	第２主体		木棺	鍛冶滓	鉄鏃、刀子、土師器・須恵器	TK47
河辺上原１号墳	第３主体	円・16.5m	木棺	鍛冶滓	鉄鏃、耳環、玉類、土師器・須恵器	TK10
	第４主体		礫床	鉄塊	大刀、刀子、鎌、鉇、土師器・須恵器、埴輪	TK10
河辺上原３号墳	第１主体	円・20m	木棺	鋳造鉄斧、鍛冶滓	鉄鏃、鉄斧、鑿、土師器・須恵器	MT15



1～5．西吉田北１号墳　6～8．長畝山２号墳
9．長畝山北４号墳　10．長畝山北６号墳
16．長畝山北７号墳　17．長畝山北８号墳第２主体
18～20．河辺上原１号墳第４主体
21・22．河辺上原３号墳第１主体

図 13　西吉田北１号墳、長畝山・長畝山北古墳群、河辺上原古墳群の鍛冶具、鉄塊、鉄滓等

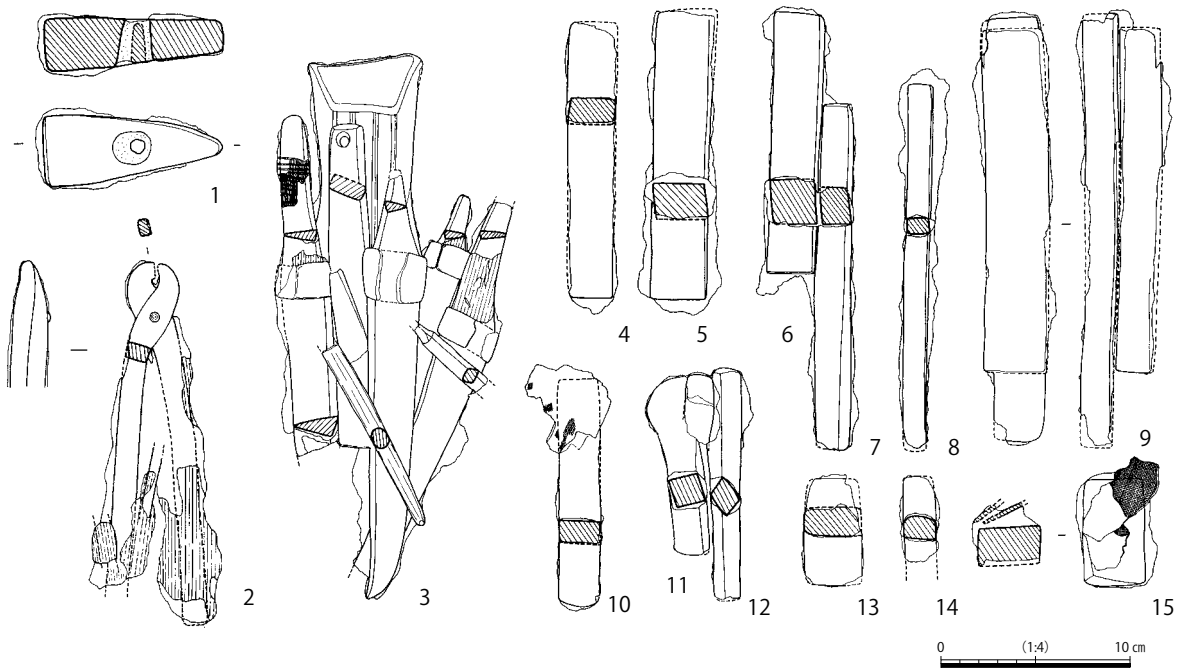


図 14　玉田 M ３号墳の鍛冶具、鉄塊等

能であろう。特に、藤原１・２号墳の被葬者は、古墳の規模、副葬品の内容をも考慮するなら、海産物生産に従事する集団を統領しつつ、その配下には生産用具、武器等を製作する集団をも帰属させていたことも推測されることになる。また、高蔵寺５号墳、藤原古墳群の周辺地域は、交通路の整備に伴って、鉄器製作に対する重要性がより強調されるようになったことも想像に難くない。また、最後に付言するなら、藤原２号墳の鉄塊は方柱状で、長畝山北８号墳第２主体、河辺上原１号墳第４主体の鉄塊がやや不整形である点とはやや異なり、例えば陝川玉田M３号墳の方柱状を呈する鉄塊（図 14―４～ 15）にむしろ近い。村上恭通は、鉄鋌や鋳造鉄斧（鋳造梯形斧）を鉄素材とする所論に再考を促しつつ、それらに代わる鉄素材として、これらの棒状「鉄塊」を、積極的に評価している。なお、玉田M３号墳は鉄鉗、鉄鎚といった鍛冶具、提砥など（同１～３）をも副葬する。

おわりに

高蔵寺５号墳、藤原１号墳に副葬された鉄鐸を起点として、古墳時代の鉄鐸の出土傾向を把握し、その地域的・歴史的展開の一側面について考察した。結果、祭祀具としての鉄鐸の所持、副葬の背景の一つには、鉄器製作者集団の儀礼行為があったことを推察した。ただし、その背景については、朝鮮半島を含めて、地域的・時代的な傾向が介在していることも明確に意識し、地域社会総体において評価する必要がある。その一方で、鉄鐸は、朝鮮半島と日本列島を通じて出土する儀礼的な器物であるだけに、その地域的・歴史的展開は、両地域において儀礼、思想が共有、習合され、複雑化する事情を胚胎している可能性がある。その可能性に期待するところは大きい。

なお、今回提示した資料については、冶金学的な分析をほとんど介在させていない。今後、各資料に対する分析がぜひとも望まれるところである。

本文作成の過程で、下記の諸機関・諸氏よりご高配を賜った。記してお礼申し上げる。
愛知製鋼株式会社 鍛造技術の館
一宮市博物館　岡山県古代吉備文化財センター
春日井市教育委員会　田原市教育委員会
津山市教育委員会　豊田市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
浅田博造　入江文敏　梅木謙一　大橋雅也
小郷利幸　小島敏男　齋藤瑞穂　土本典生
弘田和司　松本　茂　増山禎之　森　泰通

鉄鐸出土遺跡・古墳文献一覧（番号は表１、図９・10 に一致）

1. 倉賀野万福寺６号墳：大和久震平他 1983『倉賀野万福寺遺跡』山武考古学研究所
2. 中原遺跡：上沼由彦他 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告 18―佐久市内その４・小諸市内その２―　芝宮遺跡群・中原遺跡群』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告 39　長野県埋蔵文化財センター
3. 藤原１号墳（古墳群）：久永春男他 1988『藤原古墳群』渥美町埋蔵文化財調査報告書５　渥美町教育委員会／岩原剛 2005「藤原古墳群」『愛知県史　資料編３　考古３　古墳』愛知県
4. 神明遺跡：森泰通他 2001『神明遺跡Ⅱ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 17 集　豊田市教育委員会
5. 三味線塚古墳：三田敦司他 2001『三味線塚古墳』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 18 集　豊田市教育委員会
6. 高蔵寺５号墳：大下武他 1974「高蔵寺５号墳」『春日井市遺跡発掘調査報告』第６集　春日井市教育委員会
7. 馬見塚遺跡Ｂ地点：岩野見司 1974「馬見塚遺跡Ｂ地点―祭祀遺跡―」『新編　一宮市史　資料編四』一宮市
8. 城谷口２号墳：中川和哉・高野陽子・田中奈津子 2007「城谷口古墳群発掘調査概報」『京都府遺跡調査概報』第 125 冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター／中川和哉 2007「城谷口２号墳出土の特殊な鉄製品類について」『京都府埋蔵文化財情報』第 103 号　財団法人京都府文化財調査研究センター
9. 町田東３号墳：森下衛・辻健二 1991『船阪・黒田工業団地予定地内遺跡群発掘調査概報』園部町文化財調査報告書第８集　園部町教育委員会
10. 忍坂３号墳：前園実知雄他 1978『桜井市外鎌山北麓古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 34 冊　奈良県立橿原考古学研究所
11. 龍王山Ｅ―14 号墳：河上邦彦他 1993『龍王山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 68 冊　奈良県立橿原考古学研究所
12. 小倉東２号墳：西田敏秀「小倉東遺跡（第５次調査）」『枚方市文化財年報』12　財団法人枚方市文化財調査研究会
13. 大池７号墳：高瀬一嘉 1995『大池７号墳』兵庫県文化財調査報告第 137 冊　兵庫県教育委員会
14. 土井遺跡：重根弘和他 2007『土井遺跡　谷の前遺跡　慶運寺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告 191　岡山県教育委員会
15. 一国山１号墳（古墳群）：神谷正義・河田健司・西田和浩 2006『南坂８号墳　一国山城跡　一国山古墳群』岡山市教育委員会
16. 西吉田北１号墳：行田裕美・坂本心平・平岡正宏 1997『西吉田北遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 58 集　津山市教育委員会
17. 福音小学校構内遺跡：高尾和長他 2003『船ヶ谷遺跡第４次調査Ⅱ　福音小学校構内遺跡Ⅲ』松山市文化財調査報告書 95　松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
18. かって塚古墳：児島隆人 1967「福岡県かって塚古墳調査報告」『考古学雑誌』第 52 巻第３号　日本考古学会
19. 堤ヶ浦 10 号墳：吉留秀敏 1987『堤ヶ浦古墳群発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 151 集　福岡市教育委員会
20. 松浦一之介他 2003『元岡・桑原遺跡群２―桑原石ヶ元古墳群調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 744 集　福岡市教育委員会
21. 沖ノ島１号祭祀遺跡：宗像大社祭祀遺跡調査隊編『沖ノ島Ⅱ』宗像大社沖津宮祭祀遺跡昭和 45 年度調査概報　宗像大社復興期成会
22. 名残高田６号墳：原俊一 1990『名残Ⅱ』宗像市文化財調査報告第 24 集
23. カクチガ浦３・６号墳：宮原千佳子他 1990『カクチガ浦遺跡群』那珂川町文化財調査報告書第 23 集　那珂川町教育委員会
24. 辻ノ田１・３号墳：前原市教育委員会 1994『井ノ浦古墳・辻ノ田古墳群』
25. 横隈鍋倉遺跡：速水信也他 1985『横隈鍋倉遺跡』小郡市文化財調査報告第 26 集　小郡市教育委員会
26. 中原５号墳：小松譲 2002『西九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　中原遺跡』佐賀県教育委員会
27. 南方 32 号墳：山田聡 1993「南方古墳群」『宮崎県史　資料編　考古２』宮崎県
28. 六野原 10 号地下式横穴墓：瀬之口傳九郎他 1944「六野原古墳調査報告」『史蹟名勝天然記念物調査報告』第 13 輯　宮崎県／長津宗重 1993「六野原古墳群・地下式横穴墓群」『宮崎県史　資料編　考古２』宮崎県
29. 大萩３号地下式横穴墓：北郷泰道 1984「大萩地下式横穴墓群」『宮崎県文化財調査報告書第 27 集』宮崎県教育委員会／岩永哲夫・茂山護・北郷泰道 1993「大萩地下式横穴群」『宮崎県史　資料編　考古２』宮崎県／東憲章他 2004『それでも騎馬民族はやってきた』宮崎県立西都考古博物館
30. 島内地下式横穴墓群 ST-25：中野和浩 2001『島内地下式横穴墓群』えびの市埋蔵文化財調査報告書第 29 集　えびの市教育委員会
31. 菓子野３号地下式横穴墓：矢部喜多夫 1993「菓子野地下式横穴群」『宮崎県史　資料編　考古２』宮崎県／矢部喜多夫 2006「菓子野地下式横穴墓群」『都城市史　資料編　考古』都城市

本文参考文献

入江文敏 1998「佩砥考―日韓出土資料の検討―」『網干喜教先生古希記念考古学論集』網干喜教先生古希記念会
亀田修一 2000「鉄と渡来人－古墳時代の吉備を対象として－」『福岡大学総合研究所報』第 240 号（総合科学編第 3 号） 福岡大学総合研究所
行田裕美 1997「鉄鐸について」『西吉田北遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 58 集 津山市教育委員会
中野晴久 1993「脚付扁平広口坩考～須恵器における地域性の考察～」『知多古文化研究』 7 知多古文化研究会
藤原秀樹 1995「岸岡山 2 号窯出土の須恵器について」『海の考古学』鈴鹿市教育委員会
村上恭通 2004 a「古墳時代における鍛冶具副葬古墳と被葬者像―中期を中心として―」『考古論集―河瀬正利先生退官記念論文集―』河瀬正利先生退官記念事業会
村上恭通 2004 b「朝鮮半島系遺物を共伴する鍛冶具をめぐって」『東アジアにおける鉄鍛冶技術の伝播と展開』平成 12 ～ 15 年度科学研究費補助金基盤研究 (B)(2) 研究成果報告書（研究代表者 古瀬清秀）
村上恭通 2007『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
金東淑 2000「嶺南地方の 6 ～ 7 世紀代墳墓出土鉄鐸に関する研究」『慶北大学校考古人類学科 20 周年記念論叢』慶北大学校人文大学考古学科
朴淳發 1991『慶州新院里古墳群発掘調査報告書』慶北大学校博物館・慶南大学校博物館
洪潽植 1995「古墳文化を通してみた 6 ～ 7 世紀代の社会変化」『韓国古代史論叢』 7 韓国古代社会研究所 駕洛国史蹟開発研究院

その他の遺跡・古墳文献

猪ノ洞古墳：小栗鐵次郎 1930『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告』第八 愛知県
栄厳古墳群：小野田勝一 1967「渥美半島鎌田古墳出土の鉄馬について」『古代学研究』49 古代学研究会／岩原剛 2005「栄厳第 1 号墳」『愛知県史 資料編 3 考古 3 古墳』愛知県
北地 14 号墳：磯部幸男他 1979『日間賀島の古墳』南知多町文化財調査報告第三集 南知多町教育委員会 1979 ／早野浩二 2005「北地古墳群」『愛知県史 資料編 3 考古 3 古墳』愛知県
廻間 7 号墳：木田文夫・北川定務他 1981「廻間第 7 号墳」『春日井市遺跡発掘調査報告第 7 集』春日井市教育委員会
河辺上原古墳群：小郷利幸他 1994『河辺上原遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 54 集 河辺上原遺跡発掘調査委員会・津山市教育委員会
長畝山北古墳群：行田裕美・木村祐子 1992『長畝山北古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 45 集 津山市教育委員会
長畝山古墳群：今井堯 1972「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史 第 1 巻 原始・古代』津山市／坂本心平 1996「長畝山 2 号墳出土の資料について」『年報 津山弥生の里』第 3 号 津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センター
玉田M 3 号墳：趙榮濟・朴升圭 1990『玉田古墳群Ⅱ M 3 号墳』慶尚大学校博物館調査報告第 6 輯 慶尚大学校博物館

付．鉄鐸、鉄製祭祀具の儀礼的背景

祭祀具としての鉄鐸と、鉄器製作との接点を記す記述が、『古語拾遺』、天石屋戸段の「令天目一筒神作雑刀・斧及鉄鐸（古語、佐那伎）」の記述である。また、『延喜式四時祭式』鎮魂祭条には「大刀一口 弓一張 箭二隻 鈴廿口 佐奈伎廿口（下略）」とあることから、鉄鐸（サナギ）は鎮魂に用いられた祭祀具とされている。

『梁塵秘抄』巻二、二六二番歌、「南宮の本山は 信濃国とぞ承る さぞ申す 美濃国には中の宮 伊賀国には稚き児の宮」の歌は、信濃国諏訪社、美濃国伸山金山彦神社（南宮大社）、伊賀国敢国神社が「南宮」と称せられたことを示すもので、八木意知男は、諏訪大社が、先の『古語拾遺』所伝の「天目一箇神」、あるいはその系統に連なる神、仲山金山彦神社（南宮大社）が金山彦神、敢国神社が金山毘売神（金屋子神か）を祀り、三社が三位一体の製鉄神を祀っていたことを背景とすることを洞察した（八木意知男 1977「南宮考―『梁塵秘抄』二六二番歌を中心として―」『古代文化』第 29 巻第 11 号 財団法人古代学協会）。

これに関連して、諏訪大社などに祭具として、「神代鉾（鉄鉾）」に付属する「鉄鐸」が伝世されていることについては、すでに大場磐雄や真弓常忠による考証がある（大場磐雄 1972「続鉄鐸考」『信濃』第 24 巻第 4 号 信濃史学会、真弓常忠 1981『日本古代祭祀と鉄』学生社）。また、敢国神社の近隣には、「鐸」に関係するとされる「佐那具」の地名が残る。南宮と称されることもあったという美作国一宮中山神社については、先の西吉田北 1 号墳、長畝山・長畝山北古墳群、河辺上原古墳群との関係が想起される。

さて、知多半島の大野鍛冶では、仕事始めの打ち初めに、「剣（の作り物）」などと称される剣形の雛形品を作り、「南宮金山彦大神神符」の札を供えた神棚の柱に打ち付ける風習が伝えられている。この風習は、まさに、先の『古語拾遺』における鍛冶を職掌とした神格と刀（剣）の関係を彷彿とさせるものである。

これらの資料は、鉄鐸などの鉄製祭祀具と鍛冶を職掌とする神格との関係が反映されている点において共通し、「天目一箇神」、「南宮」の信仰を通じて相互に連関する。すでに示したように、古墳時代の鉄鐸は、鉄器製作者集団と必ずしも相関するものではないが、鉄鐸などの鉄製祭祀具は、古墳時代以降も鉄器製作との関係が特に意識され、列島固有の地域的展開を遂げたとも推察される。また、鉄鐸が第一義的には祭祀具で、後世に鍛冶を題材とした儀礼行為が神話の世界にも統合されていることをより積極的に評価すれば、鉄鐸が使用される古墳時代中期以降、帰属集団や儀礼の習合が複雑に進行し、儀礼の背景、それを執行する集団は明確には分かちがたい存在になっていたとも憶測される。これらの詳細については、機会を改めて論じることとしたい。

猿投窯型瓦塔の展開（1）

—信濃の猿投窯型瓦塔—

永井邦仁

愛知県内の8世紀後半～9世紀初頭の須恵器窯跡から出土した、瓦塔の形態的・技法的特徴をもとに「猿投窯型瓦塔」を設定した。そして同型の瓦塔は尾張・伊勢・三河・遠江に加え信濃中・南部地域にも分布することをあきらかにした。またこの時期は列島の各地で「地域型」瓦塔が展開しており、その分布する地域ごとに視点を据えていくことの重要性を強調した。

なぜ瓦塔なのか

愛知県内に所在する猿投山西南麓古窯跡群（以下、猿投窯）では、8世紀後半から9世紀初頭に多数の瓦塔が須恵器とともに生産された。このことは猿投窯研究の始めから知られていることではあるがあまり注目されていない。筆者が資料集成を始めてからも毎年のように猿投窯での出土例が確認され、増加傾向は止まるところを知らない。加えて愛知県内の寺院跡・集落遺跡で出土する瓦塔の数も相当数に上る。それらはいずれも須恵質焼成である。

ところで筆者がかつて知見した関東地域の瓦塔はこれとは異なっていた。どこで焼かれたのかもわからない土師質のものが大半を占め、さまざまな細部表現方法がみられ、年代も8世紀代から10世紀代まで幅があった。したがって瓦塔といえば奈良から平安時代の仏教関連の遺物、と一括りにされる傾向があった。ところが近年盛んになってきた村落内寺院や在地仏教信仰の研究では、集落内における仏教信仰を示す資料という重要な位置づけがなされ、いよいよ大掴みな年代観では扱いにくくなってきた。

このような研究状況のなかで池田敏宏は、瓦塔屋蓋部の分類に基づく関東地域の瓦塔編年の構築を続けている。それは、勝呂類型・多武峰類型（8世紀前葉～中葉）、萩ノ原類型・大仏類型・姥田類型（8世紀後葉～9世紀初頭）、宮ノ前類型・東山類型（8世紀末～9世紀前葉）、上西原類型（9世紀前葉～中葉）、柳原類型（9世紀中葉）、東郷台類型（9世紀中葉～末葉）と変遷するという。そして数量的にみて関東地域における瓦塔の最盛期は8世紀末～9世紀中葉であるとまとめている（池田1999b）。とりわけ池田の指摘で最も重要なのは、約2mの高さがあった瓦塔が8世紀末～9世紀初頭の時期に一気に小型化するという点である。この大幅な「モデルチェンジ」を経て関東地域の瓦塔最盛期が到来するのである。

「モデルチェンジ」にこめられた需要地、あるいは瓦塔造立者の意図については多様な解釈がなされるであろう。しかし瓦塔生産という観点からは、瓦塔の作り手が限定的すなわち工人であるからこそ「モデルチェンジ」が可能なのだと想起される。関東地域では、瓦塔生産の遺構は須恵器窯跡も含めてそれほど多く確認されているわけではないが、類型化の先に見えてくるのはまずは瓦塔工人であると筆者は考える。加えて猿投窯での瓦塔生産の最盛期ないしはそれを過ぎた時期に関東地域での瓦塔の「モデルチェンジ」と最盛期が該当する点はひじょうに興味深い。

本稿では猿投窯における瓦塔工人を復元する作業の一環として猿投窯産瓦塔の類型化を目指し、その供給先や系譜関係にある周辺地産の瓦塔について論及したい。

8世紀後半の「地域型」瓦塔

猿投窯産瓦塔は、猿投窯須恵器編年の鳴海32号窯期～井ヶ谷78号窯期の須恵器窯跡で出土する。現在比定されている暦年代では8世紀後半～9世紀初頭である。古代の瓦塔は7世紀

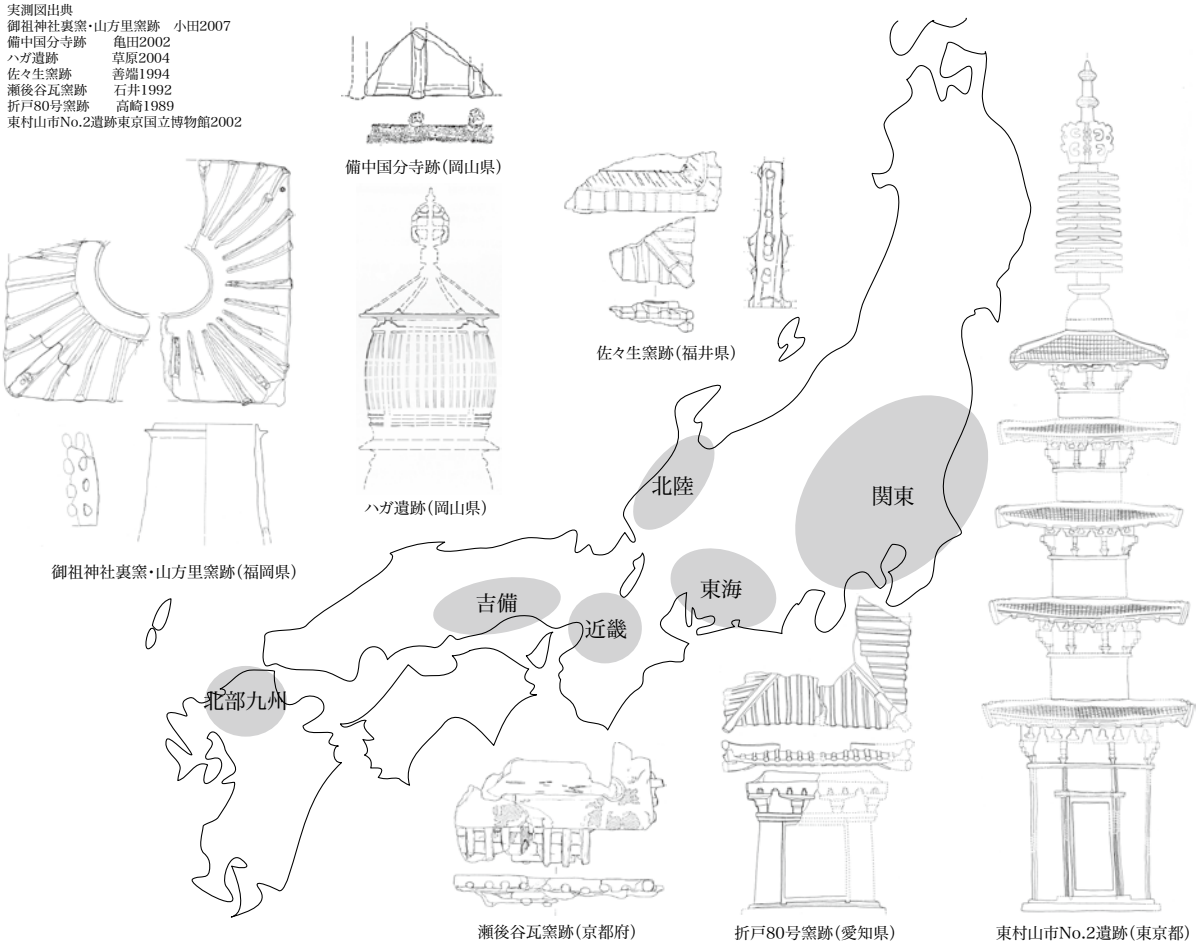


図1　8世紀後半の瓦塔

後半～8世紀初頭には出現し、8世紀前葉～中葉は少数認められるようであるがいまだ不明な点が多い。その全体を復元できる資料がほとんどないことと、地表面へ造立されるため遺跡では包含層から出土する傾向があり、詳細な時期を特定しにくいのが原因である。なお本稿ではあまり瓦塔を限定的にとらえずに塔や堂といった仏教建築をもとに制作された須恵・土師質土製品の一つと考えているので、多層塔を中心に例えば仏堂をイメージした瓦堂も含める。

ここで8世紀後半の瓦塔を概観する（図1）。まず関東地域では多武峰類型の一部と萩ノ原類型と大仏類型が該当する。萩ノ原類型・大仏類型が約30遺跡で確認されているようである。北陸地域には、佐々生1号窯跡（福井県）や福山1号窯跡（富山県）で当該期の須恵器と共伴する瓦塔があるほかは8世紀末あるいは9世紀前葉以降のものが大半である。東海地域では猿投窯出土の事例だけでも10遺跡あり、後述する同型の分布状況からこれを上回る数になることは確実である。近畿地域では瀬後谷瓦窯跡(京都府）などごく少数が認められる。吉備を含む中国地域では亀田修一による集成がなされている（亀田2002)。これによると年代の明確でないものが多いが、スリットの入る円筒形軸部や多角形塔といった特徴がみられる。これら特徴をもつ一群が備前・備中国域から播磨国域に展開する*。さらに西方の北部九州地域の瓦塔に関しては小田富士男による集成がある（小田・下原2007)。これによると豊前北部（福岡県）の須恵器窯群で8世紀後半の窯跡から8点の瓦塔が出土しているという。円筒形軸部と、丸瓦列が放射状に配置される屋蓋部で構成される多層

* 播磨国域では千本屋廃寺跡（高井1982）などで円筒形軸部の瓦塔が出土する。同様の瓦塔は、兵庫県三田市金心寺廃寺跡（摂津国有馬郡）でも確認した。当該事例については続編で明らかにしたい。

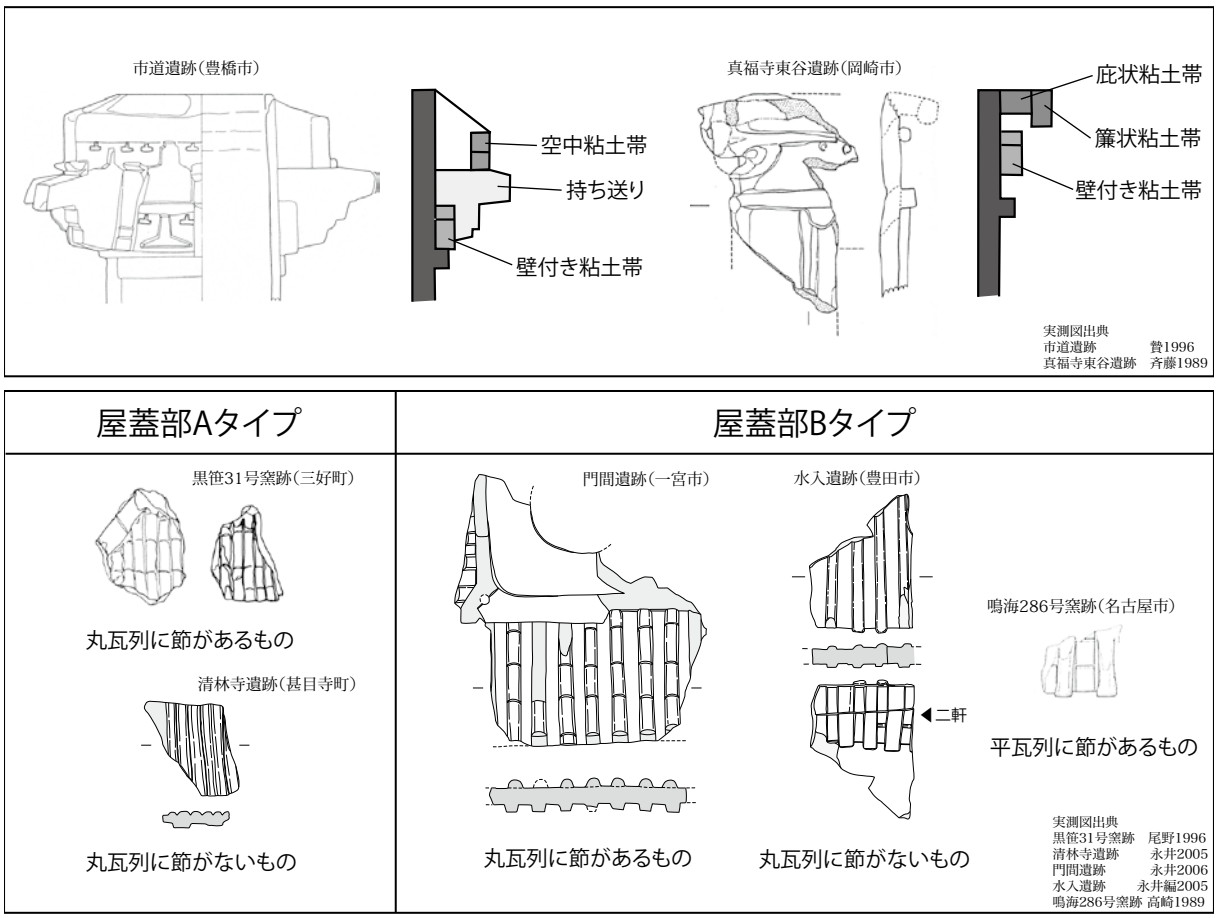


図2　粘土帯による組物表現の概念と屋蓋部分類

塔である。これはきわめて特徴的な一群で型式設定も可能であろう。これと同型の瓦塔がやや離れた太宰府近郊の牛頸窯跡で生産されていたことも判明しており、北部九州地域の数カ国に供給されたタイプであったといえよう*。

このように８世紀後半段階では、関東地域と東海地域の方形多層塔形の瓦塔が数量的に他地域をリードしており、９世紀代の関東甲信越・北陸地域に多数分布する瓦塔の基礎となる。しかしここで注意しておきたいのは、数カ国からなる地域ごとにそれぞれ特徴をもった瓦塔が存在した点である。つまり私たちが瓦塔として最もイメージしやすい方形多層塔形の瓦塔も、８世紀後半段階にあっては「地域型」瓦塔のひとつだったのである。ということは東海地域と関東地域の瓦塔もそれぞれ別の「地域型」という観点で検討することが必要なのではないだろうか。

*　北部九州ではこれ以外にも関東地域に系譜関係を想定すべき瓦塔が存在する（佐賀市上和泉遺跡出土瓦塔など）。関東地域からの移住によってもたらされた可能性が考えられるが、今後の検討課題である。

猿投窯型瓦塔について

ここでは猿投窯産瓦塔から形態や制作技法上の特徴を抽出し、猿投窯型瓦塔を設定する。

筆者は以前、猿投窯産瓦塔と美濃須衛窯産瓦塔を比較する過程で、前者が軸部の組物表現を特徴的な技法で制作している点を指摘した。そのなかで、持ち送りや尾垂木の突出を表現する点は東日本各地の瓦塔に認められるが、その上ないしは横に組物（斗栱）表現を付加した粘土帯をあたかも空中線のように架す技法は、猿投窯産瓦塔や尾張から三河・遠江地域の瓦塔を特徴づけるものであるとした（永井 2005）。

本稿ではまず、粘土帯による組物表現技法について整理する（図２上）。ひとつは壁付き粘土帯で、軸部本体（壁面）に貼付けるものである。次に軸部上端から庇のように張り出す粘土帯で、庇状粘土帯とよぶ。これはほとんどが貼付けと思われるが一部折り曲げによるものもあろう。ただしこれに組物表現が施されることは

ない。組物表現を施すのは、庇状粘土帯から垂下させた粘土帯である。これを簾状粘土帯とよぶ。以上をまとめると、壁付き粘土帯・空中粘土帯・簾状粘土帯の３つに分類できる。

次に従来からの分類観点である屋蓋部の丸瓦列表現について整理しておく（図２下）。大別すると丸瓦列が連続し平瓦列表現がないＡタイプと、独立した丸瓦列の間に平瓦列表現のあるＢタイプがある*。そしてそれぞれが丸瓦一枚分を表現する節の入るものとそうでないものに分けられる。さらに平瓦列表現の中には平瓦一枚分を表現するものがある。

裏面の垂木表現をみると、初層屋蓋部以外ではいずれも地垂木と飛檐垂木からなる二軒構成である。この垂木間にも段差をつくるものとないものとがある。ちなみに前者について加えると飛檐垂木が軒先に達するものとそうでないものがある。実際の木造建築では飛簷垂木が軒先瓦よりも突出することはなく、そのあたりを意識した表現であろう。

屋蓋部ではほかに、上端部における裳階のような張り出しや高欄表現の有無、それに関連して軸部を受け口の形状、軸部上面の孔が方形か円形か、隅降棟への稚児棟・脇棟の付加の有無、といった項目が設定できる。これらは型式設定の主要項目ではないが、型式変化の指標となる可能性がある。猿投窯産瓦塔や東海地域の瓦塔について、軸部の諸属性を確認すると表１となる。屋蓋部分類にしたがって猿投窯産瓦塔を検討してみよう。

Ａタイプ屋蓋部は、黒笹36号窯跡（鳴海32号窯期～折戸10号窯期古段階）、黒笹35号窯跡（折戸10号窯期新段階～井ヶ谷78号窯期）で出土している**。継続して生産されており、猿投窯型の一系列としてあつかうべきであろう。折戸23号窯跡の初軸では持ち送りのみで粘土帯不使用であるが、黒笹31号窯跡ではヘラ削り成形した棒状の粘土帯（空中粘土帯か）が確認できる。ただいずれの資料でも凸形スタンプは使用されていない。観察資料を見る限り、組物表現は比較的シンプルに作る傾向があり、猿投窯ではＡタイプ屋蓋部の瓦塔を制作するにあたって独特の指向性がはたらいたものと考えられる。これを猿投窯型Ａ類とする。

Ｂタイプ屋蓋部は東海地域で広く分布する。このうち平瓦一枚ずつを表現するのは音楽寺跡と鳴海286号窯跡の瓦塔である。前者は丸瓦列にも節が入るのだが、特徴的なのは屋蓋部とその上に位置する軸部を一体で成形している点である***。後者は高欄表現にも注目したい。この高欄表現は猿投窯産瓦塔で唯一の存在であるが、京都府瀬後谷窯跡の瓦塔が瓦列表現とともに高欄表現を有している点で共通する。垂木表現や屋蓋部全体に反りがあるなど瓜二つとはいえないが、近畿地域との直接的な系譜関係を想定できるタイプである。そこで鳴海286号窯跡の瓦塔をもって猿投窯型Ｃ類とする。

表１によると、猿投窯産瓦塔のなかではＢタイプ屋蓋部で粘土帯技法の多用がみられる。粘土帯技法の組み合わせでは、空中粘土帯のみのタイプと、空中粘土帯と壁付き粘土帯がセットになるタイプがある。前者が猿投窯産瓦塔、後者が東三河・遠江の瓦塔で主体的であることは先に示したが****、西三河地域である豊田市水入遺跡出土瓦塔の軸部でも壁付き粘土帯が確認でき、今後、後者のタイプが猿投窯で確認される可能性もある。したがって前者を猿投窯型Ｂ1類、後者を同Ｂ2類としておこう。これらは凸形スタンプを多用することで猿投窯型Ａ類との違いが強調されるのだが、需要者（瓦塔の発注者）の違いからくる何らかの意図的な作り分けがあった可能性も考えたい。

* 石田成年によって前者はＡタイプで後者がＢタイプと呼称されている。本稿の型式名もこれに対応させている。

** 三好町歴史民俗資料館で確認。報告書未刊行。屋蓋部はＡ・Ｂ両タイプあり、Ｂタイプのものは黒笹34号窯跡瓦塔に似る。軸部片では空中粘土帯の小片があるがＢタイプ屋蓋部に伴うものか。他にわずかな庇状粘土帯とヘラ切り成形による持ち送りが付いた軸部片がある。窯の年代観は嘉見氏による。

*** このように屋蓋部と軸部を一体で成形する瓦塔は美濃須衛窯産瓦塔の一部にもみられる特徴である（稲田山13号窯跡）。またこの瓦塔とは瓦列の表現だけみると近似している。ただ細部表現は明らかに美濃須衛窯産瓦塔の方が単純で、軸部壁面にスリットが入る点も独特である。音楽寺跡東方の江南市小折遺跡ではこのような瓦塔が出土しており、地理的にみて美濃須衛窯産瓦塔が搬入された可能性が高い。このことからも音楽寺跡の立地が美濃と尾張の結節点であることがわかる。あくまで想像だが音楽寺跡の瓦塔が猿投窯型と美濃須衛窯型両方の特徴を有している点からこれらの祖形のひとつであったとも考えられる。

**** 永井2006。ただしこの時点では「(広義の)猿投窯系」と「東三河・遠江系」として示した。

表 1　瓦塔軸部における粘土帯の採用状況

地域	遺跡・瓦塔	軸部				
		持送り表現	空中粘土帯	壁付き粘土帯	庇状粘土帯	簾状粘土帯
猿投窯	折戸23号窯跡	○	×	×	×	×
猿投窯	黒笹8号窯跡	○	○	×	×	×
猿投窯	折戸80号窯跡	○	○	×	×	×
猿投窯	黒笹31号窯跡	○	○	×	×	×
猿投窯	黒笹34号窯跡(1)	○	○	×	×	×
猿投窯	黒笹34号窯跡(2)	○	○	×	○	×
猿投窯	黒笹35号窯跡(1)	○	×	×	○	×
尾張・西三河	勝川遺跡	○	×	○	○	○
尾張・西三河	真福寺東谷遺跡	○	×	○	○	○
尾張・西三河	郷上遺跡	○	○	×	×	×
尾張・西三河	音楽寺跡	○	○	×	×	×
東三河・遠江	竹林寺廃寺跡	○	×	×	○	○
東三河・遠江	市道遺跡	○	○	○	×	×
東三河・遠江	見附端城遺跡	○	○	○	×	×
東三河・遠江	宇志遺跡	○	○	○	×	×

猿投窯型 B1 類では空中粘土帯が一段の場合と二段の場合がある。一段のものは折戸 80 号窯跡にあり、二段のものは黒笹 8 号窯跡や黒笹 34 号窯跡にある。前者から後者への変遷が考えられるが、それは「複雑化と混乱」のように見受けられる。黒笹 8 号窯跡瓦塔では凸形スタンプでなくヘラによるくり抜きで持ち送りも粘土帯も棒状粘土で作る。また黒笹 34 号窯跡（折戸 10 号窯期新段階〜井ヶ谷 78 号窯期）出土瓦塔では一見繊細な空中粘土帯であるが、凸形スタンプは天地を逆転して押されており、用法としては正しくない *。

猿投窯型 B2 類では宇志遺跡瓦塔が新しい時期であろう。当該事例では壁付き粘土帯のみに凸形スタンプが押され空中粘土帯のそれは省略されている。しかし壁付き粘土帯自体に段差をつけることで立体感を増し、屋蓋部の陰になって見えにくい空中粘土帯に代わって視線を受ける役目を果たしているように感じられる。

簾状粘土帯技法は猿投窯産瓦塔で確認されていない。また簾状粘土帯と空中粘土帯がセットになる事例も東海地域を通じてみられない。愛知県内では、勝川遺跡や真福寺東谷遺跡出土の瓦塔で簾状粘土帯と壁付き粘土帯がセットになっている。これらの瓦塔の位置づけについては続編で検討したいが、猿投窯産に先行する段階とみている。

信濃中・南部地域の猿投窯型瓦塔

猿投窯型瓦塔の分布は、伊勢・尾張・三河・遠江の東海道諸国の類例については以前示したが（永井 2006）、本稿作成のため調査を行ったところ、信濃国中・南部地域（中信・南信）にも広がっていることが確認できた。

安曇野市明科廃寺跡は、筑摩郡の北部に位置する古代寺院跡である。伽藍配置は明らかではないが、発掘調査により倉庫群の一画とみられる掘立柱建物跡が確認された。創建は 7 世紀後半でその後 8 世紀代にも建物造営があったと考えられている。出土遺物中に数種類の瓦塔がある（瓦塔 1 〜 3）。

瓦塔 1 は B タイプ屋蓋部で空中粘土帯と凸形スタンプが認められる。硬い須恵質の仕上がりで、猿投窯型 B 類である。ただこの瓦塔の平面

* 三好町歴史民俗資料館で確認。整理作業中の資料を調査させていただいた。B タイプ屋蓋部（丸瓦列に節ありと節なし）が出土。軸部も 2 種類あるとみられ、2 段の空中粘土帯のタイプと庇状粘土帯と空中粘土帯の間に持ち送りが来るタイプがある。いずれの軸部でも凸形スタンプの逆転がみられ、後者は壁面に無造作に凸形スタンプが押される。窯の年代観は嘉見氏による。

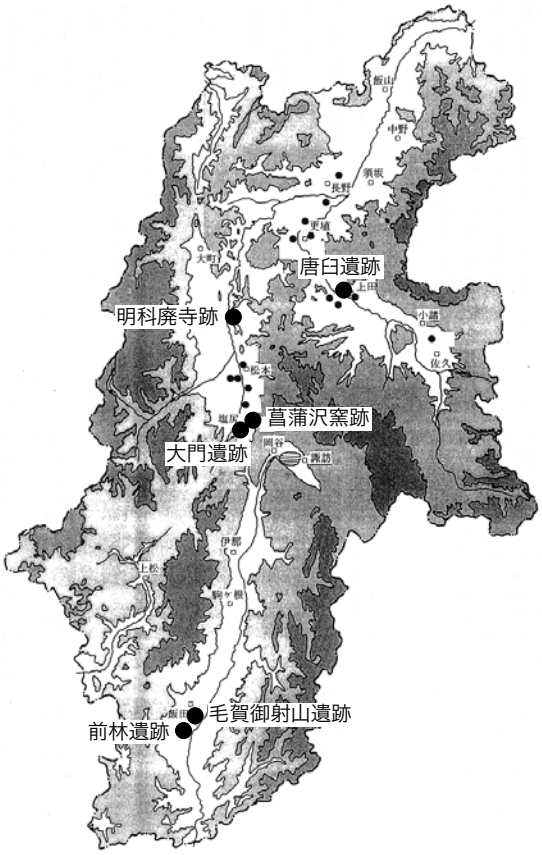


図3　長野県の瓦塔分布図(出河1995に加筆)

形状は、屋蓋部から八角形になることが確実で、巨大な宝珠を頂部にのせた形が考えられる。破片数から想定されるのは八角堂である*。

瓦塔２はＡタイプ屋蓋部でそのうえ軸部が不明なのでにわかに猿投窯型Ａ類と限定しがたいが、瓦塔１と焼成がよく似ており、セットになっていた可能性もある。そうなると猿投窯産の可能性も出てくるのだが、その判断については胎土分析も必要である。

瓦塔３は瓦塔２と同じＡタイプ屋蓋部であるが、その規模はずっと小さい。焼成も土師質で関東甲信越地域に分布する９世紀代瓦塔の一類型である。軸部上端から斜め下方に張り出した庇状粘土帯を持ち送り表現の粘土が支える。当該遺跡が９世紀代も寺院の一画であったかは不明であるが、８世紀後半の瓦塔と同じような場所に再び瓦塔が造立された点に注目しておきたい。

飯田市前林遺跡では、８世紀代の集落が確認されている。明確な寺院遺構はないが軒丸瓦が出土した（飯田市教育委員会 2005）。発掘調査以前に瓦塔と線刻仏画が採集されている（遮那 1966･岡田 2004）。瓦塔は２種ある（瓦塔 4･5）。

瓦塔４は猿投窯型 B2 類である。屋蓋部は猿投窯産瓦塔と全く違和感がない。軸部は摩耗が進んでいるのではっきりしないものの、壁付き粘土帯に大きな凸形スタンプによる組物表現があるもの（13）と、庇状粘土帯を伴い壁面に直接凸形スタンプを押した軸部片（14）がある。色調は灰白～黄褐色で焼成は軟質である。

瓦塔５は猿投窯型Ａ類である。17 は屋蓋部片であるが、丸瓦列を型で成形した後に隅降棟を貼付ける。色調は灰～青灰色、焼成は硬く須恵質である。これと似た焼成の破片で抽出すると 16 ～ 20 が該当する。20 は軸部本体で開口部があることから初軸とわかる。18 と 19 は持ち送り表現であるが、粘土板というより粘土棒をヘラ削り加工したやや太めのものである。なお繊細な筆致の線刻仏画（図 6）は、色調や焼成が瓦塔５と同じで、初軸に安置されていたものと推測される。

瓦塔４と５の先後関係は明らかではないが、８世紀後半を中心とした時期である。当該遺跡は、同時か交替か不明ながら２基の瓦塔が造立される場所であったことに注意しておきたい。瓦塔の生産地については胎土分析が必要だが、優美な線刻仏画を伴うとみられる瓦塔５は猿投窯産の可能性が高い。

飯田市毛賀御射山遺跡も明確な寺院遺構はないが、西三河地域（岡崎市北野廃寺跡）に文様系譜のある軒丸瓦や丸・平瓦が出土している。瓦塔（瓦塔 6）は屋蓋部がないものの凸形スタンプのある空中粘土帯から猿投窯 B2 型と判ぜられる。22 では空中粘土帯が、23 では壁付き粘土帯がそれぞれ確認できる。これらは上層にくる軸部である。24 は天地が不明だが扉軸穴もあり初軸片の可能性を考えるが、それを囲う扉や柵の部位かもしれない。色調は明灰～灰褐色で焼成は硬く須恵質である。瓦塔が出土した竪穴建物跡からは８世紀後葉の須恵器や土師器が出土する。

*　大澤哲氏の教示による。また屋蓋部・軸部・宝珠・基壇部と構成部位がそろっており、これ以上多数の破片がまとまって出土する可能性は低い。

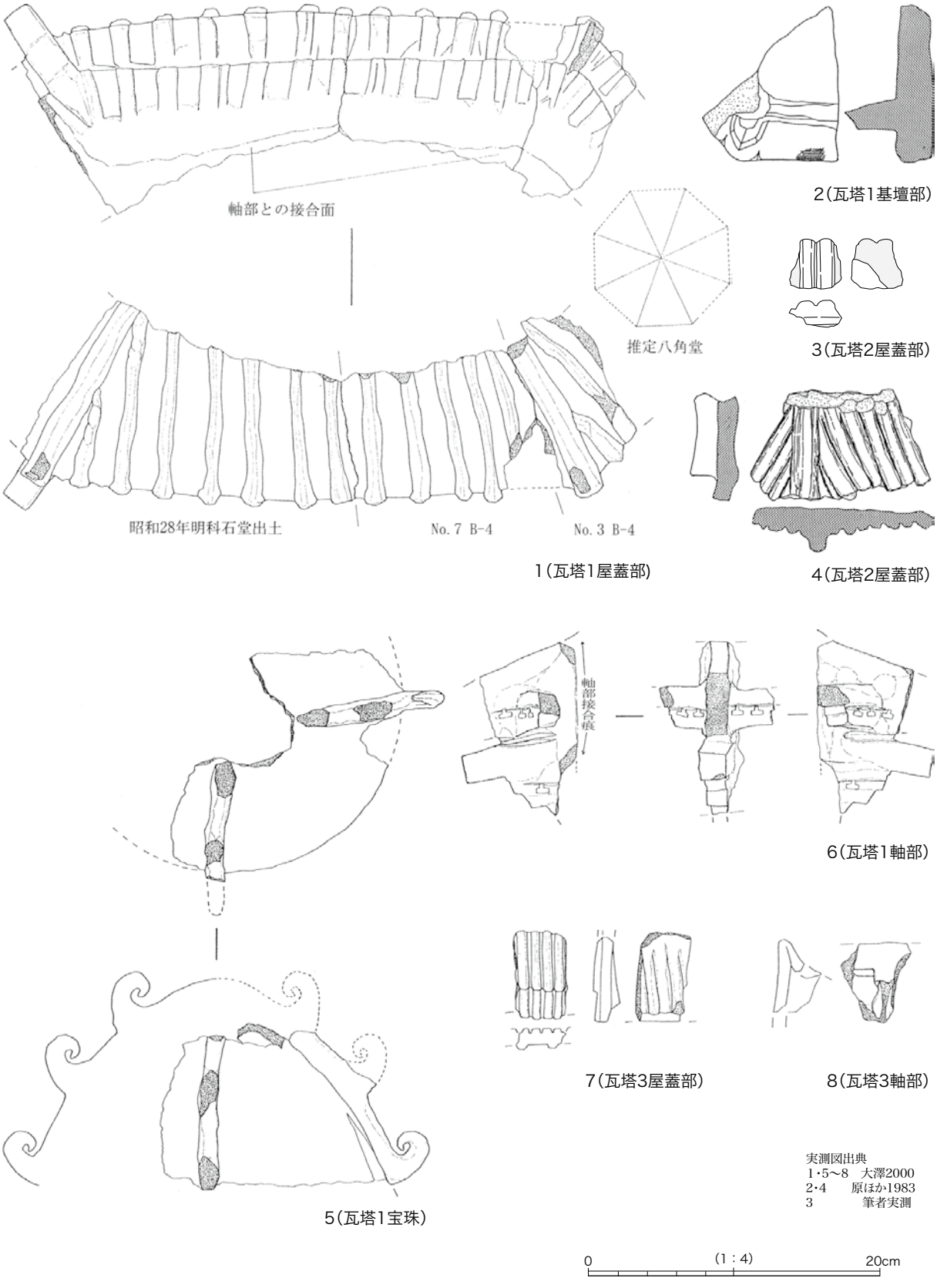
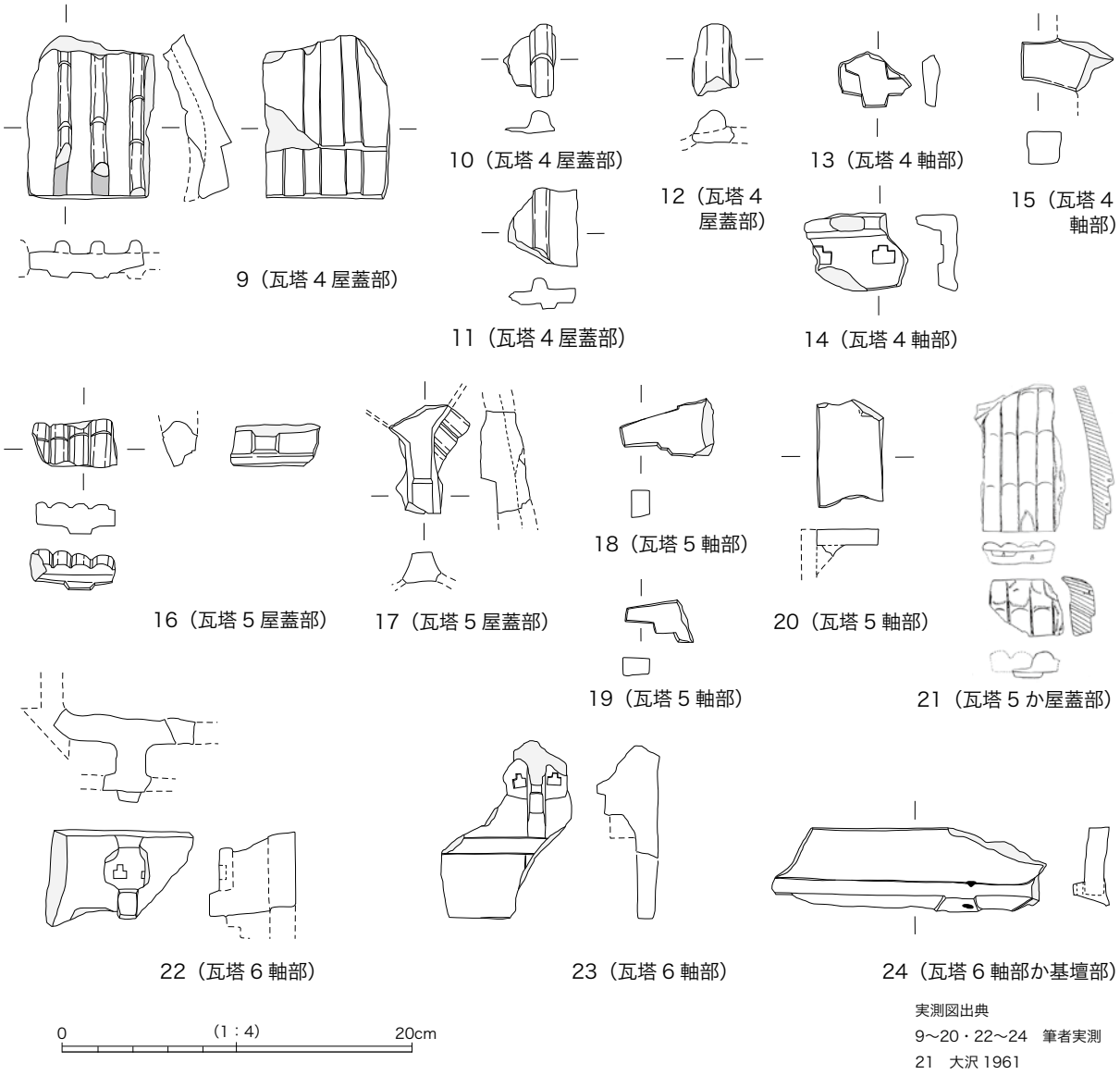


図4　明科廃寺跡出土瓦塔実測図



実測図出典
9～20・22～24　筆者実測
21　大沢 1961

図５　飯田市内出土瓦塔実測図（9～21 前林遺跡、22～24 毛賀御射山遺跡）

信濃国域の瓦塔について、これまでの集成（林 1985・出河 1995）と今回の調査結果を合わせて概観してみよう。

中・南信地域では８世紀後半～９世紀初頭段階に猿投窯型を含む瓦塔が存在する。菖蒲沢窯跡出土瓦塔（中信、塩尻市）はＢタイプ屋蓋部であるが、猿投窯型やその系統ではない。折り曲げた棒状粘土の突出のみで組物表現を行う点は美濃須衛窯産瓦塔に近い。このことは同窯が美濃須衛窯からの技術系譜下にあるという見解に近い（鳥羽編 1991）。大門遺跡出土瓦塔（同市）も菖蒲沢窯跡の瓦塔と同じタイプである*。南信地域の瓦塔造立は東海地域と同じく８世紀後半に一つのピークがあったと考えられるが、その入手経路は須恵器（と生産技術）と同じく複数あったようである。

一方東・北信地域の瓦塔造立は８世紀代よりも９世紀代に最盛期があるようで、関東地域と似た展開である。瓦塔の系譜も中・南信地域の瓦塔が在地で発展し広まったものではなく、関

*　大門遺跡出土瓦塔は未実見であるが、屋蓋部は菖蒲沢窯跡瓦塔と同じである。一志ほか 1959 の図版では壁付き粘土帯のような斗栱がみえる。

図 6　前林遺跡出土の線刻仏画（岡田 2004 より）

東地域からの伝播であろう。上田市唐臼遺跡の瓦塔は大仏類型とされ（池田 1999a）、東信地域では 8 世紀後半に関東地域経由で瓦塔造立が始まったことを示している。

9 世紀代の中信地域では、それまでの瓦塔と入れ替わって関東地域にルーツのある瓦塔が展開する。ただそれも松本平の集落が主体である。こういった集落遺跡からは「寺」墨書土器が出土するなど関東地域の当該期集落と似た様相がうかがえる。

南信地域では 9 世紀代の新たな瓦塔造立はなく、東海地域と同様である。それは集落が減るからではない。飯田市域の分析では、9 世紀前葉～中葉段階では 7 世紀代からの集落に加えて「開発型集落」が増加し、9 世紀中頃から衰退が始まるという（小平 2003）。中信地域あるいは関東地域と同じく、台地上の開墾を進める集落の消長がみられるのだが、こと瓦塔に関しては違っている。それは開発行為を含む集落のあり方と瓦塔が必ずしもセットではなかったことを示している。集落からは浮遊した何らかの信仰圏としての瓦塔の展開を考えてみる必要があるだろう。

むすびにかえて

本稿では猿投窯型瓦塔を設定し、その周辺地域への展開の具体相を信濃国中・南部地域にみた。「地域型」瓦塔をもとに分析を進めると、今まで漠然ととらえられてきた瓦塔に関する認識があらたまるのを実感する。今後は猿投窯型瓦塔に先行する時期の瓦塔について検討を進めたい。

本稿作成にあたり調査の便宜をはかっていただくとともに種々ご教示いただきました。記して感謝申し上げます。
大澤哲　土屋和章　羽生俊郎　岡田正彦
嘉見俊宏
安曇野市教育委員会
飯田市教育委員会
三好町歴史民俗資料館

参考文献

飯田市教育委員会　1978 『毛賀御射山遺跡』

飯田市教育委員会　2005 『前林遺跡』

池田敏宏　1999a 「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討」『研究紀要』7　栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

池田敏宏　1999b 「東国の瓦塔出土遺跡」『第 13 回企画展　仏堂のある風景―古代のムラと仏教信仰―』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館

池田敏宏　2000 「瓦塔」『古代仏教系遺物集成・関東』考古学資料から古代を考える会事務局

石井清司　1992 「3. 木津地区所在遺跡（1）瀬後谷遺跡」『京都府遺跡調査概報』第 51 冊

石田成年　1997 「摂河泉の瓦塔」『河内古文化研究論集』

一志茂樹・小松　虔　1959 「塩尻市下大門の瓦塔遺跡」『信濃』11-8　信濃史学会

大沢和夫　1961 「前林発見の瓦塔について」『伊那』昭和 36 年 7 月号　伊那史学会

大澤　哲編　2000 『明科廃寺址』明科町教育委員会

岡田正彦　2004 「考古学からみた飯伊地方の古代仏教文化」『飯田市美術博物館研究紀要』14

小田富士男・下原幸裕　2007 『豊前・トギバ窯跡の調査』福岡大学考古学研究室

尾野善裕ほか　1996 『県営北部畑地総合土地改良事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』三好町教育委員会

亀田修一　2002 「吉備の瓦塔」『環瀬戸内海の考古学』下巻　古代吉備研究会

草原孝典編　2004 『ハガ遺跡』岡山市教育委員会

小平和夫　2003 「飯田盆地における古代集落の展開」『信濃』55-2　信濃史学会

斉藤嘉彦　1989 「真福寺東谷遺跡」『新編岡崎市史』14 史料編考古（下）

遮那真周　1966 「飯田市桐林字宮洞発見の塼仏」『伊那』昭和 41 年 3 月号

善端　直　1994 「北陸の古代瓦塔」『文化財学論集』奈良大学

高井悌三郎ほか　1982 『播磨千本屋廃寺跡』宍栗郡山崎町教育委員会

高崎光司　1989 「瓦塔小考」『考古学雑誌』74-3　日本考古学会

出河裕典　1995 「信濃の瓦塔再考　―近年の出土例を中心にして―」『信濃』47-4　信濃史学会

東京国立博物館　2002 『東京国立博物館所蔵重要考古資料学術調査報告書　瓦塔・鴟尾』

鳥羽嘉彦編　1991 『菖蒲沢窯跡』塩尻市教育委員会

永井邦仁　2005 「東海地方の古代瓦塔に関する覚書」『三河考古』15 三河考古刊行会

永井邦仁編　2005 『水入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター

永井邦仁　2006 「東海地方の古代瓦塔研究ノオト」『研究紀要』7　愛知県埋蔵文化財センター

贄　元洋　1996 『市道遺跡Ⅱ』豊橋市教育委員会

林　和男　1985 「信濃の瓦塔」『信濃』37-4　信濃史学会

原　嘉藤・三好博喜　1983 「明科廃寺跡」『長野県史考古資料編全一巻（三）主要遺跡（中信）』長野県

パレススタイル土器の赤色顔料

堀木真美子

朝日遺跡および下懸遺跡出土のパレススタイル土器106点に付着する赤色顔料の蛍光X線分析を実施。濃尾平野と西三河地域での赤色顔料に含まれる元素の比較を行った結果、２つの地域を分ける特徴を見いだすことはできなかった。また、同一個体に使用されている赤色顔料について、部位により元素の組成に違いが認められるものの、部位による傾向は把握できなかった。

はじめに

パレススタイル土器は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて濃尾平野を中心に見られる。パレススタイル土器の大きな特徴は、その精巧な文様や帯状の口縁を持つこと以上に、美しい赤彩にある。

今回分析を行ったのは、このパレススタイル土器に使われている赤色顔料である。従来、パレススタイル土器に利用されている赤色顔料は、その色調からベンガラとされていた。そこで赤色顔料に含まれる元素の分析を行い、使用される部位による違いや、地域による違いの有無確認を行った。

分析試料および分析方法

今回分析を行った試料は、朝日遺跡より出土したパレススタイル土器66点と下懸遺跡から出土したパレススタイル土器40点である。また一試料中の部位による赤色顔料の違いの有無を確認するために、口縁や胴部など複数の箇所から試料を採取した(図1～3)。全分析試料は162点。

分析試料はいずれも、セロハンテープを用いて、できるだけ顔料のみを採取した。分析装置は（株）堀場製作所のエネルギー分散型蛍光X線分析装置XGT-5000XIIを用いた。測定条件は、励起電圧：30kV、計測時間：500s、X線管球：Rh、測定雰囲気：大気中、X線照射径：100 μ mである。1試料中の測定箇所は、鉱粒や色調の異なる箇所を避けるように５カ所を設定した。

結果

検出された元素は、Si（ケイ素）、S（硫黄）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Ti（チタン）、Cr（クロム）、Mn（マンガン）、Fe（鉄）、Cu（銅）、Zn（鉛）、Ni（ニッケル）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）である。なお、Si、Sはセロハンテープ自体にも含まれている。各試料の分析結果を表1および表2に示す。５カ所の測定点全てにおいて確認された元素を○、測定箇所によって確認できなかった元素を△で示した。

考察

a. 赤色顔料の種類について

弥生時代から古墳時代にかけての赤色顔料には、主に鉄を主成分とするベンガラと、水銀を含む水銀朱が知られている。今回分析を行ったパレススタイル土器の赤色顔料は、全試料162点中にHgを含むものはなく、すべてFeを多く含むベンガラであると判断された。

全ての赤色顔料に共通してみられる元素はSi,S,K,Ca,Ti,Feである。これらのうちKやCaは測定点によって、検出されるピークの大きさが異なることが多い。KやCaは長石に多く含まれていることや、赤色顔料中に長石の粒子を確認できることなどから、鉱物の存在によって

表 1-1　朝日遺跡出土パレススタイル土器　分析結果

SampleNo	器種	所属時期	登録番号	採取部位	Si	S	K	Ca	Ti	Cr	Mn	Fe	As	Cu	Zn	Ni	Rb	Sr
44	直口壷	八王子古宮	1829	胴部	○	○	○	○	○			○						
63	ワイングラス形高杯	八王子古宮	1812	脚部	○	○	○	○	○		△	○						
				杯部	○	○	○	○	○	△	△	○		△		△		
65	椀形高杯	八王子古宮	50	杯部内側	○	○	○	○	○			○		△				
66	ワイングラス形高杯	八王子古宮	1887	口縁内側	○	○	○	○	○	△	△	○		△		△		
				口縁外側	○	○	○	○	○	△	△	○						
67	ワイングラス形高杯	八王子古宮	1888	脚部	○	○	○	○	○		△	○						
4	短頸壷	廻間	1526	胴部	○	○	○	○	○			○		△				
				口縁	○	○	○	△	○			○						
3	パレス壷	廻間	1312	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○						
6	パレス壷	廻間	1495	口縁内側	○	○	○	○	○		△	○						
				口縁外側	○	○	○	○	○	△	○	○						
				胴部	○	○	○	○	○	△	○	○						
7	パレス壷	廻間	1281	口縁	○	○	○	○	○	△	△	○		△				
				胴部	○	○	○	○	○	△	△	○		△	△			
8	パレス壷	廻間	440	口縁内側	○	○	○	○	○	△	○	○		△	△			
				口縁外側	○	○	○	○	○	△	○	○	△					
				胴部	○	○	○	○	○	△	○	○						
9	パレス壷	廻間	04AbSD01 2層-005	胴部	○	○	○	○	○	△	○	○		△	△		△	
10	パレス壷	廻間	1497	口縁	○	○	△	○	○	△		○		△				
				頸部	○	○		○	○			○						
				胴部	○	○	△	○	○			○						
11	パレス壷	廻間	86	口縁外側	○	○	○	○	○	△	△	○			△			
				胴部	○	○	○	○	○	△	△	○		△	△			
13	パレス壷	廻間	1次19図-11	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○						
2	パレス壷	廻間II	一次1-4	胴部	○	○	○	○	○			○			△			
				口縁	○	○	○	○	○	△		○		△	○			
1	二重口縁壷	廻間II	1157	口縁部外側	○	○	○	○	○			○						
14	有段高杯	山中I	356	杯部	○	○	○	○	○	△	△	○						
				脚部	○	○	○	○	○	△		○		△				
20	有段高杯	山中I	1745	口縁	○	○	○	○	○	△	△	○						
				脚部	○	○	○	○	○	△	△	○		△				
23	有段高杯	山中I	1062	杯部	○	○	○	○	○		△	○		△				
				脚部	○	○	○	○	○	△	△	○	△					
61	有段高杯	山中I	980	内側	○	○	○	○	○	△		○			△			
				外側	○	○	○	○	○			○			△			
19	台付鉢	山中I	72-73-P5-1	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○						
27	鉢	山中I	1025	胴部	○	○	○	○	○		○	○			△			
29	鉢	山中I	1027	胴部	○	○	○	○	○	△	○	○	○		△	△		△
28	パレス壷	山中I	黒赤丸文	頸部部	○	○	○	○	○		○	○	△			△		
				胴部上部	○	○	○	○	○	△	○	○	△	△				
				胴部	○	○	○	○	○	△	△	○		△				
30	パレス壷	山中I	1737	口縁	○	○	○	○	○		△	○		△	△			
				赤丸文	○	○	○	○	○		△	○		△	△		△	
				胴部	○	○	○	○	○	△	△	○		△				
24	有段高杯	山中	733	杯部内側	○	○	○	○	○	△	△	○			△			
				杯部外側	○	○	○	○	○		△	○					△	
25	有段高杯	山中	1066	口縁	○	○	○	○	○	△	○	○						
				杯部	○	○	○	○	○		△	○		△		△		
52	高杯	山中	1101	杯部内側	○	○	○	○	○		○	○		△				
				杯部外側	○	○		○	○	△		○						
62	高杯	山中	1011	口縁部	○	○	○	○	○		○	○						
40	ワイングラス形高杯	山中		杯部	○	○	○	○	○	△	○	○		△	△			
				脚部	○	○	○	○	○	△	○	○						
45	ワイングラス形高杯	山中	1110	杯部	○	○	○	○	○		○	○		△				
				口縁	○	○	○	○	○	△	△	○						
46	ワイングラス形高杯	山中	78-p5-28	杯部	○	○	○	○	○	△		○		△				
				脚部	○	○	○	○	○	△		○		△				
48	ワイングラス形高杯	山中	390	杯部	○	○	○	○	○	△	△	○						
50	ワイングラス形高杯	山中	1056	杯部	○	○	○	○	○			○						
				脚部	○	○	○	○	○	△		○						
54	ワイングラス形高杯	山中	1次-19-1	口縁	○	○	○	○	○	△		○						
55	ワイングラス形高杯	山中	1104	口縁	○	○	○	○	○		△	○						
				脚部	○	○	○	○	○		○	○						
64	ワイングラス形高杯	山中	1749	杯部	○	○	○	○	○	△	△	○				△		
				脚部	○	○	○	○	○	△	△	○						

表 1-2　朝日遺跡出土赤彩土器　分析結果

SampleNo	器種	所属時期	登録番号	採取部位	Si	S	K	Ca	Ti	Cr	Mn	Fe	As	Cu	Zn	Ni	Rb	Sr
15	椀形高杯	山中	1102	杯部	○	○	○	○	○		△	○						
				脚部	○	○	○	○	○		△	○		△				
22	器台	山中	655	頸部	○	○	○	○	○	△	△	○				△		
				脚部	○	○	○	○	○		○	○		△				
32	器台	山中	1018	脚部	○	○	○	○	○		△	○						
				口縁内側	○	○	○	○	○	△	○	○		△				
35	器台	山中	972	脚部	○	○	○	○	○			○			△			
39	器台	山中	1019	口縁内側	○	○	○	○	○	△	△	○						
				胴部	○	○	○	○	○	△	○	○						
5	パレス壷	山中	1863	胴部	○	○	○	○	○		○	○						
				口縁	○	○	○	○	○	△	○	○						
12	パレス壷	山中	1281	口縁	○	○	○	○	○	△	△	○			△			△
				胴部	○	○	○	○	○	△	△	○		△				
26	パレス壷	山中	1739	口縁	○	○	○	○	○	○	○	○						
				胴部	○	○	○	○	○	△	△	○			△			
34	パレス壷	山中	973	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○						
16	ワイングラス形高杯	山中	1060	胴部	○	○	○	○	○	△		○						
17	広口壷	山中	707	胴部	○	○	○	○	○		△	○						△
				口縁内側	○	○	○	○	○	△	△	○			△			
53	広口壷	山中		胴部	○	○	○	○	○		○	○						
58	広口壷	山中	1874	胴部	○	○	○	○	○		○	○						
				頸部	○	○	○	○	○	△	△	○						
18	直口壷	山中	1273	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○						
31	直口壷	山中	1316	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○						
38	直口壷	山中	1354	胴部	○	○	○	○	○	△	○	○						
51	直口壷	山中	1272	口縁	○	○	○	○	○	△		○						
				胴部	○	○	○	○	○		△	○						
21	長頸壷	山中	520	口縁	○	○	○	○	○	△		○		△				
				胴部	○	○	○	○	○		△	○						
33	長頸壷	山中	399	口縁	○	○	○	○	○	△	△	○						
				胴部	○	○	○	○	○	△	△	○			△			
37	長頸壷	山中	1280	口縁	○	○	○	○	○	○	○	○			○			
				胴部	○	○	○	○	○		△	○			△			
42	脚付長頸壷	山中	371	胴部	○	○	○	○	○	△	○	○			△			
43	台付短頸壷	山中	1105	口縁	○	○	○	○	○	△		○		△				
				胴部	○	○	○	○	○	△		○						
				脚部	○	○	○	○	○	△		○						
47	台付鉢	山中	745	杯部	○	○	○	○	○		△	○						
				脚部	○	○	○	○	○			○		△				
41	鉢	山中	800	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○						
56	ワイングラス形高杯	山中II	976	杯部口縁	○	○	○	○	○			○		△				
				脚部	○	○	○	○	○			○						
57	ワイングラス形高杯	山中II	338	杯部口縁	○	○	○	○	○			○						
				脚部	○	○	○	○	○			○						
60	パレス壷	山中II		口縁内側	○	○	○	○	○	△		○						
				胴部	○	○	○	○	○	△		○						
59	広口壷	山中?		胴部	○	○	○	○	○	△	△	○						
36	台付鉢	?		杯部	○	○	○	○	○		△	○						

ピークの現れ方に違いが生じたと考えられる。Ti は、全試料で確認される元素であり、同一試料では、測定箇所によるスペクトルの形に大きな違いはみられない。しかし、個々の試料の比較を行うと、スペクトルの形に違いが認められる。今回の分析は、その違いを明確にできなかったが、今後追究していきたい元素である。

試料によって確認されない元素として、Cr や Mn,Cu,Zn,Ni,Rb,Sr がある。これの元素は、同一の試料内においても確認される箇所が異なる場合が多く、そのピークも小さかった。また元素の組合わせに共通するパターンは確認できなかった。

b. 遺跡による組成の差

表 1 に濃尾平野に位置する朝日遺跡の分析結果を、表 2 に矢作川下流域に所在する下懸遺跡の分析結果を示す。これらの表からは、各地域の特徴を見いだすことはできない。しかし、As に着目すると朝日遺跡では、5 試料 (8：パレス壷：口縁外側、23：有段高杯：脚部、28：パレス壷：頸部 ,28 パレス壷：胴部上部、29：鉢：胴部）で確認されているが、下懸遺跡ではまったく確認されていない。また Rb や Sr を確認した試料もなかった。

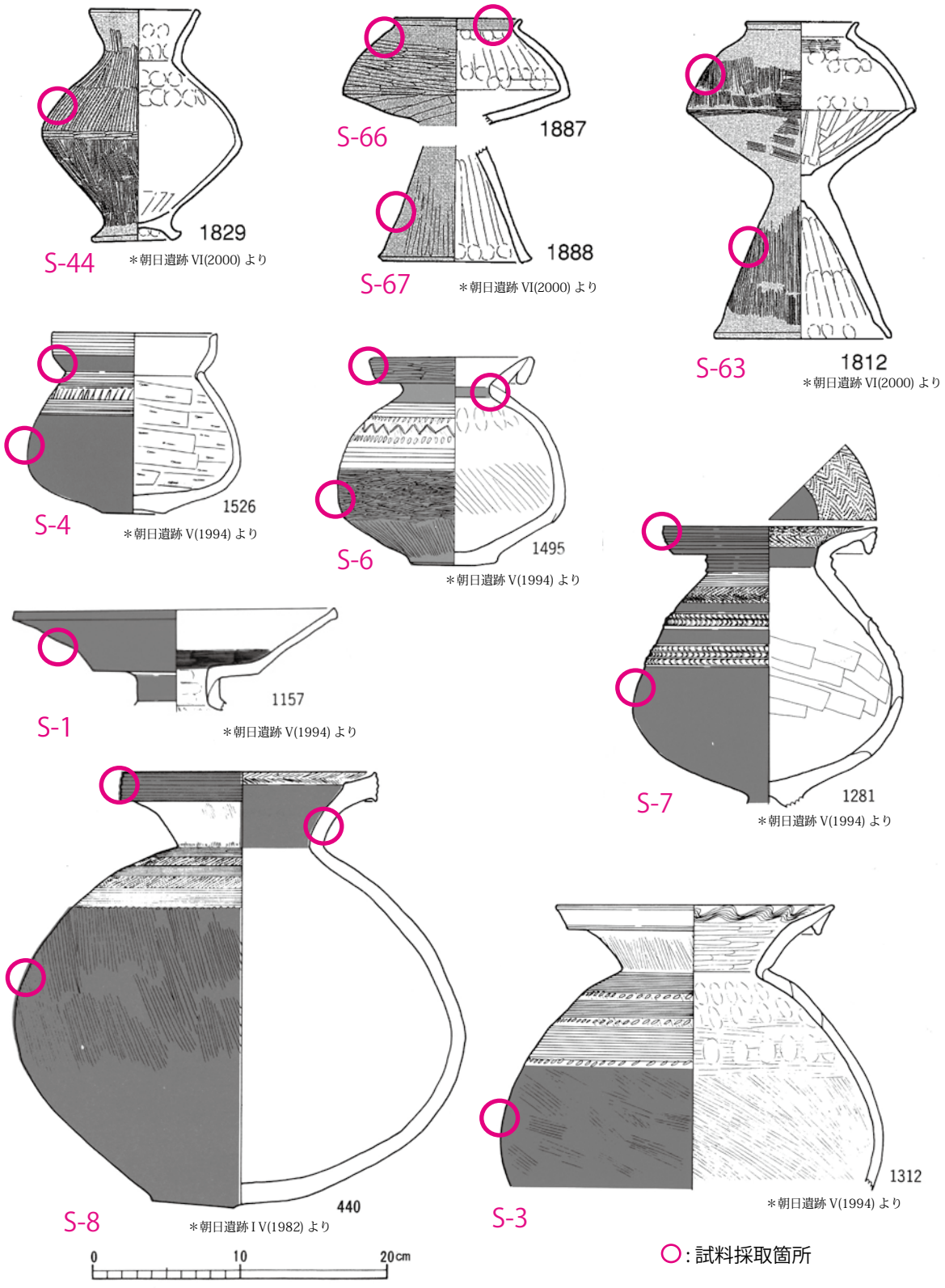


図 1　分析試料と採取位置（ 1 ）

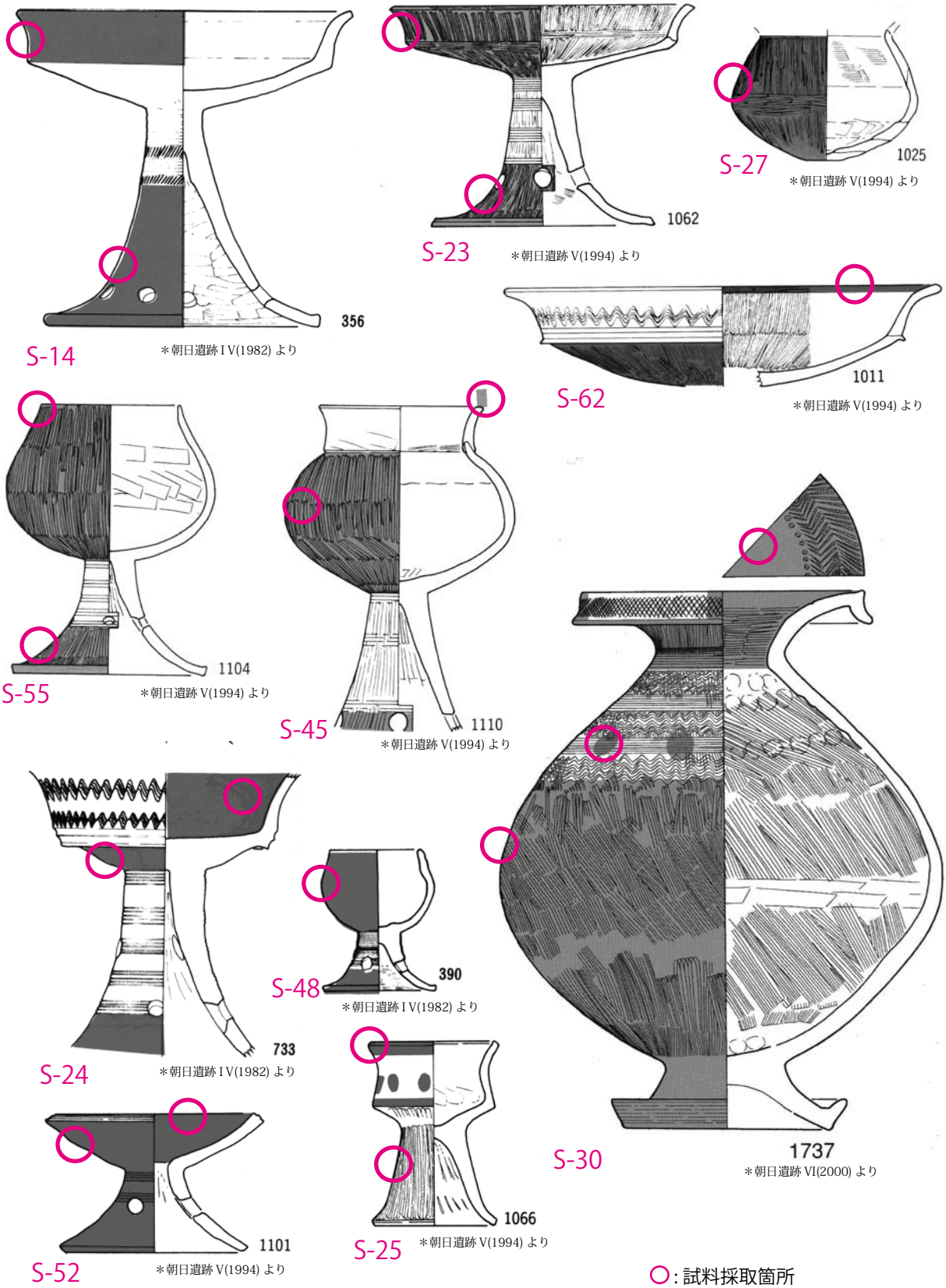
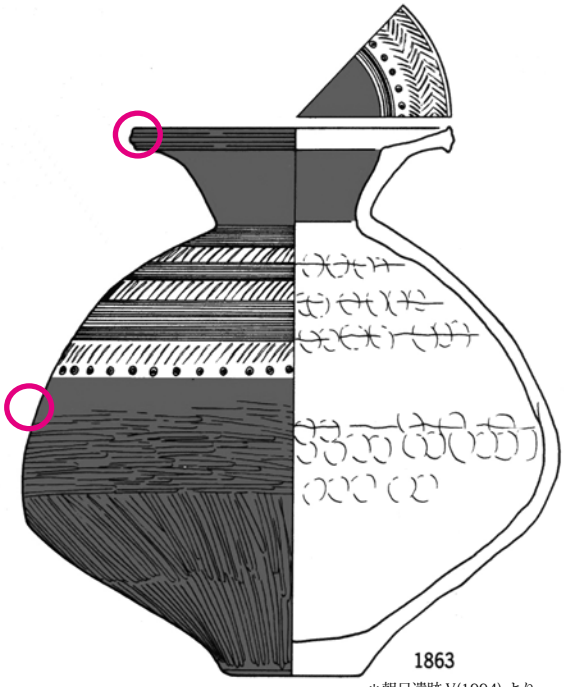
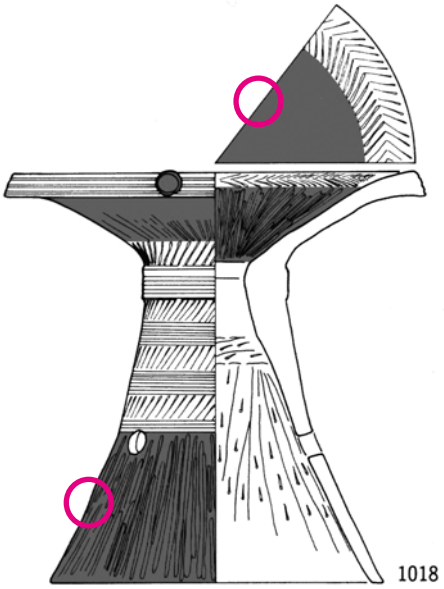


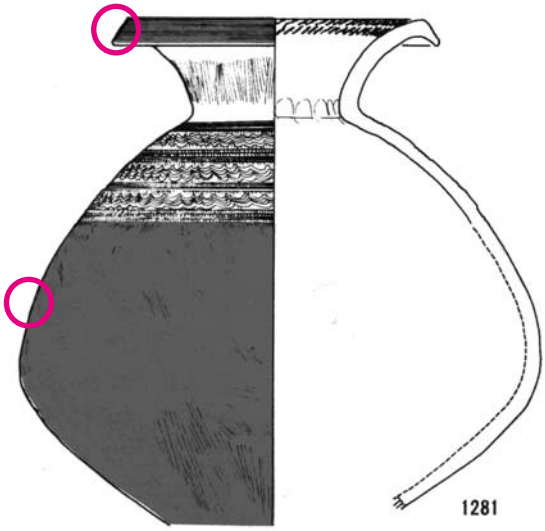
図２　分析試料と採取位置（２）



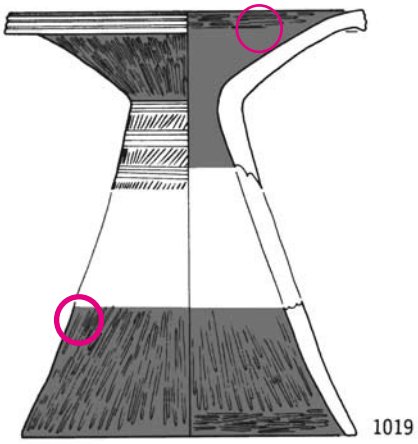
S-5 ＊朝日遺跡 V(1994) より



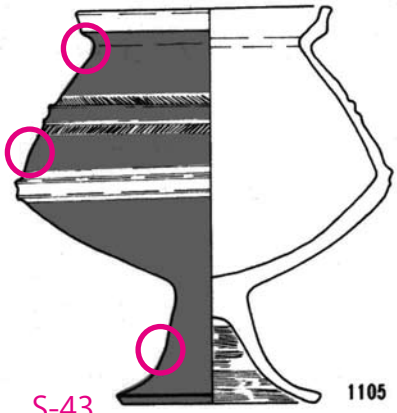
S-32 ＊朝日遺跡 V(1994) より



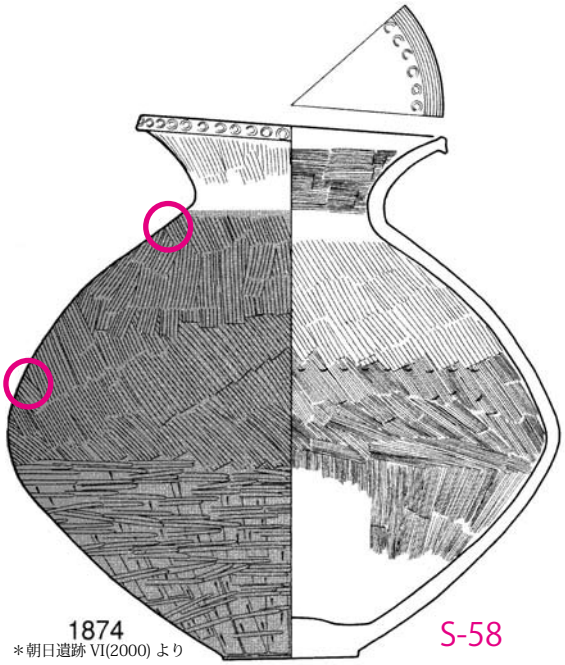
S-12 ＊朝日遺跡 I V(1982) より



S-39 ＊朝日遺跡 V(1994) より



S-43 ＊朝日遺跡 I V(1982) より



＊朝日遺跡 VI(2000) より

S-58

○：試料採取箇所

図３　分析試料と採取位置（３）

表２　下懸遺跡出土赤彩土器　分析結果

図版番号	器種	時期	採取部位	Si	S	K	Ca	Ti	Cr	Mn	Fe	Cu	Zn	Ni
20	壺	C期		○	○	○	○	○		△	○			
25	壺	C期		○	○	○	○	○			○			
29	壺	C期		○	○	○	○	○			○			
126	壺	C期		○	○	○	○	○	△	△	○			
127	壺	C期		○	○	○	○	○			○			
155	壺	C期		○	○	○	○	○		△	○			
156	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○			
157	壺	C期		○	○	○	○	○			○	△		
243	鉢	C期		○	○	○	○	○		△	○			
249	壺	C期		○	○	○	○	○			○			
250	壺	C期		○	○	○	○	○			○			
258	壺	C期	凸部	○	○	○	○	○			○	△		
			凹部	○	○	○	○	○		△	○			
282	壺	C期	凸部	○	○	○	○	○	△	△	○			
			凹部	○	○	○	○	○	△	△	○			
284	壺	C期	脚部内側	○	○	○	○	○			○			
			杯部外側	○	○	○	○	○			○			
305	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○			
603		C期		○	○	○	○	○	△		○			
626	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○			
634	壺	C期	首部外側	○	○	○	○	○			○			
			首部内側	○	○	○	○	○		△	○			
638	壺	C期		○	○	○	○	○	△	△	○	△		
643	壺	C期		○	○	○	○	○			○			
668	高杯			○	○	○	○	○			○			
676	高杯			○	○	○	○	○			○			
683	壺	C期	外側	○	○	○	○	○	△		○			
			内側	○	○	○	○	○	△		○	△		
695	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○			△
696	壺	C期		○	○	○	○	○		△	○			
697	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○	△		
700	壺	C期		○	○	○	○	○			○	△		
702	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○			
703	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○			
704	壺	C期		○	○	△	○	○			○			
705	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○			
707	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○			
859	壺	C期		○	○	○	○	○	△	△	○			
862		B期		○	○	○	○	○		△	○			
912	壺	C期	口外	○	○	○	○	○	△		○			
			口内	○	○	○	○	○	△		○			
973	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○			
1000	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○			
1007	壺	C期	底部	○	○	○	○	○			○			
			外壁	○	○	○	○	○	△		○			
			内壁	○	○	○	○	○	△		○			
1013	壺	C期		○	○	○	○	○			○			
1030	高杯または鉢	B期		○	○	○	○	○			○			

B期：弥生時代中期後葉
C期：弥生時代後期～古墳時代初頭

○：5つの測定点全で確認された元素
△：1～4つの測定点で確認された元素

c. 試料による差

朝日遺跡の試料の時期は八王子古宮式、山中式、廻間式である。各試料の時期と分析値を比較するが、明確な違いは認められない。また器種による違いも確認できない。赤彩が複数箇所に分かれて施されている試料や広い面積を彩色されているものについては、異なる箇所から分析試料を採取した。その結果、3 試料(46,57,60)では、複数箇所で、同一の元素が確認されたが、他の 39 試料では採取位置により検出される元素に違いが認められた。しかし部位による傾向は認められなかった。

下懸遺跡の試料においても、朝日遺跡と同様、部位による検出元素の違いがあるものの、出現の傾向は認められない。また器種による傾向も確認できなかった。

d. 遺構から出土する赤色物質との比較

表 3 に朝日遺跡より出土した赤色顔料の分析結果を示す。これらの試料は土器に塗布されたものではなく，住居地の床面から採取された赤色物質や、トレンチ掘削中に検出された赤色粒子である。測定条件および測定方法は土器の赤色顔料と同様である。検出元素は以下の通りである。全ての試料に認められた元素は Si,S,Ca,Fe。測定箇所によって確認された元素は K,Ti,Mn である。土器の赤色顔料と比べると、含まれる元素の種類が少ないことがわかる。また名古屋市教育委員会が調査を実施した朝日遺跡において検出された赤色物質を含む土壌においても、Al,Si,K,Ti,Fe が検出元素としてみられた (堀木　2006)。

これらの赤色物質と土器に塗布された赤色顔料の元素を比較すると、土器の赤色顔料の方が明らかに元素の種類は多く、試料によるばらつきも大きいことが伺える。特に Ti や K は、土器の赤色顔料ではどの試料にも普遍的に含まれているの対し、赤色物質には安定して含まれていない。このことは、赤色物質がそのまま土器に塗布されたのではなく、Ti や K、Ca を含むものを混ぜてから塗布されたと推測される。Ti や K,Ca を含む鉱物は、黒雲母や角閃石、長石などがあるが、今回の分析では X 線回折による結晶構造の分析を行っていないため、詳細は不明である。

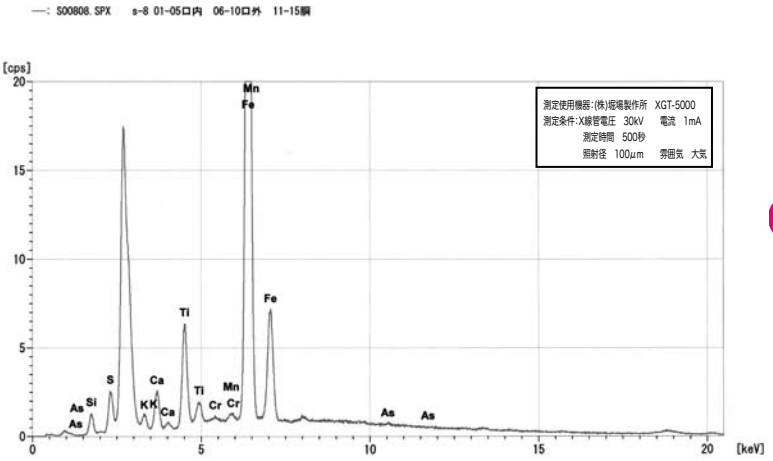
また名古屋市教育委員会の調査において検出された赤色物質と、愛知県埋蔵文化財センターの調査で検出された赤色物質では Al に違いが見られる。名古屋市教育委員会の試料のうち、水洗選別を行った赤色物質には、Al が見られないことから、Al は水の影響を受けやすいと推測され、現場から測定までの経緯の違いによるものと考えられる。しかし、Al は粘土鉱物などに多く含まれることから，赤色物質に粘土を混ぜあわせた結果、Al が含まれたという可能性も想像できる。

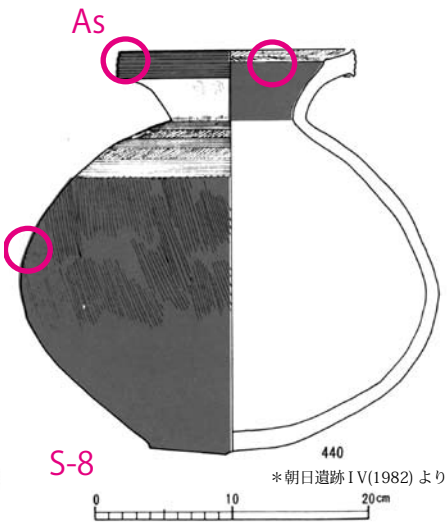
e. ヒ素および銅について

近年、濃尾平野北西部に位置する大垣市周辺において、かつて存在した赤鉄鉱の鉱脈を根拠に古代の製鉄や赤色顔料の生産について議論されることが多い（金生山製鉄史研究会 1994 他)。これらの議論の根拠は、金生山から産する赤鉄鉱に、若干の As（ヒ素）および Cu（銅）が含まれていることにある。そこで、今回分析を行った赤色顔料について As および Cu の含まれかたに着目してみる。今回分析を行った 162 点のうち、As が含まれていたものは、朝日遺跡の試料 4 箇所 3 試料（試料番号 8 ：パレス壷：440：口縁外側、23：有段高杯 1062：脚部、28：パレス壷：赤黒丸文：首部および胴部上部　図 4）であった。これら 3 点の試料はいずれも異なる部位の測定も実施したが，As を確認できない部位もあった。Cu が確認されたものは朝日遺跡の試料は 28 点（2,4,7,8,9,10,11,12,14,15,20,21,22,23,25,28,30,32,40,43,45,46,47,52,56,63,65,66)、下懸遺跡 6 点（157,258,638,683,697,700）であった。

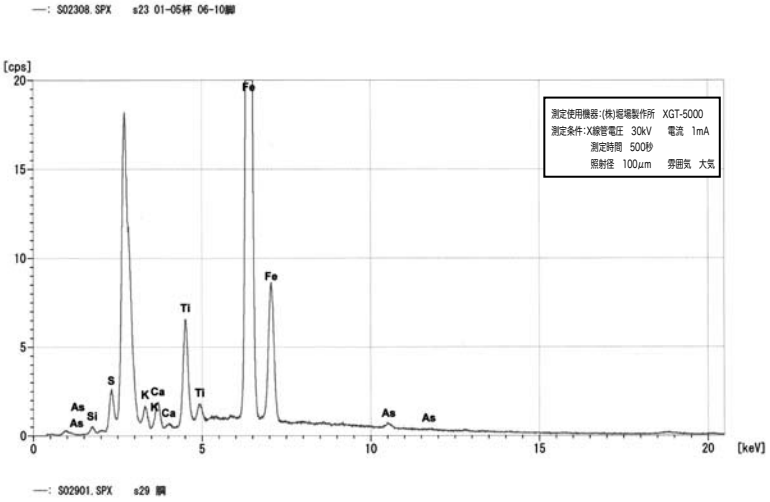
今回の分析では各試料の各部位から採取した試料について、測定の精度をあげるために 5 カ所の測定点を設定した。今回 As や Cu を確認できた試料においては、いずれの測定点でも As も Cu が確認されるのではなく，これらの元素を確認できない測定点が必ず存在した。また確認できる測定点のスペクトルを見ても、非常に小さなピークを示している場合が多かった。これらのことから、As や Cu は、含有量そのものが非常に少なく、不均一に分布しているものと考えられる。

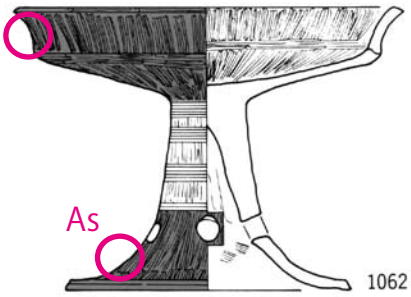
また、金生山の赤鉄鉱から赤色顔料の試料採



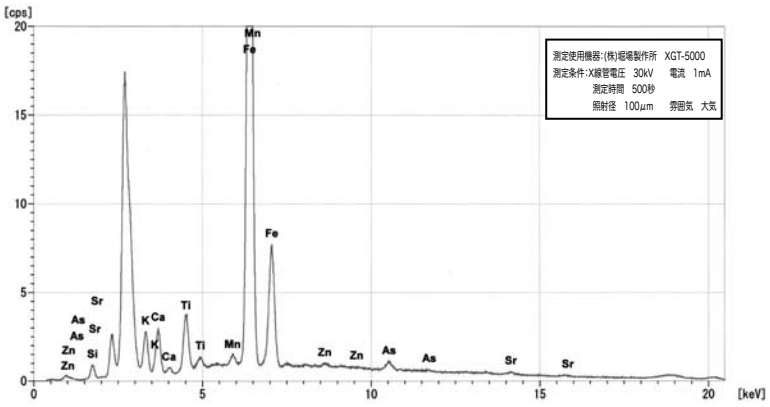


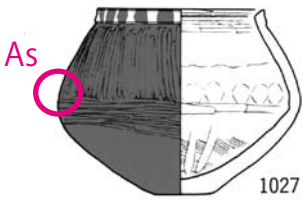
＊朝日遺跡ⅠⅤ(1982)より





＊朝日遺跡 V(1994)より





＊朝日遺跡 V(1994)より

○：試料採取箇所

図４　ヒ素が確認された分析試料

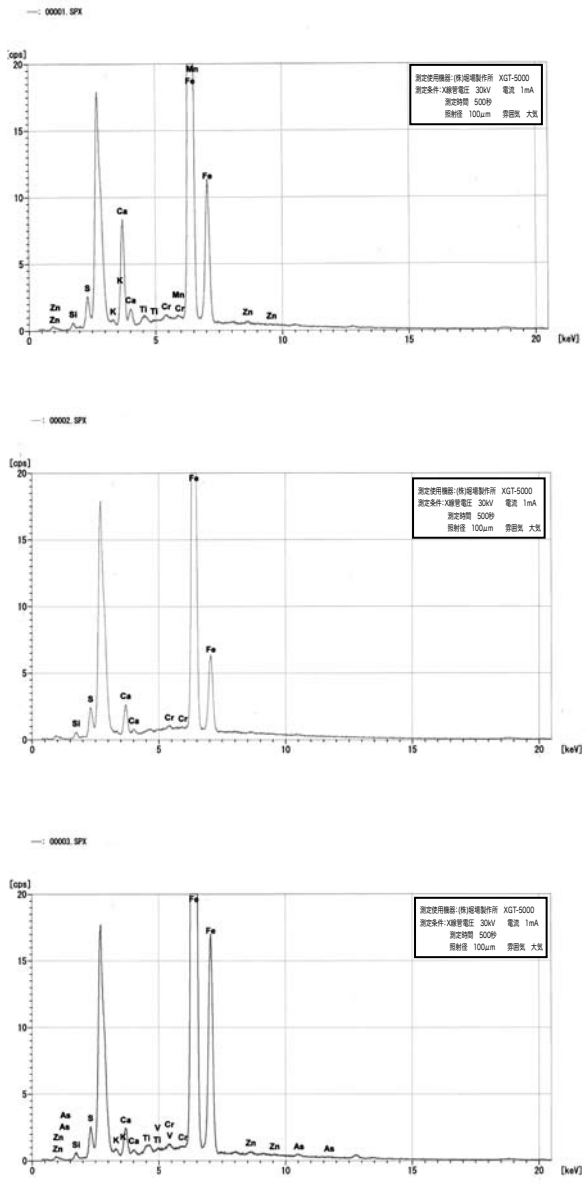


図５　金生山より採取された赤鉄鉱の分析結果

取と同様に、セロハンテープを用いて分析試料を採取し測定したところ、やはり測定点により As の検出に違いが認められた。Cu は確認することができなかった（図 5）。

しかし金生山の赤鉄鉱に As および Cu が含まれていることは八賀（1999）で引用された分析値から明らかである。また大垣市周辺の遺跡から出土した鉄製品や、金生山の赤鉄鉱を用いた製鉄実験において生成された鉄製品に As や Cu が含まれていることも明らかとされている（尾上 1995, 金生山赤鉄鉱研究会　2001 他）。

近年の研究成果によると、ベンガラと呼ばれる赤色顔料にはいくつかの種類があり、原材料や製法により粒子の違いや色相の違いがあるとされる（北野　2007）。赤鉄鉱を砕いて生成されたベンガラは、電子顕微鏡による粒子の形状の観察では角礫状をなすとされる。他には、中空円筒状の粒子をなす。「パイプ状ベンガラ」がある。このパイプ状ベンガラは縄文早期から古墳時代にかけて多く用いられるが、飛鳥・白鳳時代以降は使用事例が少なくなるというものであり、生産や流通は不明な点が多いとされる（北野　2007）。また排水溝などに沈積した含水酸化第二鉄を利用してベンガラを生成した可能性も示唆されている（矢彦沢ほか　1995）。

ここで今回分析を行った試料のうち、少なくとも As および Cu が確認された赤色顔料について、その原材料の入手先を金生山とする可能性は推定できる。しかし、前述したようにベンガラの材料推定を行う場合、その粒子の形状観察は不可欠である。つまり、今回分析の対象となったベンガラと赤鉄鉱とのつながりを明らかにした上で、かつ遺跡から最も近傍で入手したという条件でのみ、金生山の赤鉄鉱が材料とな

表３　朝日遺跡（名古屋市教育委員会調査）出土赤色物質　分析結果

SampleNo	調査区	遺構	試料の形状	Al	Si	S	K	Ca	Ti	Mn	Fe
1	05Ab	1405SK	住居地床面の赤色物質		○	○		○	△	△	○
2	05Ab	検出2-T	赤色物質を含む土壌		○	○	△	○	△	△	○
3	05Ab	936SK	住居地床面の赤色物質		○	○	△	○	△		○
4	05Ab	52SQ-T	赤色物質を含む土壌		○	○		○	△		○
5	14次オ区	SK01(SZ28)	赤色物質を含む土壌	○	○		○		○		○
6	14次ク区	SB04-P300	水洗選別済赤色物質		○				○		○
7	14次ク区	9E7i	赤色物質を含む土壌	○	○		○		○		○
8	14次ク区	SB04-P271埋土西半	赤色物質を含む土壌	○	○						○

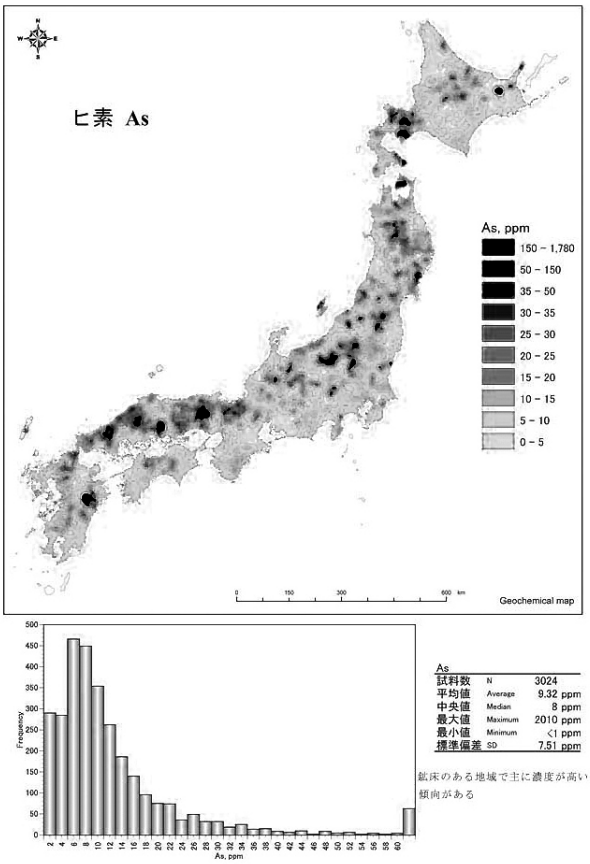


図６　日本の地球化学分布図（ヒ素）
※今井ほか (2004) より転写

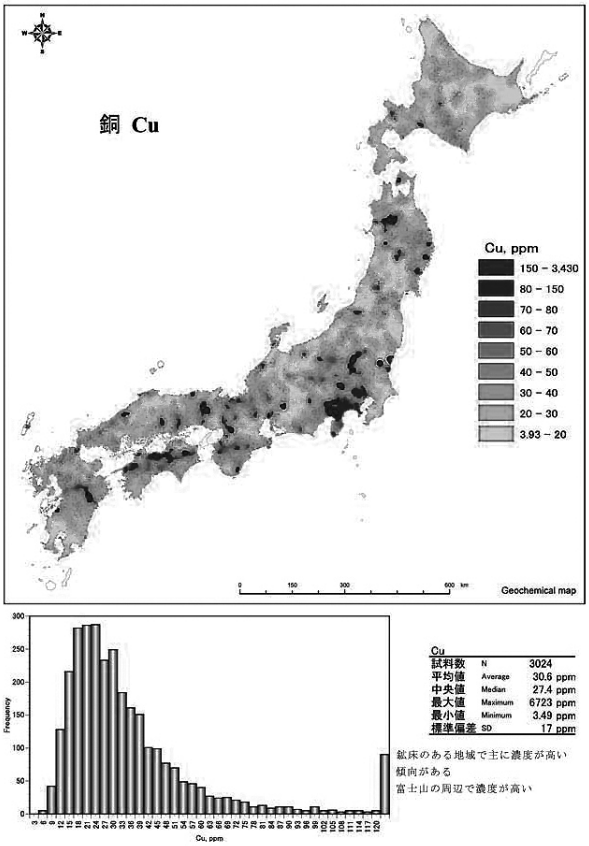


図７　日本の地球化学分布図（銅）
※今井ほか (2004) より転写

ったと推定することができる。

ここで遺跡から近傍であるという条件づけについて述べる。ベンガラの主成分である鉄については、矢彦沢ほか（1995）でもあるように、地下水とともに動きやすく、比較的容易にどこでも入手できると考えられる。次に図６にヒ素の分布図、図７に銅の分布図を示す（今井ほか　2004）。この元素分布図は現在の河川堆積物の分析結果より作成されたものである。今井ほか（2004）によると、ヒ素や銅の分布は供給元となる鉱山の影響を大きく受けているとされる。ヒ素と銅がともに高濃度の地域としては、京都府九鬼谷付近、岡山県吹屋銅山、兵庫県生野銀山付近、宮崎県高千穂付近などがあげられる。金生山付近にもヒ素の分布は認められる。これらの地球化学図は現在の河川堆積物の分析結果であるために、古墳時代において、まったく同様の分布であったとはいえないが、その分布地域に大きな違いは生じていないと考える。つまり、金生山以外の地域においても、生成したベンガラ中にヒ素および銅が含まれると考えられる。そのため、濃尾平野で使用されたAs や Ca を含むベンガラの原材料を最も近傍で入手したものと仮定したならば、大垣市金生山付近であったと推測できよう。また、As や Ca を含まないベンガラについては、原材料が赤鉄鉱であるとする根拠が確認されれば、金生山との関連づけができるであろう。

ベンガラの原材料の追求を行うには、蛍光Ｘ線による定性分析はもちろんのこと、結晶構造を調べるためのＸ線回折分析、および粒子の形状を観察するための電子顕微鏡による観察を実施する必要がある。

まとめと今後の課題

今回の分析によって、パレススタイル土器と呼ばれる赤彩された土器の顔料はベンガラであることが証明された。またベンガラに含まれる元素の種類からは地域による違いや、使用される器種および部位による種類の差を見いだすことはできなかった。遺跡から検出された赤色物質の元素と比較したところ、土器に塗布された赤色顔料の方が多種類の元素を含んでいることが判明した。

また３試料４測定点でヒ素を確認することができた。濃尾平野の北東部に位置する金生山よりヒ素および銅を含む赤鉄鉱が入手できる。このことから、ヒ素が確認された赤色顔料について、遺跡の近傍という条件を当てはめるならば、金生山付近で原材料を入手したとの推測は可能である。今回の分析では粒子の形状観察および結晶構造の解析を行わなかったため、ベンガラに赤鉄鉱そのものが利用されたかは不明である。しかし、ヒ素に注目するならば、その分布域は鉱山に影響するものなので、ベンガラが赤鉄鉱以外の材料で作られたものであっても、ヒ素が入ることで金生山付近にその供給地を求めることは可能である。

しかし、全国的なヒ素の分布を見ると、金生山以外により高濃度のヒ素や銅を含む鉱山が各地に存在している。もしも赤色顔料が広範囲で流通していたならば、その産地推定についてはより詳細な情報を得なければならない。

今後赤色顔料の分析においては、定性分析および粒子の電子顕微鏡観察、鉱物組成の分析をあわせて行い、ベンガラの原材料の推定を行う必要がある。その上で、各地の赤色顔料との比較検討を重ね、産地推定の可能性を探る必要があると考える。

謝　辞

今回の分析を進めるにあたり、朝日遺跡の土器の形式分類および所属時期の特定を赤塚次郎氏に、下懸遺跡の試料については池本正明氏にご協力をいただいた。また永井宏幸氏には分析試料の採取および遺物選定にあたりご尽力いただいた。金生山に関する文献については、大垣市教育委員会鈴木元氏よりご教示いただいた。記して感謝の意を表します。

参考文献

愛知県教育委員会（1982）朝日遺跡 IV,210pp.

財団法人愛知県埋蔵文化財センター（1994）愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 34 集　朝日遺跡 V.406pp.

財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター（2000）愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 83 集　朝日遺跡 VI.406pp.

今井　登・寺島　滋・太田充恒・御子柴（氏家）真澄・岡井貴司・立花好子・富樫茂子・松久幸敬・金井　豊・上岡　晃・谷口政碩 (2004) 日本の地球化学図 , 産業技術総合研究所地質調査総合センター ,209pp.

尾上卓生 (1995) 塚原遺跡出土鉄製品及び重竹遺跡出土鉄製品の調査解析報告 . 関鍛冶の起源を探る ,195-220.

北野信彦（2007) 古代木造建造物のベンガラ塗装に関する研究 (II) ーパイプ状ベンガラの生産と使用に関する基礎的調査ー . 考古学と自然科学 .Vol.56,41-63.

金生山製鉄史研究会（1994）古代赤坂金生山の製鉄研究ー金生山赤鉄鉱に関する調査報告書ー .15pp.

金生山赤鉄鉱研究会 (2003) 金生山の赤鉄鉱と日本古代史 .56-84.

小村美代子 (2004) 付載　桧遺跡出土遺物の赤色顔料分析 , 大垣市埋蔵文化財調査報告書第 14 集　東町田遺跡、168-170.

下坂康哉 (1988) 非金属鉱床 . 日本の地質５　中部地方 II.225-229.

八賀晋 (1999) 古代の鉄生産についてー美濃・金生山の鉄をめぐってー . 学叢 ,21,111-122.

堀木真美子（2006) 名古屋市朝日遺跡出土の赤色顔料 , 名古屋市文化財調査報告 69. 埋蔵文化財調査報告書 54　朝日遺跡（第 13・14・15 次）,233-240.

矢彦沢清允・両角秀俊・藤松仁・村上泰・森嶋稔 (1995) 弥生式土器の塗彩に使われたベンガラの由来 - フォッサマグナ東端地域を中心として -. 考古学雑誌　第 80 巻第 4 号 ,75-87.

愛知県日置八幡宮所蔵木造獅子頭考

蔭山誠一

愛知県愛西市日置八幡宮所蔵木造獅子頭の歴史的位置付けを考えるために、中世前半期における東海地域と中国地方西部の木造獅子頭の形態変遷と地域的特徴を明らかにした。そして建長四（1252）年製作銘の判明した日置八幡宮所蔵獅子頭を通して、鎌倉時代から室町時代前半にみられる東海地域と中国地方西部にみられた共通する変化を様式的変化と捉え、地域の製作者（工人）が当時の文化の中心地からデザインを入手した可能性と東海地域に見られる小地域色の出現を地域の製作者（工人）が以前から存在した獅子頭の写しの結果としておこる地域変容として考えた。また、日置八幡宮が所在した日置荘の資料を通じて日置八幡宮所蔵木造獅子頭製作の背景を指摘した。

はじめに

仮面としての獅子頭は古代の伎楽における先導役の仮面として仏教とともに日本に伝えられたもので、平安時代後期以後は寺院や神社の行道に伴う先導役の仮面として、近世以後は大神楽や神社の祭礼などに伴う風流系舞の仮面として発展してきたものである。現在、我が国の残る古い獅子頭は伎楽面として残る正倉院のもの、その後の行道面が主に神社や寺院の伝世品として各地に残され、その一部は国や県等の地方自治体の文化財として指定され、保存されてきた。

（1）木造獅子頭の研究史

木造獅子頭に関連する研究には、獅子頭の彫刻としての研究と獅子舞など芸能として民俗から見た研究がある。工芸品（彫刻）としての研究として田邊三郎助氏による一連の研究（田邊 1981・1986・1997）、臼杵華臣氏による山口県における研究（臼杵 1984）、岩手県立博物館による門屋光昭氏の研究（門屋 1981）などがある。民俗から見た研究では全体的に江戸時代後期以後の新しい獅子頭を用いる獅子舞を研究することもあり、獅子頭に関する分析はほとんどない。ここでは、彫刻としての木造獅子頭の形態的分析がなされている門屋氏と田邊氏の中世の木造獅子頭の研究成果について大略をとりあげる。

門屋氏は岩手県黒森神社の中世から近代にかけての木造獅子頭の民俗・芸能と獅子頭の形態について分析され、「黒森神社の権現さま一覧」として、獅子頭の形態変遷について後頭断面の様式（半月形→角形）、鼻と目の間の刻み（鈍角→鋭角）、鼻や眉のつくり・頬の盛り上がり（豪壮さ・個性的→柔らかさ・形式的・装飾的）などの年代差が指摘され、全体的に前代のものをモデルにして作り続けられた結果、初期の力強い豪快な刀法は次第に薄れ、省略や装飾が加えられて形式的類型的になっていったとされている。

田邊氏の研究は平安時代の作とされる奈良県法隆寺の木造獅子頭や広島県御調八幡宮の木造獅子頭から中世の紀年銘が残る獅子頭についての変遷が全体の肉取りや舌の工作、植毛の仕方、眉の形態、目鼻立ちや口縁の彫り口にみられる象形など時代的変化や特徴を分析されている。木造獅子頭の形態的特徴の変遷は、平安時代の法隆寺から防府天満宮、伊奈冨神社、津波倉神社の獅子頭に連なるカサ高の一群と御調八幡宮から丹生神社、石川の白山神社の獅子頭に続くやや扁平な感のある一群の二つの形態の流れがあるとされ、このカサ高の形態の獅子頭と扁平な形態の獅子頭が静岡県息神社において製作年が１年違いで存在することから、息神社の獅子頭の製作に当たり、２つのサンプルが存在したことが指摘されている。その後南北朝期の地方の作にすでに見られた肉取りが角張って抑揚がなくなる傾向は、室町時代（15 世紀以後）には両者の系統ともより一般化し、より角張っ

てくるとされる。これと並行して室町時代には背景として地方での製作が多くなり、全般的に木彫りや漆塗りの技術が低下すると指摘されている。室町時代の後半から桃山時代にかけては、顎は角張ったままであるが、頭部が高く、鼻から顎の前方部が低く締まって形の良いものの数が増すとされ、江戸時代には一部を除いて耳が頭部と共彫りのもの、別製でも固定されるもの、舌が下顎の上に削り出されるだけのものなどの工作上の簡略化が一般化し、形態においてもバリエーションが増すことが指摘されている。また岩手県黒森神社における中世末から江戸時代にかけての獅子頭の製作に関して、前代からのものを「写す」という行為がある場合と同じ地域におけるその他の場合の獅子頭との違いについて分析されている。

（2）本論の目的

本論は、平成 18 年度に愛知県愛西市（旧海部郡佐屋町）日置町所在の日置八幡宮に残る木造獅子頭の市の文化財指定に関わり、その後保存処理の為に現状を実測・調査したのが始まりで、この獅子頭の歴史的位置付けを深めることにより愛西市日置地域の歴史を考えることが目的である。また、後に述べるように、日置八幡宮所蔵獅子頭の修復作業の中で、上顎から新たな紀年銘が発見された。この成果により鎌倉時代から室町時代の東海地域における獅子頭の変遷と地域的特徴を明らかにし、日置八幡宮所蔵木造獅子頭の分析を通じて中世前半期における木造獅子頭製作の特徴に迫ることが可能であるように思われる。

日置八幡宮所蔵木造獅子頭の概要

まず、日置八幡宮所蔵木造獅子頭の概要を示す（図１・図２、写真１～写真６参照）*。

（1）日置八幡宮と木造獅子頭

愛西市日置八幡宮は愛知県の南西部旧海部郡佐屋町大字日置地内にある八幡宮で、古い建物は残っていないが、銅製掛け仏や狛犬１対などが残され中世から続く社である。それらと一緒に保管されてきたのが今回分析する木造獅子頭で、獅子頭がどのような神事および芸能に使用にかんする伝承は残されていないが、江戸時代後期に編纂された『尾張名所図絵』に「同（八月）十六日、神寶蟲拂ありて、古き弓矢・獅子頭及び經巻等を諸人に見せしむ」とあり、日置八幡宮の木造獅子頭が古くから社宝として伝えられてきたものである。下顎裏宝珠形掘り込み穴内に、「[　　] 作事／享徳甲戌／八月日／淨教　父子／ [　　]」([　　] 内は判読不能）という墨書銘が確認でき、享徳甲戌すなわち享徳（1454）３年の作であることが記されている。残存状況は、下顎部分には虫食いがほとんどなく、漆塗りがほとんど剥落していないが、上顎部分は漆の塗りが多く剥落し、虫食い穴が多く存在する。上顎右側眼付近の内面にて、紙と黒漆による補修の痕跡が見られる。また獅子頭前面の左側から口部にかけて大きな割れが入り、上顎の接合部（右側）などはすでに欠損している。平成 19 年度に修復が行なわれた。

（2）木造獅子頭の形態

現状の獅子頭は高さ 30.5cm、幅 42.2cm、長さ 48.5cm で、上顎右側が欠損していることから、本来の大きさは幅がもう少し広くなるものである。正面から見た形態は、上顎頭部が緩い丸みを帯びたうねりをもつ平坦な形から、側面の口元にかけて比較的大きく膨らみ、下顎にかけてややすぼまる形態で、猫科動物の頭部の正面から見た形に似ている。側面から見た形態は上顎頭部の基部からやや下がりながら平坦に眉間に至り、額が垂直に近い傾きで下がって、眉間より低い鼻先に至る。また目と眉がともに眼の前面から大きく側面後方に伸びることも特徴的である。下顎は中央部が丸く底をなし、口先部と顎の基部にかけて少し立ち上がって浮いた状態である。

各部分の形態について、眼は眉間の中央側にてややうねりのある太い眉の下に左右がややつり上がってみえる赤色の縁取された金色の眼があり、その中に赤色の縁取りに黒色の瞳が大きく見開いている。鼻は眉間を寄せた筋肉の表現の形式化したものと思われる二段の砲弾形の段が鼻稜として鼻先に伸び、幅広でやや低い団子鼻へと続く。鼻の穴は赤色で円形の形で貫通し

* 日置八幡宮と愛西市教育委員会から資料の提供を受けた。財団法人元興寺文化財研究所 2008 日置八幡宮所蔵木造獅子頭の修復と収納箱の製作事業の『修復報告書』

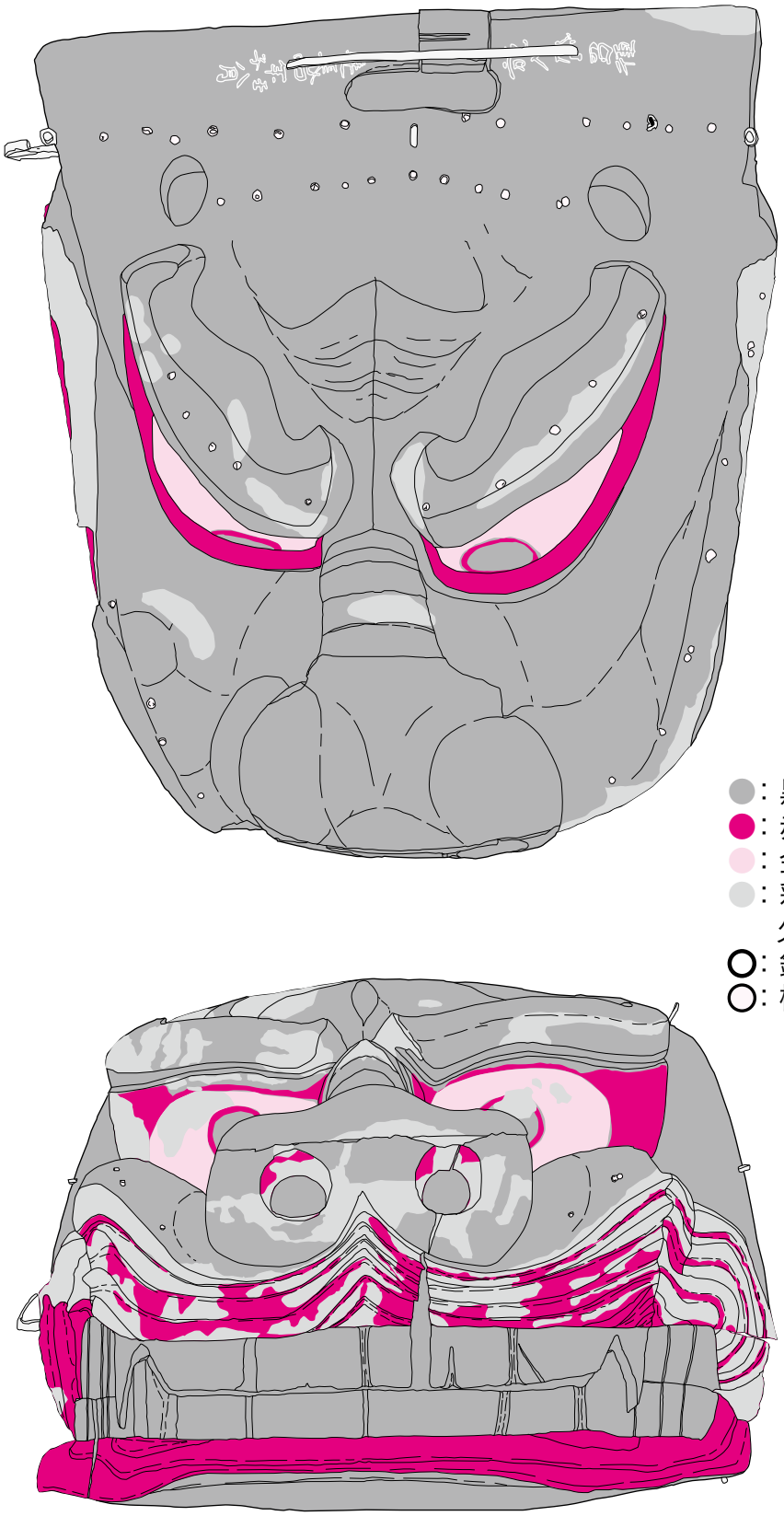


図１　日置八幡宮所蔵木造獅子頭実測図　俯瞰（上図）・正面（下図）（１：４）

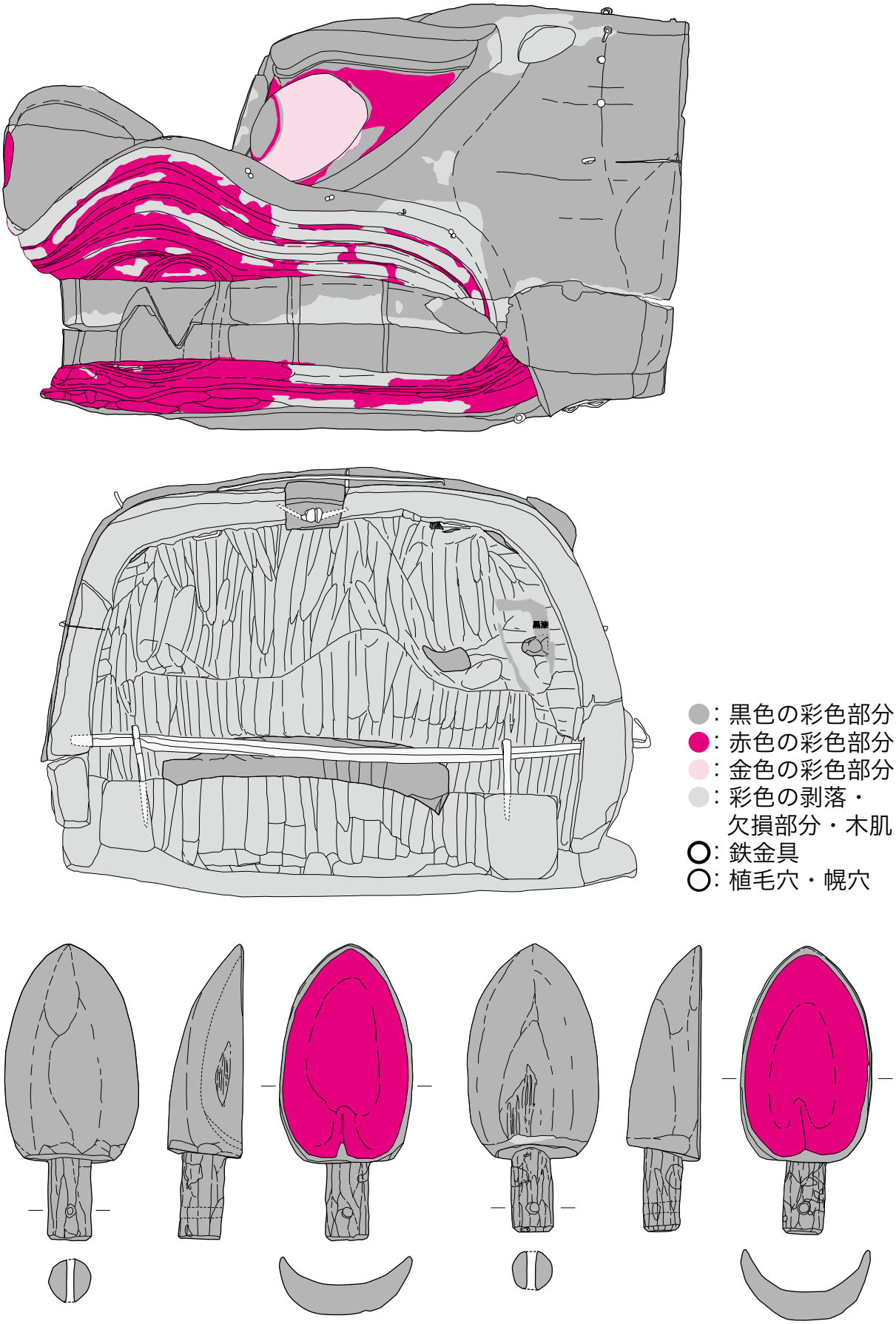


図２　日置八幡宮所蔵木造獅子頭実測図　左側面（上図）・背面（中図）・耳（下図）（１：４）

ている。上顎は鼻先の下から左右の牙にかけて大きなうねりをもって表現され、口元に至る。唇は上唇が５段、下唇が３段の表現がされている。歯牙は下顎の牙が前にくるもので、上顎・下顎とも 20 本で表現され、幅広の歯牙である。

色調は先に述べた部分もあるが、外面全体が黒塗りで眼と鼻の穴、上下の唇が赤色、眼が金色である。内面は上顎の頭部側と下顎部分全体が黒色で塗られている。植毛穴は木釘等で埋められている所や補修により重複する箇所もあるが、頭部頂部に２列、左右の眉に１列、左右の上唇の上に１列あり、重複するものも含めて頭部頂部が 23 個、眉の上部が左右とも５個、上唇の右側が４個、左側が９個確認できる。

（３）平成 19 年度の修復に伴う新成果

日置八幡宮所蔵木造獅子頭は日置八幡宮と愛西市より「日置八幡宮所蔵木造獅子頭の修復と収納箱の製作」事業として財団法人元興寺文化財研究所に委託され、調査と修復が行なわれた。調査は木造獅子頭の破損・劣化状況と構造を観察する為のＸ線透過撮影と獅子頭の下顎底部の宝珠穴にある墨書を赤外線撮影、獅子頭の樹種同定を行った。修復は燻蒸とクリーニング、木胎の強化、漆幕の剥落止め、亀裂部分の補填、破損破片の接着、鉄製金物の防錆、鎹の除去（上顎後頭部上辺にある線刻銘文の調査と破片の接着の為）、補填箇所の彩色が行なわれた。

獅子頭の樹種は当初から下顎は後補の可能性があった為、上顎と下顎の樹種の調査を行った。その結果、上顎はエノキ、下顎はヒノキにより製作されており、別素材により製作されていることから、下顎は後補である可能性高くなった。修復前の予見を追認するものであった。

修復に伴う漆膜表面の汚れを除去する過程で、獅子頭の上顎後頭部上辺の鎹にかかる位置に銘文があることが判明した。銘文は線刻されたもので、線刻された文字の上に古い修復による黒漆の塗布が見られる。現在まで残る鎹はその黒漆の上に打ち込まれていたものであった。修復による鉄製鎹の除去により、上顎右側に「建長四年壬子八月」、上顎左側に「(奉ヵ) 施入盛ヵ西ヵ禅ヵ（師ヵ)」の銘文が判読された。この文字の判読により、日置八幡宮の獅子頭は上顎部分が 1252（建長四）年に製作され、下顎部分が 1454 (享徳三) 年に製作されたことが判明した。施入した者を示す人名については今後の検討が俟たれるが、獅子頭の製作時期が鎌倉時代中頃に特定できたこと、平成 20 年３月 10 日時点において木造獅子頭では最古の製作紀年銘をもつ資料となった（奈良正倉院に残る獅子頭面を除いて)。

東海地域における獅子頭の変遷と特徴

ここでは、東海地域における木造獅子頭の変遷と特徴を検討する。

（１）獅子頭の形態分類

先に述べた門屋氏と田邊氏の研究を参考にしながら、今回は木造獅子頭の特徴における正面から見た形態と側面から見た形態、上顎の植毛（穴）の位置と数量・上顎における植毛表現の３項目について着目したい。

○ 獅子頭の正面観

獅子頭の正面観（頭部後方部の横断面形）として、以下の獅子型、半球型、箱型の３型式に分類する。

獅子型：上顎頭部が猫科動物の骨格や肉付きを反映したものと考えられるもので、頭部頂部が比較的平坦かやや丸みをもつもので、頭部の左右と上顎頬部がやや張り出した形態のもの。

半球型：獅子型から変化したものと考えられるもので、上顎頭部から上顎頬部にかけて、全体に丸みをもつもので、上顎の横断面形が全体で半球状、丸い山形の形になるもの。

箱型：上顎の頭部頂部は丸みをもつが比較的平坦で、上顎の側面がほぼ垂直に立ち上がるもの。上顎の横断面形が箱状に見える。

○獅子頭の側面形態

獅子頭の側面形態（上顎部の縦断面形）として、以下の３型式に分類する。

A 類：上顎の比較的鼻先が低く、鼻梁が後方に凹んで伸びた後、額が垂直からやや斜めに立ち上がるもの。牙に伴う上唇と上唇の筋肉部分の抑揚が比較的大きく、目尻の下端より上まで膨らむもので、上唇の膨らみが眼の前面付近から鼻梁が鼻先に向けて立ち上がり始める位置の間にある。眼は目尻が側面に大きく切れ長に伸び、眼に伴う眉の表現も側面後方に比較的長く伸び

る。

B 類：上顎の鼻先が比較的高くなり、後方に伸びる鼻梁の凹みが浅くなり、額が斜めに立ち上がるもの。頭部の頂部から鼻稜の凹みにかけて一連に下がる傾向がみえるものがある。牙に伴う上唇と上唇の筋肉部分の抑揚が小さくなり、上唇の膨らみが目尻の下端より下にあるもので、上唇の膨らみの位置は A 類とほぼ同様であるが、やや鼻先に近い位置にある傾向がある。眼は目尻が側面にあまり伸びず、眼に伴う眉の表現も側面後方への伸びが短くなる。

C 類：上顎の鼻先が高くなり、後方に伸びる鼻梁の凹みが浅くなり、額が斜めに立ち上がるもの。頭部の頂部から眉間まで比較的平坦になる。牙に伴う上唇と上唇の筋肉部分の抑揚はほとんどなくなり、上唇の膨らみが目尻の下端より下にあるもので、上唇の膨らみが口先の前面にみられるようになる。この口先の膨らみが前面に出ることにより、全体が角張った印象になる。眼は目尻が側面にあまり伸びず、眼に伴う眉の表現も側面後方への伸びが短い。

○植毛（穴）の位置と数量、植毛の表現

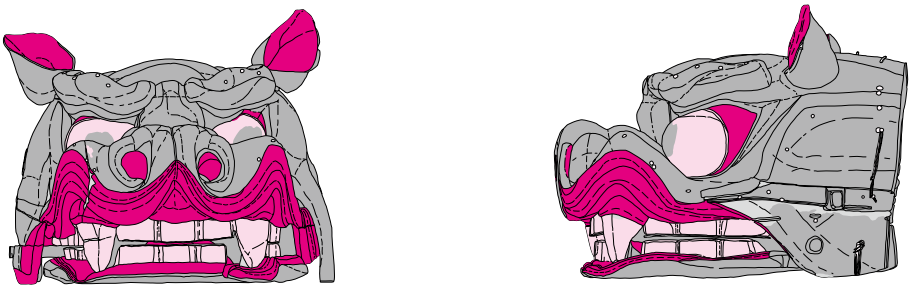
植毛（穴）と植毛の表現は一連のものであるため、ここにまとめて分類する。植毛（穴）、植毛表現がされる位置は上顎の頭部頂部、眉部（瞼部分も含む）、上唇部分、側面頬の部分、下顎の前面から側面の縁部分の 5 ヶ所があり、植毛（穴）や、線刻による表現、線画や描画による彩色表現、彫刻による浮き彫りによる立体的表現の 4 つの手法がある。

（2）東海地域における獅子頭の変遷（図 3・図 4）

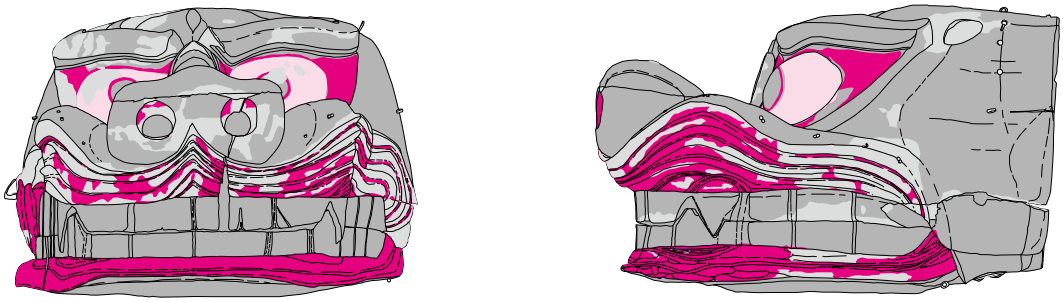
次に前節における分類を元に東海地域における獅子頭の形態の変化を述べる。獅子頭の正面観については、獅子型は愛知県知立市知立神社所蔵獅子頭、愛知県愛西市日置八幡宮所蔵獅子頭、岐阜県美濃市真木倉神社所蔵嘉元三（1305）年銘獅子頭、静岡県浜松市息神社所蔵慶安七（1374）年銘獅子頭がある。半球型には岐阜県美濃市白山神社所蔵至徳二（1385）年銘獅子頭と無銘獅子頭、静岡県浜松市息神社所蔵永和元（1375）年銘獅子頭がある。箱型には愛知県一宮市真清田神社所蔵文明三（1471）年銘獅子頭と愛知県愛西市星大明社所蔵永正七（1510）年銘獅子頭、岐阜県美濃加茂市天神神社所蔵長享二（1488）年銘獅子頭、三重県桑名市神館神社所蔵永享七（1435）年銘獅子頭がある。

獅子頭の側面形態については、A 類は正面観が獅子型の愛知県知立市知立神社所蔵獅子頭、愛知県愛西市日置八幡宮所蔵獅子頭、岐阜県美濃市真木倉神社所蔵嘉元三（1305）年銘獅子頭がある。真木倉神社所蔵獅子頭は鼻先が高く表現されるものなので B 類に近い側面観がある。B 類は正面観半球型の岐阜県美濃市白山神社所蔵至徳二（1385）年銘獅子頭と無銘獅子頭、正面観獅子型の静岡県浜松市息神社所蔵慶安七（1374）年銘獅子頭がある。白山神社所蔵獅子頭の一対のものはどちらも額前面の鼻梁部分を削ってあり、側面形態では A 類に近い部分があるが、至徳二（1385）年銘獅子頭は眼の前面近くに上唇の筋肉の盛り上がりがあり B 類の典型的なもので、無銘獅子頭は上唇の筋肉の盛り上がりがやや鼻先に近い位置にあり、C 類に近いものである。C 類は正面観箱型の愛知県一宮市真清田神社所蔵文明三（1471）年銘獅子頭と愛知県愛西市星大明社所蔵永正七（1510）年銘獅子頭、岐阜県美濃加茂市天神神社所蔵長享二（1488）年銘獅子頭、三重県桑名市神館神社所蔵永享七（1435）年銘獅子頭、正面観半球型の静岡県浜松市息神社所蔵永和元（1375）年銘獅子頭があり、神館神社所蔵獅子頭の上唇の筋肉の盛り上がりはやや B 類に近い側面形態をもつ。

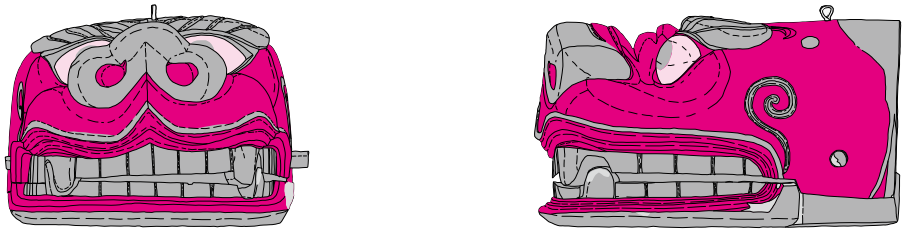
獅子頭の植毛と植毛の表現については、東海地域には頭部頂部と眉部、上唇部、下顎前面の縁部に植毛（穴）がみられるものは、岐阜県岐阜市諏訪神社所蔵嘉元四（1306）年銘獅子頭のみで、植毛数は確認できていないが上唇の植毛穴が多数確認できる（町田市立博物館 1997『獅子頭−西日本を中心に−』21 頁にて確認）。頭部頂部と眉部、上唇の植毛穴が確認できるのは愛知県知立市知立神社所蔵獅子頭と愛知県愛西市日置八幡宮所蔵獅子頭、岐阜県美濃市白山神社所蔵至徳二（1385）年銘獅子頭、同無銘獅子頭があり、眉部と上唇に植毛穴が確認できるのが三重県鈴鹿市伊奈冨神社所蔵弘□（安）三年銘獅子頭（町田市立博物館 1997『獅子頭−西日本を中心に−』21 頁にて確認）で、岐阜県美濃市



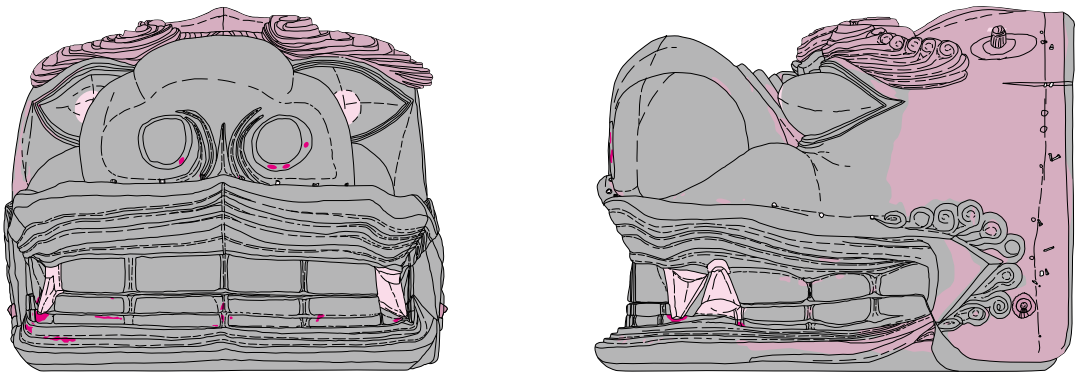
愛知県知立市知立神社：獅子型・A 類



愛知県愛西市日置八幡宮［建長四（1252）年銘］：獅子型・A 類



三重県桑名市神館神社［永享七（1435）年銘］：箱型・C 類

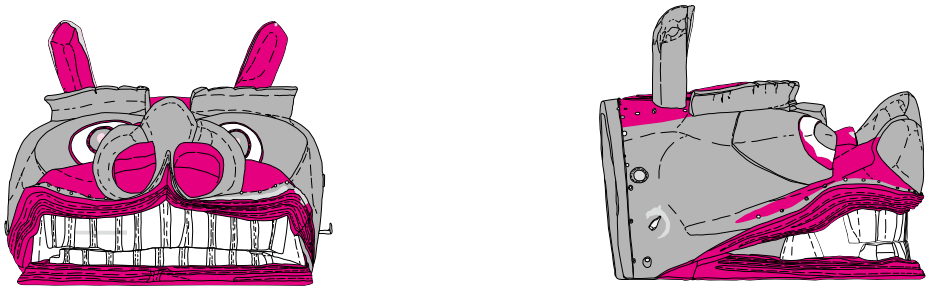


愛知県一宮市真清田神社［文明三（1471）年銘］：箱型・C 類

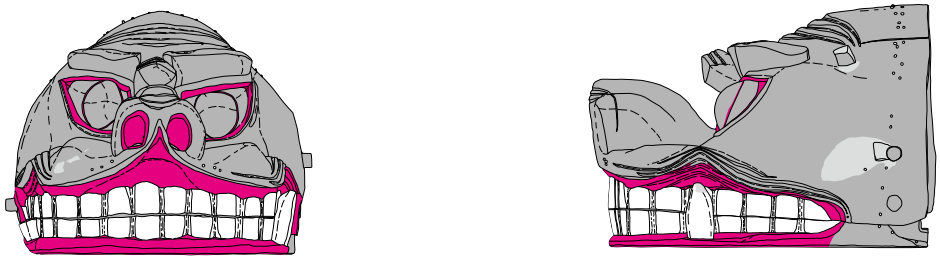
愛知県愛西市星大明社［永正七（1510）年銘］：箱型・C 類

●：黒色の彩色部分
●：赤色の彩色部分
●：金色の彩色部分
●：緑色の彩色部分
●：彩色の剥落・欠損部分
O：鉄金具
●：銅金具
O：植毛穴・幌穴など

図３　東海地域の獅子頭１（１：８）

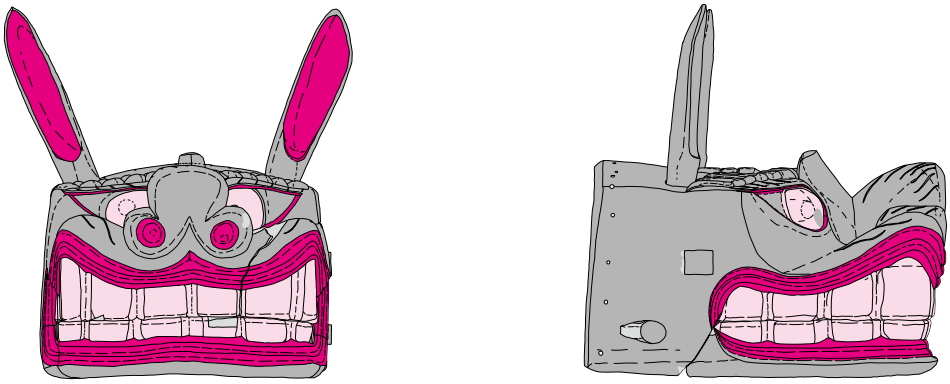


岐阜県美濃市真木倉神社［嘉元三（1305）年銘］：獅子型・A 類



岐阜県美濃市白山神社［至徳二（1385）年銘］：半球型・B 類

岐阜県美濃市白山神社［無銘］：半球型・B 類



岐阜県美濃加茂市天神神社［長享二（1488）年銘］：箱型・C 類

●：黒色の彩色部分
●：赤色の彩色部分
●：金色の彩色部分
○：白色の彩色部分
●：彩色の剥落・欠損部分
○：鉄金具
●：銅金具
○：植毛穴・幌穴など

図４　東海地域の獅子頭２（１：８）

真木倉神社所蔵嘉元三（1305）年銘獅子頭は、眉の後方である頭部頂部と上唇に植毛穴が確認できる。眉部と上唇に植毛穴が確認できるのは、14 世紀後半までの獅子頭に限られる。また岐阜県関市武芸八幡宮所蔵観應二（1351）年銘獅子頭には眉部と頭部は不明であるが、上唇と下顎前面縁部に植毛穴が確認できる（町田市立博物館 1997『獅子頭–西日本を中心に–』37 頁にて確認）。植毛穴が上唇のみに確認できるのは、静岡県浜松市息神社所蔵慶安七（1374）年銘獅子頭、愛知県一宮市真清田神社所蔵文明三（1471）年銘獅子頭と愛知県愛西市星大明社所蔵永正七（1510）年銘獅子頭がある。

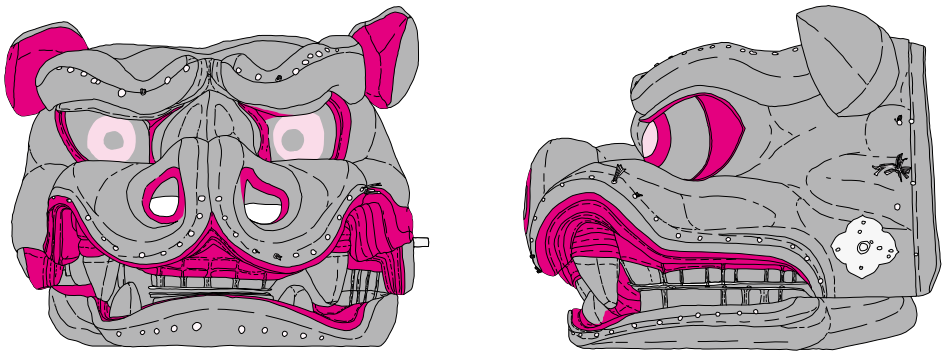
植毛の表現として線刻による表現があるものは、全て上唇にされたもので、岐阜県美濃市白山神社所蔵至徳二（1385）年銘獅子頭と同無銘獅子頭、岐阜県美濃加茂市天神神社所蔵長享二（1488）年銘獅子頭、静岡県浜松市息神社所蔵永和元（1375）年銘獅子頭がある。彫刻による浮き彫り表現は岐阜県美濃市真木倉神社所蔵嘉元三（1305）年銘獅子頭の眉部、愛知県真清田神社所蔵文明三（1471）年銘獅子頭の眉部分と頬部分、岐阜県美濃加茂市天神神社所蔵長享二（1488）年銘獅子頭の眉部、三重県鈴鹿市伊奈冨神社所蔵弘□（安）三年銘獅子頭（町田市立博物館 1997『獅子頭–西日本を中心に–』21 頁にて確認）、三重県桑名市神館神社所蔵永享七（1435）年銘獅子頭の頬部、三重県鳥羽市加茂神社所蔵天文十四（1545）年銘獅子頭の上唇（町田市立博物館 1997『獅子頭–西日本を中心に–』44 頁にて確認）があり、三重県鈴鹿市伊奈冨神社所蔵弘□（安）三年銘獅子頭と三重県桑名市神館神社所蔵永享七（1435）年銘獅子頭の頬部は同じ形態の 1 条の巻き毛が表現されている。

以上の東海地域の獅子頭の変遷をまとめると、14 世紀前半頃までの獅子頭は正面観獅子型と側面形態 A 類が主に伴い、植毛が眉部と上唇部分に比較的多く施されるものが多く、14 世紀後半には獅子頭の正面観半球型と側面形態 B 類が伴い、植毛が残るものの、新たに植毛の線刻表現されるものや、眉部の植毛が無いものが見られるようになる。15 世紀の獅子頭は正面観箱型と側面形態 C 類が伴うようになり、植毛は上唇部分に施されるものが残るが、線刻表現や彫刻による浮き彫り表現が行なわれるものがみられる。このように、東海地域における中世前半期における獅子頭は、正面観獅子型から半球型、次に箱型へと変遷し、それに伴って側面形態や植毛と植毛表現が変化していくことが明らかにできた。

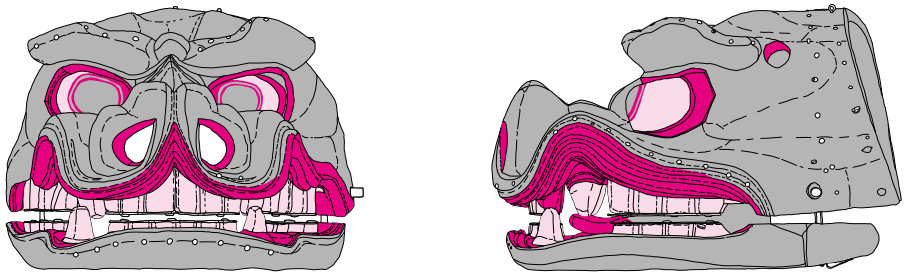
（3）中世における中国地方西部の木造獅子頭（図 5 ・図 6 ）

これまでの木造獅子頭研究の中世前半期における基準資料が多く見られる中国地方西部の獅子頭について同様に形態変化の流れを辿りたい。今回実測、及び観察ができたのは山口県防府市防府天満宮所蔵正平十（1355）年修理銘獅子頭、同正平十（1355）年製作銘獅子頭、山口県山口市花尾八幡宮所蔵元亨二（1322）年銘獅子頭（観察のみ実施）、同無銘獅子頭（観察のみ実施）、山口県山口市朝倉八幡宮所蔵永和三（1377）年銘獅子頭、広島県世羅町丹生神社所蔵正安三（1301）年銘獅子頭、同無銘獅子頭、広島県三原市御調八幡宮所蔵獅子頭の 8 体である。これらの獅子頭は中世にさかのぼる紀年銘の残るものが含まれること、防府天満宮と花尾八幡宮、丹生神社には 1 対になる獅子頭が残されており、1 対の獅子頭は当初からのものではなく、1 つの獅子頭は先にある獅子頭を写して後に製作されたものとされてきたことから、獅子頭の形態変化を考える上で貴重な類例と考えられるからである。

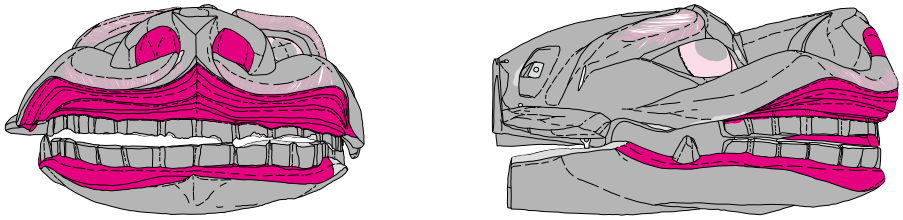
まず獅子頭の正面形態と側面形態を見ると、正面観が獅子型で側面形態が A 類のものは山口県防府市防府天満宮所蔵正平十（1355）年修理銘獅子頭と山口県山口市花尾八幡宮所蔵元亨二（1322）年銘獅子頭、広島県世羅町丹生神社所蔵無銘獅子頭、広島県三原市御調八幡宮所蔵獅子頭で、正面観半球型で側面形態 A 類のものは広島県世羅町丹生神社所蔵正安三（1301）年銘獅子頭と山口県防府市防府天満宮所蔵正平十（1355）年製作銘獅子頭が正面観半球型で側面形態 A 類、正面観半球型で側面形態 B 類のものは山口県山口市花尾八幡宮所蔵無銘獅子頭と山口県山口市朝倉八幡宮所蔵永和三（1377）年銘獅子頭がある。山口県山口市花尾八幡宮所蔵元亨二（1322）年銘獅子頭と同無銘獅子頭は上



山口県防府天満宮［正平十（1355）年修理銘］：獅子型・A 類



山口県防府天満宮［正平十（1355）年製作銘］：半球型・A 類



山口県朝倉八幡宮［永和三（1377）年銘］：半球型・C 類

●：黒色の彩色部分
●：赤色の彩色部分
●：金色の彩色部分
●：緑色の彩色部分
●：彩色の剥落・欠損部分
○：鉄金具
●：銅金具
○：植毛穴・幌穴など

図 5　山口県の獅子頭　S ＝ 1/8

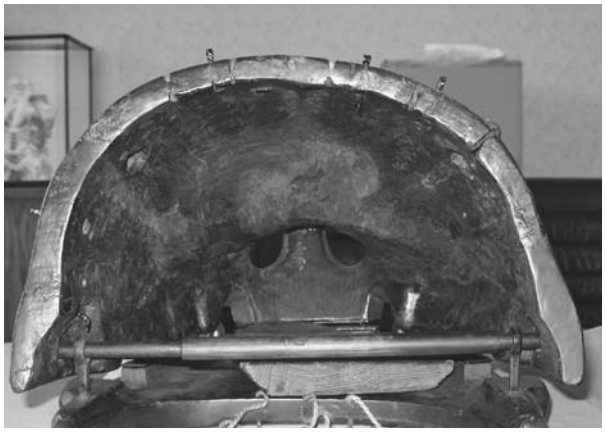
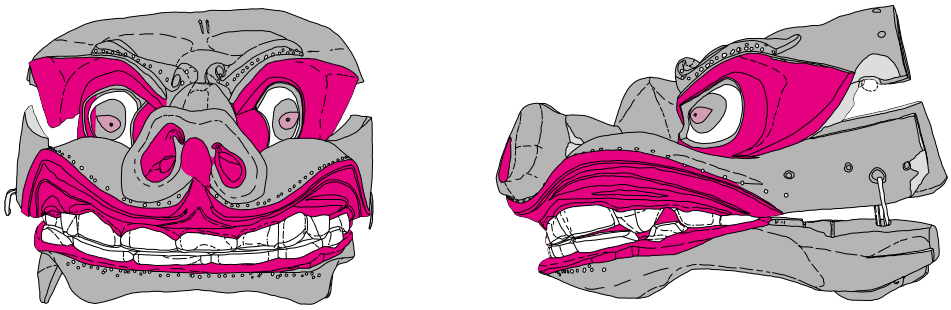
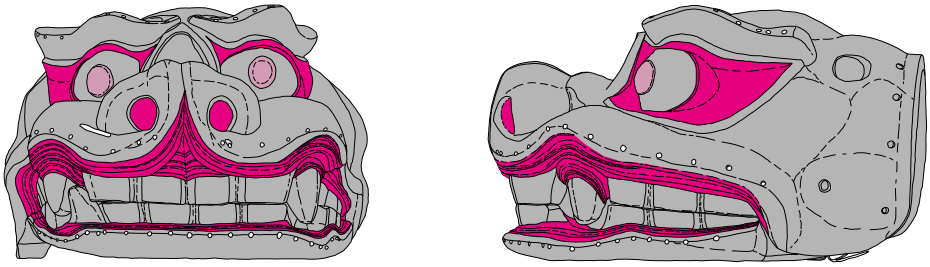


写真 1　防府天満宮正平十年製作銘獅子頭背面写真

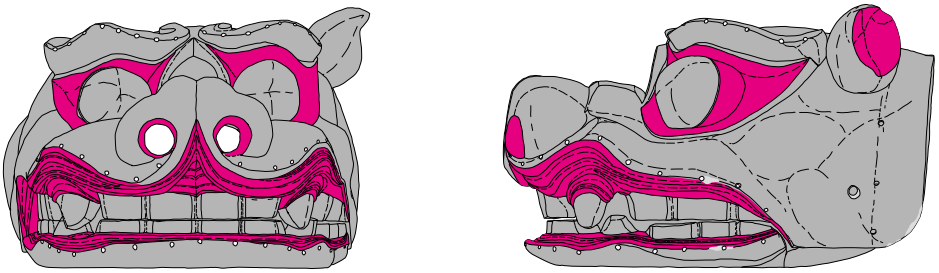
写真 2　防府天満宮正平十年修理銘獅子頭背面写真



広島県御調八幡宮：獅子型・A 類



広島県丹生神社［正安三（1301）年銘］：半球型・A 類



広島県丹生神社［無銘］：獅子型・A 類

●：黒色の彩色部分
●：赤色の彩色部分
●：金色の彩色部分
●：緑色の彩色部分
●：彩色の剥落・欠損部分
O：鉄金具
●：銅金具
O：植毛穴・幌穴など

図 6　広島県の獅子頭　S ＝ 1/8

写真 3　御調八幡宮獅子頭俯瞰写真

写真 4　御調八幡宮獅子頭左眼写真

唇の膨らみが眼の前面側になく、眼の後方側に位置するので、上唇の膨らみはどちらも眼尻の下端より低いが、その他の側面形態の特徴は元亨二（1322）年銘獅子頭がA類、同無銘獅子頭がB類の特徴を示す。山口県防府市防府天満宮正平十（1355）年製作銘獅子頭は同修理銘獅子頭を忠実に真似ているゆえに牙に伴う上唇の盛り上がりが大きく表現されており、側面形態A類に分類しているが、鼻梁から額の立ち上がりや眼や眉の後方への伸びは側面形態B類の形態で、防府天満宮所蔵の一対の獅子頭における質感の違いにつながるものである。

よって14世紀前半までの紀年銘をもつ獅子頭は側面形態がA類の形態で正面観獅子型と半球型のものがあり、14世紀後半の紀年銘をもつ獅子頭は正面観半球型で側面形態B類の形態になる変化が見られる。このような変化が妥当であれば、一対の獅子頭として扱われている防府天満宮所蔵獅子頭の一対や花尾八幡宮所蔵獅子頭一対、丹生神社所蔵獅子頭一対にはいずれも型式差がみられ、防府天満宮の獅子頭に残される銘文から考えると、花尾八幡宮所蔵獅子頭一対も同様に製作された時期差を反映するものと考えられる。一方広島県世羅町丹生神社所蔵獅子頭一対においては、正安三（1301）年銘獅子頭の方が無銘獅子頭より形式的には新しい特徴も見られる。これについては後に述べる植毛（穴）の数の減少や鼻梁から眼の縁にみられる形態の形式化が表面的に認識できる点から、丹生神社所蔵無銘の獅子頭が同正安三（1301）年銘獅子頭より後に写して製作されたものと考えるが、比較的忠実に、時間差が少ない時期に製作された結果と考える。表面の漆幕が正安三（1301）年銘獅子頭の方が多く剥落している点から無銘獅子頭より古く見えるが、この一対の獅子頭には後世の黒漆の上に金箔が貼られ、その後さらに黒漆が塗られていることから、表面的雰囲気は時期差には関係ないものと思われる。

次に獅子頭に残された植毛（穴）を見ると、山口県山口市朝倉八幡宮所蔵永和三（1377）年銘獅子頭を除いた他の獅子頭には頭部頂部と眉部、上唇、下顎に植毛（穴）があり、朝倉八幡宮所蔵獅子頭は眉部と上唇に金色の彩色による植毛表現がみられる。このようにみると14世紀後半には植毛（穴）がなくなるものもあるが、一対の獅子頭として製作されたものは、同じ位置にまねて植毛をする特徴が見られる。一方で各獅子頭の各部における植毛（穴）の数量は防府天満宮所蔵の一対の獅子頭に見られるように、正平十（1355）年修理銘獅子頭が正平十(1355)年製作銘獅子頭より植毛(穴)数が多く、花尾八幡宮所蔵の一対の獅子頭や丹生神社所蔵の一対の獅子頭においても植毛（穴）の減少する傾向が見られる。

以上の分析から花尾八幡宮、防府天満宮、丹生神社には中世にさかのぼる紀年銘の残る1対になる獅子頭が残されているが、花尾八幡宮と防府天満宮のものは、古い紀年銘の残る獅子頭は14世紀前半までの形態をもっているが、もう1つは表面の彩色や植毛は似せてあるが、全体の形態（肉取り）は14世紀中頃から後半のものである。よって花尾八幡宮と防府天満宮の獅子頭においては1対の獅子頭にする為、後に製作されたものは、前からある獅子頭ともう1つ別の獅子頭のモデル（製作者のイメージ）の存在が考えられる。また世羅町の丹生神社の獅子頭は、無銘の獅子頭について植毛の数が減り、鼻稜の形や眼の形においてやや鋭さがないものの正安三(1301)年獅子頭を忠実に写しており、正面観獅子型であることから、製作時期は正安三（1301）年獅子頭と比較的近い時期で、より古いタイプのモデルがもう一つ存在した可能性が高い。一方で丹生神社正安三（1301）年銘獅子頭の正面観が半球型である点は、14世紀において展開する半球型の始まりが見られる点で興味深い。

広島県三原市御調八幡宮所蔵獅子頭はこれまで平安時代の作とされてきたもので、上顎と下顎の口部の歯牙付近における大きな抑揚のある全体の肉取りや眉部の形態は防府天満宮の正平十（1355）年修理銘獅子頭や丹生神社所蔵正安三（1301）年銘獅子頭より明らかに異なる古い様相が見られる。しかし彩色されて残る全体の雰囲気は何故か丹生神社所蔵正安三（1301）年銘獅子頭によく似ている印象があり、地理的に近い丹生神社所蔵正安三（1301）年銘獅子頭の1つのモデルは、御調八幡宮所蔵獅子頭であっ

た可能性も考えられる。

平安時代後半から 14 世紀後半にかけての獅子頭の形態変化に併せて、植毛（穴）は 14 世紀初頭の紀年銘をもつ獅子頭には、眉部や上唇、下顎の縁部に多数の植毛（穴）が施されるが、14 世紀中頃から後半製作と考えられる獅子頭には植毛（穴）の数が明らかに減少しており、山口県山口市朝倉八幡宮所蔵永和三（1377）年銘獅子頭には植毛（穴）がないことから、14 世紀には急速に植毛の製作習慣は薄れていったものと考えられる。

（4）小結

以上の分析をふまえて、中世における東海地域と中国地方西部の獅子頭を比較する。

共通点として両地域の獅子頭の変遷が 14 世紀後半までの獅子頭において正面観獅子型から半球型へ、そして側面形態が A 類から B 類への変化がほぼ同様にみられることが明らかになった。一方、相違点として東海地域の獅子頭は鎌倉時代の中で植毛の数が減り、14 世紀には髭の少ないことが特徴といえる。

よって、愛知県愛西市日置八幡宮所蔵木造獅子頭の上顎は、正面観獅子型で側面形態が A 類であること、眉部と上唇に植毛（穴）が存在することから、鎌倉時代から 14 世紀前半の獅子頭の特徴をもつものであり、新たに確認された紀年銘と対応する。

日置八幡宮所蔵の獅子頭と尾張国日置荘

前節までの分析により、東海地域の獅子頭の形態の変化や特徴がある程度明らかにできたように思われる。ここではその成果をふまえて、今回、製作の紀年銘が判明した日置八幡宮所蔵獅子頭の分析を通じて考えられる東海地域のおける獅子頭の変遷と小地域色の性格について明らかにし、中世の愛知県愛西市日置町付近に存在した日置荘の文献的資料から日置八幡宮所蔵獅子頭の歴史的意味付けを考える。

（1）東海地域における鎌倉時代の獅子頭

まず鎌倉時代の獅子頭における細部の特徴を検討し、東海地域に見られる小地域色について考える。

日置八幡宮所蔵獅子頭と知立神社所蔵獅子頭を比較すると、全体の肉取りにおいては同じ分類をしたが、相違点としては鼻先から眼の前面までの長さが日置八幡宮所蔵獅子頭の方が知立神社所蔵獅子頭より長く、牙に伴う上唇の抑揚が緩やかである点、知立神社所蔵獅子頭の鼻梁や頭部の表現にみられる写実的な筋肉表現は日置八幡宮所蔵獅子頭ではより小さくなり、鼻梁の表現では形式した形態になる。また歯牙に見られる鉄製板や鼻先に見られる上唇からの切れ込みも知立神社所蔵獅子頭には見られるが、日置八幡宮所蔵獅子頭には見られない特徴である。共通する点は眉部と上唇に植毛が共にみられ、植毛数も類似する。これらは型式的に先行する形態と思われる知立神社所蔵獅子頭から日置八幡宮所蔵獅子頭への時間的変遷と同時に小地域色を示す地域的変容の可能性があるものである。

次に日置八幡宮所蔵獅子頭と東海地域の 14 世紀初頭の紀年銘がある獅子頭と比較すると、大まかな肉取りにおいては日置八幡宮所蔵獅子頭の方が牙に伴う上唇の抑揚が大きく表現され、比較的鼻先と眼の前面の距離が短い岐阜県美濃市真木倉神社所蔵嘉元三（1305）年銘獅子頭においても上唇の抑揚が小さくなる傾向が見られる。他の箇所の表現においては、三重県鈴鹿市伊奈冨神社所蔵弘□（安）三年銘獅子頭とは鼻梁が低い団子鼻である点は共通するが、頬にみられる巻毛の彫刻表現がある部分で異なり、美濃市真木倉神社所蔵嘉元三（1305）年銘獅子頭とは全体の分類では同じであるが、鼻先から眼の前面までが短い点、鼻梁が高い点、耳が細長い点などの特徴は異なっており、この 2 つの獅子頭に見られる特徴（日置八幡宮所蔵獅子頭との相違点）は 14 世紀後半以後の近在の獅子頭に見られ、小地域色として存在するものといえる。一方で、岐阜県岐阜市諏訪神社所蔵嘉元四（1306）年銘獅子頭のように低い鼻梁の団子鼻に植毛が比較的多く見られるものの存在は日置八幡宮所蔵獅子頭に近い特徴であるが、美濃地域の近在の獅子頭とは異なる。

よってこれらの小地域色と考えられるものは、後述する植毛（穴）表現にみられるように、地域全体が同じデザインや表情の獅子頭である訳ではなく、地域的傾向はあるがモザイク状に

分布するあり方が窺われ、鎌倉時代における地域的変容のあり方、つまり製作銘に残る獅子頭の工人が基本的には地方の神官や職人などであること（町田市立博物館 1996・1997 他）を反映しているものといえる。

（2）尾張地域に見られる植毛表現

また植毛と植毛表現についても、東海地域内において小地域色が見られる。植毛が比較的早い時期に消失する地域は岐阜県美濃地域の美濃市真木倉神社所蔵嘉元三（1305）年銘獅子頭や美濃市白山神社所蔵至徳二（1385）年銘獅子頭と同無銘獅子頭、美濃加茂市天神神社所蔵長享二（1488）年銘獅子頭に類例があり、14 世紀初頭の真木倉神社所蔵獅子頭には眉部の後方に左右に 3 個ずつ植毛が見られるだけであり、以後の時代的変化もあるが地域色として受け継がれたものである可能性がある。一方で愛知県尾張地域では 14 世紀前半の愛西市日置八幡社所蔵獅子頭から一宮市真清田神社所蔵文明三（1471）年銘獅子頭を経て、愛知県愛西市星大明社所蔵永正七（1510）年銘獅子頭まで、眉部の表現は植毛がなくなり、彫刻表現が見られるようになるが、上顎には植毛を残す状況が見られる。

このような植毛表現や耳や鼻にみられる表面的雑作の部分は、獅子頭を見る側の意識が強く反映されるものと考えられ、中世における尾張地域の人々は獅子頭には上唇の髭が存在するものという意識が存在したものと思われる。

（3）東海地域における獅子頭の型式変化の意味

先に述べた東海地域においてみられる小地域色とは別に獅子頭の正面観や側面形態といった獅子頭の肉取りに関する特徴は、やや時間差が存在する可能性はあるが東海地域全体における大きな変化であり、中国地方西部の検討でも見たように地域を越えて存在したものといえる。製作銘が残る獅子頭において工人が分かるものも基本的には地方の神官や職人などであることから考えると不思議な変化であるが、その時代毎の様式的変化と考えられるものである。特に側面形態 A 類から B 類、そして C 類への型式変化に見られる特徴は、歯の噛み合わせ音や眼の眼光により威嚇して邪気を払っていた古代の獅子頭から考えると、眼の表現が簡略化し鉄歯が消失すること、鼻先や口部分が大きく誇張されて表現されてくることは一連の変化であり、伎楽などの舞の仮面から行道に伴う舞の仮面への変化に伴う周囲への威嚇表現が意識されたものと考えられる。この変化は神社や寺院などの行道を執行する側の意図を受けた製作者の意識が反映された性格があるものと考えられる。

先に述べた小地域色と見られる地域的変容がその地域に残る獅子頭を見本に写して製作するという地方の獅子頭製作者（工人）の特色であるならば、このような現象の背景は各地域の製作者（工人）が独創的に類似したものを製作したと想定するより、中世前半期における獅子頭の新たなデザインを生み出した別の地域を介在したデザインの流入（入手）が存在した可能性が高いものと考えられる。

以上のような中世の獅子頭において東海地域と中国地方南西部にみられる型式変遷のデザインの発祥地としての候補地は、地理的には当時の政治・文化の中心地としての京都を候補地として考えるのが妥当であろう。

（4）日置八幡宮所蔵獅子頭製作の背景

愛知県愛西市日置八幡宮は日置八幡宮境内付近にて出土した明応二（1493）年九月二十八日の年紀をもつ日置八幡宮所蔵懸仏があり、その中に「日置庄　八幡宮」の刻銘があることから、同宮が日置荘の含まれていたことを示す。さて、この日置荘は平安時代後期には藤原氏領であり、その後文治三（1187）年十月二十六日、源頼朝がこの所領を源氏と縁の深い左女牛若宮に寄進していることが『吾妻鏡』に残されている。そして室町時代には左女牛若宮別当職は醍醐寺門跡の管領下に置かれることになり、当荘も応永六年以降は醍醐寺方管領諸文跡等所領目録（醍醐寺文書）にあげられている。左女牛若宮は室町時代においても所領が安堵され、応永十七（1410）年に足利義持の参拝を受けるなど、足利将軍家の厚い帰依を受けて栄えていたようである。よって日置八幡宮が所蔵する獅子頭の製作された鎌倉時代中頃は左女牛若宮領に属していたことになる。また現在日置八幡宮の東に隣接する大聖院は真言宗の寺院であり、古くは光明院と称し日置八幡宮の別当寺であった。光明院の開山は鎌倉期の僧明恵と伝えられるが、

『尾張志』は源頼朝の建立を伝えながらも「故縁定かならず、慶長十三戊申円誉法師再興す」と記す。明恵上人は鎌倉時代初頭に活躍した華厳宗の僧であるが、やはり旧光明院との関係は明らかではない。

したがって日置八幡宮との関係を確実に復元できるのは鎌倉時代から室町時代前半まで左女若宮八幡社領であった点であり、先に分析した獅子頭のデザインの系譜が京都にあることと矛盾しないものである。紀年銘のある鎌倉時代中頃は武家政権が基盤を強めていく時代で、日置八幡宮も元からの日置荘の経済基盤の上に存在したものと考えられ、木造獅子頭は製作された詳細な契機は定かではないが、当時における八幡信仰興隆を背景に製作され、祭礼に盛んに用いられたものと考えておきたい。

最後に今回の分析により正面観半球型の出現してくる変遷は示せたものと思うが、正面観箱型の出現してくる経緯は十分に示せていない。また獅子頭の分類として「嵩高」と「扁平」という分類との関係についても十分に述べることができなかった。これらの出現や消滅に関する経緯や背景についての解明は今後の課題としたい。

尚、今回の調査にあたり、お世話になり、ご教示を賜った多くの方々に記して感謝したい(50 音順、敬称略)。
神社・機関
［愛知県］知立神社、日置八幡宮、星大明社、真清田神社
［岐阜県］天神神社、白山神社、真木倉神社
［三重県］神館神社
［広島県］丹生神社、御調八幡宮
［山口県］朝倉八幡宮、花尾八幡宮、防府天満宮
愛西市教育委員会、一宮市博物館、岩手県立博物館、大田庄歴史館、桑名市教育委員会、桑名市博物館、知立市歴史民俗資料館、美濃市教育委員会、みのかも文化の森市民ミュージアム、山口県立山口博物館、知立市立歴史民俗資料館
個人
浅鍬毅、飯田清春、石井里英、石田泰弘、伊原慎太郎、岡田美穂子、神山巖夫、川向富貴子、久保禎子、桑原國雄、幸泉満夫、佐伯康男、榊原正勝、佐藤弘次、佐藤徳潤、鈴木宏明、清山健、旦野幸一、中西正史、幅榮治、林光輝、廣田紀昭、水谷芳春、村瀬英彦、山田二郎、山本昌治、横井孝夫、吉宮博胤、依田康宏

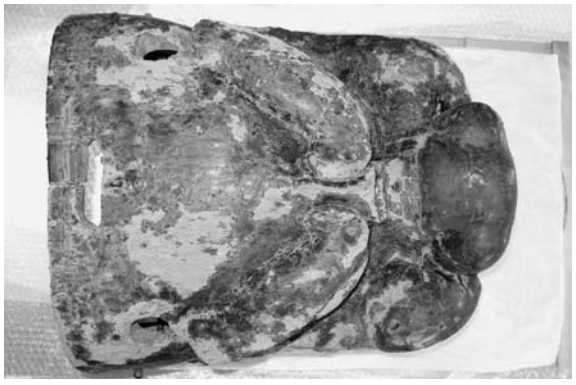
参考・引用文献

愛西市教育委員会 2008『あいさいの獅子頭−よみがえる中世の獅子頭−』
臼杵華臣 1984「防長の獅子頭」『防潮の獅子頭』防府天満宮
門屋光昭 1981「黒森神社の権現さま考」『岩手県立博物館だより』No.8 岩手県立博物館
田邊三郎助編 1981「行道面と獅子頭」『日本の美術』No.185、至文堂
田邊三郎助 1986「獅子頭の変遷−形態と技法−」『愁久』第 26 号、鶴岡八幡宮社務所編
田邊三郎助 1997「日本の獅子頭の変遷−形態と技法−」『獅子頭−西日本を中心に−』町田市立博物館
竹内理三編 1991 角川書店地名辞典『愛知県』角川書店
畠山豊編 1997『獅子頭−西日本を中心に−』町田市立博物館
早瀬輝美編 1996『獅子の世界』八代市立博物館未来の森ミュージアム
町田市立博物館 1996『獅子頭−東日本を中心に−』
山崎　摂編 1994『仮面の系譜』八代市立博物館未来の森ミュージアム
1982 角川書店地名辞典『京都府』角川書店

写真図版　日置八幡宮獅子頭関連写真

1

2


3

4

5

6

1：左前面　2：右側面　3：上面　4：下顎下面　5：下顎下面線刻名（財団法人元興寺文化財研究所撮影）
6：上顎線刻銘（写真は財団法人元興寺文化財研究所撮影。文字の線画は筆者加筆。左側写真が獅子頭上顎の線刻銘、右側写真が獅子頭上顎右側の線刻銘。）